

大狗山遺跡

—「金沢住宅団地」宅地造成に伴う
埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 —

1993年3月

茅野市教育委員会

TENGUYAMA SITE

天狗山遺跡

—「金沢住宅団地」宅地造成に伴う
埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 —

1993年3月

茅野市教育委員会

序 文

茅野市は国特別史跡尖石遺跡、国史跡上ノ段遺跡を始めとして、数多くの縄文時代遺跡がある縄文文化の宝庫です。ここに報告する天狗山遺跡は、この茅野市にある縄文時代から平安時代にかけての遺跡のひとつであります。

天狗山遺跡が位置する金沢地区は大正13年に信濃教育会諏訪部会から発行された『諏訪史』第一巻の調査で諏訪を訪れた鳥居竜藏博士によるケツヨリ遺跡の発掘が行われたところで、これが長野県下における考古学の本格的な学術調査の黎明となり、同書の上梓に多大な貢献をしたと言われています。

平成3年、天狗山遺跡、向坂遺跡一帯に住宅団地が造成されることになり、それに伴って遺跡の緊急調査を実施しました。同年に行った向坂遺跡の試掘ではローム層が既に露出しているところが多く遺物の散布もありませんでした。

平成4年度発掘調査されることになりました天狗山遺跡の実態については本書に記されていますが、縄文時代から平安時代にかけて40軒の住居址をはじめ幅広い時代の生活址が明らかにされたことは注目されます。中でも弥生時代の住居址は金沢地区で初見のものです。

発掘された天狗山遺跡の貴重な文化遺産と共に、本書が多くの人々に広く活用され、また郷土を知り学ぶことで、地域文化の向上に役立てば幸いです。

最後になりましたが発掘調査から本書の作成までご協力いただいた地元の皆さんに厚くお礼を申し上げる次第であります。

平成5年3月

茅野市教育委員会
教育長 両角昭二

例　　言

1. 本書は、茅野市土地開発公社理事長原田文也と茅野市教育委員会教育長両角昭二との間で締結した「埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書」に基づき、茅野市教育委員会文化財調査室が実施した平成4年度金沢住宅団地造成に伴う、長野県茅野市金沢天狗山遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は茅野市土地開発公社より、委託を受けて茅野市教育委員会が平成4年に実施した。調査の組織等の名簿は発掘調査組織として別載してある。
3. 発掘調査は平成4年5月18日から10月20日まで実施し、出土品の整理及び報告書の作成は平成4年10月21日から平成5年3月27日まで茅野市文化財調査室において行った。
4. 発掘調査から本書作成までの現場と、執筆は百瀬一郎が担当した。
5. 本報告書に掲載の遺構実測図は集石址を1/20、他の遺構は1/60の縮尺とした。遺物は基本的に1/3を原則として縮尺比の異なるもののみ比率をいれてある。
6. 調査区の基準点は国家座標基準点による。また遺構図面上に表されている北は座標北を示す。
7. 本報告にかかる出土品、諸記録は茅野市文化財調査室で収蔵保管されている。
8. 題字の揮毫は茅野市出身の書家、百瀬大雅氏による。

目 次

第Ⅰ章 調査の経緯	1
第1節 発掘調査に至る経過	1
第Ⅱ章 調査の方法	4
第1節 調査区の設定	4
第2節 遺跡の層序	4
第3節 調査日誌抄	6
第Ⅲ章 遺跡の位置と環境	12
第1節 遺跡の位置	12
第2節 遺跡の地理的環境	12
第3節 遺跡調査の歴史	12
第Ⅳ章 遺構と遺物	14
第1節 住居址	14
第2節 捃立建物址	27
第3節 墓 石	28
第4節 配石土坑	29
第5節 土 坑	30
第Ⅴ章 ま と め	41
…5…6…7…8…9… 100… 11012345678910	

第Ⅰ章 調査の経緯

第1節 発掘調査に至る経過

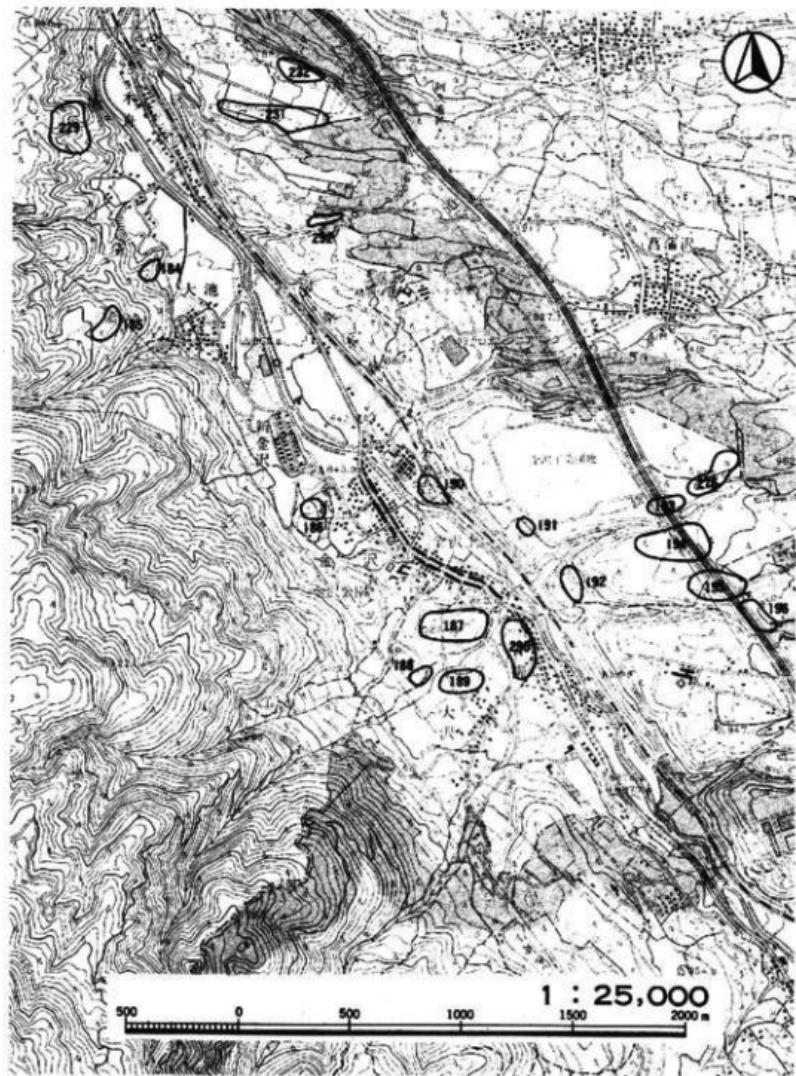
平成2年度に茅野市土地開発公社により、工場団地造成等による就業人口の増加及び、市外から茅野市に住宅地を求めての転入等による人口増により、行政による住宅用地の建設が急務となっている。こうした大きな要因により、住宅団地を建設し、金沢地区の人口増加・地域の活性化・住宅用地の提供等多くの問題解決を図ろうと「金沢住宅団地」の造成工事が計画された。住宅団地用地である茅野市金沢古新井周辺（通称天狗山を含む）には向坂遺跡、天狗山遺跡の所在が知られており、平成2年6月21日に茅野市土地開発公社、茅野市都市計画課、茅野市教育委員会による金沢住宅団地造成事業に伴う保護協議が実施され、計画が具体的に決定次第再協議することとした。

茅野市教育委員会では平成3年4月15日に、遺跡範囲の一部がかかる向坂遺跡の試掘調査を実施したところ試掘範囲は表土層が15cm前後と浅く、下層のローム層が露出している部分が大半で遺物の散布も認められなかった。

天狗山遺跡については平成3年6月18日に実施された平成4年度以降埋蔵文化財保護協議の結果、約2,100m²の発掘調査を実施し、記録保存を行うこととした。

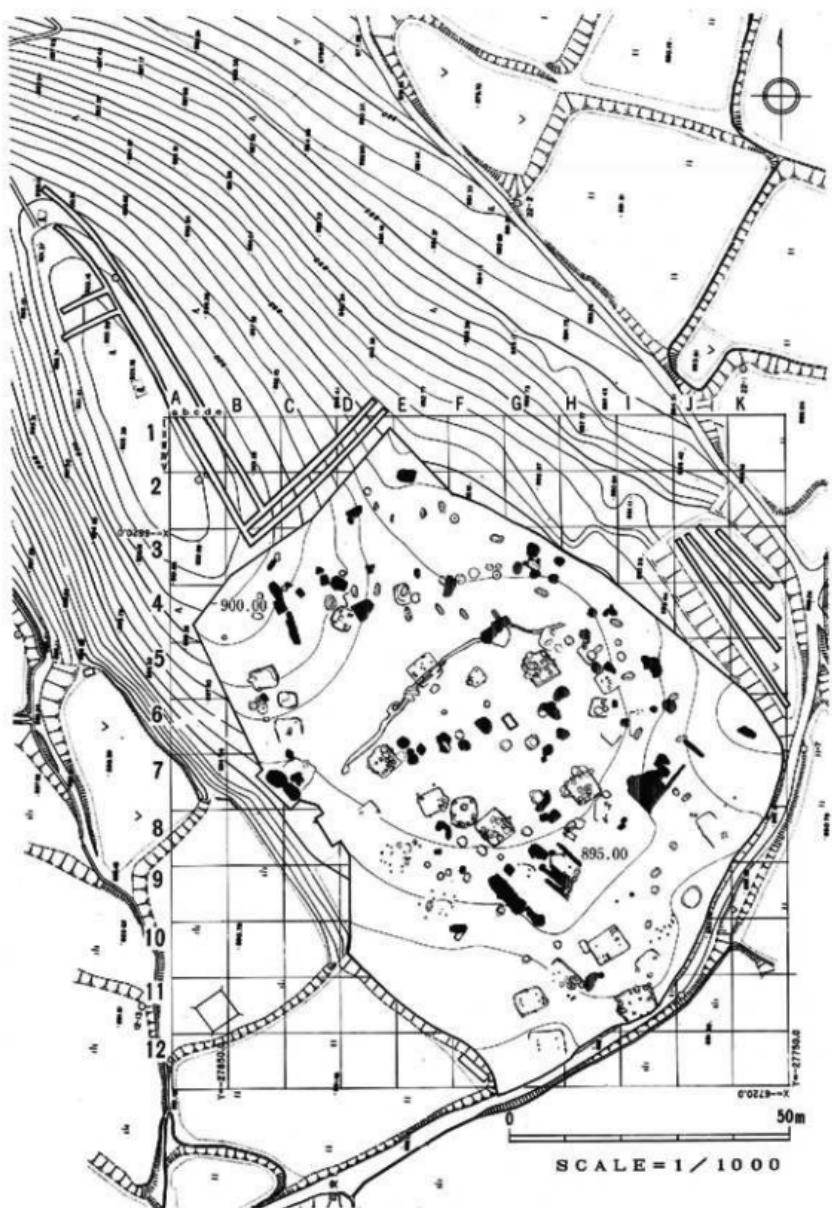
天狗山遺跡の発掘調査は平成4年5月18日から10月20日まで行われた。

なお天狗山遺跡の名称について昭和54年度八ヶ岳西南麓遺跡分布調査報告書において天狗山とされているが小字名を調査すると古新井（ふるあらい）、笹の山、山の神、馬飼場（ばんげいば、あるいはばんがいば）と四箇所が記されており天狗山という小字はない。しかし、1733年（享保18年）に高島藩五代藩主諱忠林が領内一村ごとに描かせた絵地図『旧諱忠藩主手元絵図』（長野県総務部文書学事課保管）の金澤町、大沢新田、大池新田に記され、地元でも頗る染みの深い天狗山をそのまま使用した。



188天狗山、187向坂、189芥沢、230はごや
194判の木山西、195判の木山東、196金山沢北、197頭嶺沢上
184ケツヨリ、231阿久尻、232下原山・茂佐久保

第1図 遺跡の位置



第2図 調査グリッド設定図

第II章 調査の方法

第1節 調査区の設定

天狗山遺跡はその規模、内容が山林、原野化していたため不明の部分が多く、調査はまず遺跡の範囲を確定するためトレンチを天狗山の平坦部分と斜面との境付近に複数に入れた。調査区は伐採業者が枝打ちをした後、ゴミ焼きをした時に飛び火が下草に燃え広がったため土を被せて鎮火しており、全体の3割ほどがこの時の採土によりかなり深くまで荒らされていた。そこで表土剥ぎは基本層序を取る部分を残し、全面を行なうこととした。グリットの設定は公共座標 X = -6550.0, Y = -27790.0 を基準軸とし 10m四方の大グリットの中に 2m四方の小グリットを配置した。大グリット小グリットとも X 軸を数字、Y 軸をアルファベットで表し、大グリットは大文字のアルファベットとアラビア数字、小グリットは小文字のアルファベットとローマ数字の組合せで例えば Aa-1 I と表示して小グリット一つ一つをブロック分けしている。

第2節 遺跡の層序

天狗山の層序はテラス部分ではごく薄いところもあり特に西側では表面の熊糞を剥いだだけで遺構が現われなどの状況下にあったので山頂からテラス部分においてきた境の土層が厚く堆積している所を対象にした。

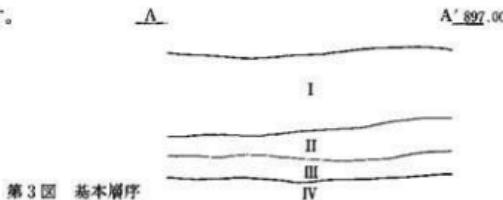
層序は上位から I. 暗黒色土、II. 暗褐色土、III. 暗黄褐色土、IV. 黄褐色土、V. 黄褐色ハードロームとなっている。

第I層は腐葉土で色調は暗黒色、粒子が細かく、粘性を持ち、保水性が強く乾燥すると暗灰色を呈する。

第II層が繩文から平安時代にかけての遺物包含層で色調は含む水量により暗褐色から褐色に変化する。粒子は細かく粘性を持ちローム粒子や炭化物を含む所がある。

第III層は遺構のローム崩落土と二次堆積土で色調は黄褐色、粒子は細かく、粘性を持つ。

第IV層はハードロームで色調は黄褐色、粒子は細かく、粘性を持つ。水はけがよく乾燥し始めるとすぐひび割れを起こす。



第3図 基本層序

発掘調査組織

本調査は茅野市教育委員会の直轄事業として実施し、その組織は次の通りである。

調査主体者 両角 昭二 (茅野市教育委員会教育長)

事務局 原 充 (茅野市教育委員会教育次長)
水田 光弘 (茅野市教育委員会文化財調査室長)
鵜飼 幸雄 (茅野市教育委員会文化財調査室文化財係長)
両角 一夫 (茅野市教育委員会文化財調査室主任)
大月三千代 (茅野市教育委員会文化財調査室事務補)

調査担当 守矢 昌文 (茅野市教育委員会文化財調査室主任)
小林 淳志 (茅野市教育委員会文化財調査室指導主事)
小池 庄史 (茅野市教育委員会文化財調査室主事)
功刀 司 (茅野市教育委員会文化財調査室主事)
百瀬 一郎 (茅野市教育委員会文化財調査室主事) (現場担当)
小林 健治 (茅野市教育委員会文化財調査室主事)
山崎 貴弘 (茅野市教育委員会文化財調査室嘱託)
五味みゆき (茅野市教育委員会文化財調査室嘱託)

調査補助員 赤堀 彰子 伊藤千代美 牛山 徳博 占部 美恵
小松とよみ 関 喜子 武居八千代 堀内 淳

発掘調査・整理作業参加者

阿部 憲一	相原 公	青木 久子	青木美恵子	伊藤 勇
伊藤 隆	伊藤 忠寿	飯島 正彦	今井 利徳	今井 好孝
今井 芳博	牛山寿美子	牛山 博	小沢 貞美	大藏 豊
柿沢ゆかり	春日 雅彦	金子 清春	北沢 賢一	小池 俊正
小平 晃	小平 長茂	小林 久子	小林 弘夫	小松 周次
小松 光子	五味 ふみ	齋藤香代子	清水 澄人	清水 國恵
篠原 弘明	白鳥 順也	白旗スエ子	関 朋子	曾田 啓子
高橋 明子	立木 利治	立石 淳二	名取 房子	永井 智恵
長岡 精	永田 美和	成田かのゑ	成田多喜雄	野口 土久

野口 初美	馬場きん子	原田 昌辛	樋口 喜美	平沢 精一
藤森あゆみ	藤森 龍	堀田 桜子	洞沢ルリ子	松下 亨
宮坂 佳樹	日黒 恵子	矢嶋 浩行	矢島 富子	矢島 良枝
柳平 あい	柳平いつ子	柳平 一貴	柳平 年子	柳平 文
柳平 裕子	山下 こめ	山田富美恵	山田 良子	
金沢小学校4・5・6年生		金沢小学校PTA		
秋山 順一 鶴石 陽 林 正樹 矢島 泰緒（以上長峰中学校生徒）				
小田島英司 圧地 智久（以上富士見高原中学校生徒）				

遺物測量委託 中央航業株式会社 代表取締役 村田 安章（東京都新宿区高田馬場4-11-13）

発掘調査期間中、事業主体者の茅野市土地開発公社、工事請負者である常富興業高見土建共同企業体の方々には、埋蔵文化財に対して深いご理解と協力を賜り、金沢区民、金沢小学校、安藤宇三郎金沢地区区長会長、藤原一登金沢上区長、地元の北原明、名取甚市、桶口正木、細川光貞の各氏には絶大なるご協力とご教示を賜った。また宮坂光昭諫訪考古学研究会会長、岡谷市教育委員会の会田進氏からは貴重で有益なご指導、助言をいただいた。ここに深甚なる謝意を表したい。

第3節 調査日誌抄

4月21日 晴 発掘調査前の写真撮影と表面採集のため、現地踏査を行う。天狗川は伐採業者が枝打ちした小枝やゴミを焼いた際、下草に飛び火してこれを鎮火するため土を被せ消火されており、採土した穴の跡が斜面から平坦部にかけて十数個所あった。表面採集は現場が原野化したままであったのでほとんどできなかったが、採土された穴と被せ土から繊維土器と縄文中期末の土器片、黒曜石片等を拾うことができた。その結果、調査範囲は当初予定よりかなり広くなることが予想される。

5月7日 晴 重機業者と現場打合せ。

5月18日 雨 発掘機材の搬入と、台地南東の水田部分に四列のトレーナを入れるが、削られ引き上した跡地への開田だったので深さ30cm程で礫層に当たり、遺構、遺物の検出はなかった。

5月20日 薄曇り 抜根作業開始。繊維土器、石鐵等が出土した。

5月21日 晴時々雨 抜根と土スキ。台地先端の原野化した畑地で木の伐採始まる。

5月22日 曇り 抜根と土スキ終了する。

5月25日 晴 表土剥ぎ作業開始。調査範囲確定のため平坦部の斜面肩に複列のトレーナをいれ、

山頂からの斜面も黒曜石片が検出された外側のトレンチから平坦部の全面に向けて剥ぐことにして、山頂部には四列トレンチをいれてみる。山頂部のトレンチはいずれも表土がローム層まで10~15cmと薄く遺物もなかったことから調査区外として範囲を確定した。住居址を3軒検出。

5月26日 晴 表土剥ぎと遺構検出、住居址11軒に。

5月27日 晴~時雨 水田室長が始業の挨拶を行い、作業員現場に加わる。表土剥ぎと遺構検出、安藤宇三郎金沢区長、藤原一登金沢上区長訪れる。住居址20軒に。

5月28日 雨 表土剥ぎと遺構検出、住居址40軒に。

5月29日 晴 剥いた土の移動と遺構検出。

5月30日 雨 遺構検出と表土剥ぎ。雨強く作業員は午前中で作業中止。重機は午後も表土剥ぎを行う。

6月1日 晴 遺構検出と表土剥ぎ。住居址を掘り始める。シルバー人材センター会員作業に加わる。1号住居址は平安時代の内黒土器、2号住居址から繊維土器片出土。

6月2日 晴 遺構検出と表土剥ぎ。基本層序を取る。

6月3日 晴 遺構検出と住居址発掘。2・4住居址は壁の検出を行う。

6月4日 晴のち曇り 住居址発掘。4号住居址は焼土を検出。

6月5日 曇り一時雨 住居址、土坑の発掘。金沢保育園児が見学に訪れる。

6月6日 晴 住居址、土坑の掘り下げ。

6月8日 雨のち晴 3・5・6号住居址を掘り始める。3号住居址から縄文時代中期末の土器片出土、柱穴、周溝を検出。5・6号住居址から繊維土器片出土。5号住居址の焼土を検出。6号住居址内に礫の集中するところがあり、住居址を切っている。

6月9日 晴時々曇り 5号住居址の壁検出、陥し穴との切りあいと搅乱により住居址残存部は4分の1以下、プランもはっきり検出できない。7・8号住居址掘り始めるがいずれも浅い掘り方で床面を検出、繊維土器片出土。

6月10日 曇り時々晴 陥し穴底に小穴が検出される。7号住居址は2本の浅い溝が切り、この溝は台地平坦部を南西から北東方向へ走っている。

6月11日 曙時々雨 土坑と10号住居址を掘り始める。平安時代の内黒土器出土。

6月12日 晴時々曇り 土坑と10号住居址を掘り進める。10号住居址から内黒土器の杯出土。雇用促進事業団、長野雇用促進センター、茅野市開発公社の関係者が訪れる。

6月15日 雨時々晴 作業中止。午後業者による基準点測量を行う。市開発公社から造成工事の土量が不足しているので採土要請があり、6月30日に山頂側の一部を切り渡すことにする。

6月16日 晴時々曇り 土坑と10号住居址の掘り下げ。切り渡し部分に2mメッシュのグリット杭を打ちはじめる。10号住居址から甕片出土。

6月17日 曙り 土坑を掘り下げ、10号住居址ベルト部分を残して掘り上げる。杭打ちの済んだ部分に水糸を張り始める。

6月18日 曇り 切り渡し部分を中心に土坑を掘り進む。水糸を張り終え表土剥ぎ後のコンタを取り始める。

6月19日 晴時々曇り 金沢小学校の5・6年生70人が見学に訪れ、発掘作業にも参加して11号住居址を各学年1時間づつ掘り、平安時代の土器片が出土した。報道関係者の取材も多い。金沢住宅団地造成工事工程会議が現場事務所で開かれ、土量の不足と遺跡調査で大型機械の動きが取れず、用水の切り回しもできないため、工程進行にも支障が起きている。切り渡し部分を多くしてほしいと強く要請を受けたが作業員の確保もままならない現状を説明して、前回要請を受けた山頂から平坦部に至る間の斜面を6月末に切り渡すことを決定する。コンタを取り続ける。

6月20日 曇り 切り渡し部分の抜根穴を中心に掘り進む。午後、昨日発掘調査に参加した金沢小学校の生徒有志が山田先生に引率されて来て続きを掘った。コンタを取り続ける。

6月22日 曇り八ヶ岳に積雪 切り渡し部分の遺構を掘り始める。引渡し部分のコンタ完成する。

6月23日 曇り後雨 上場沢から作業員の動員を始める。切り渡し部分抜根穴の下から陥し穴を検出する。午後2時すぎ雨が強くなり早仕舞にする。

6月24日 雨後晴 作業中止。実測準備のため調査補助員が訪れる。

6月25日 晴時々曇り 調査補助員による実測と切り渡し部分の遺構を掘り進む。遺構の検出状況の写真を撮り始める。

6月26日 晴 切り渡し部分の発掘と実測。

6月26日 晴 実測作業に重点を置きながら掘り進める。

6月29日 曇り 実測作業に重点を置きながら掘り進める。

6月30日 雨 朝から雨強く作業中止。作業員不足に対応するため市役所新入職員体験研修で天狗山遺跡の発掘作業を行うことが決定する。

7月1日 晴時々曇り 切り渡し部分の清掃作業と写真撮影。陥し穴が平坦部東側肩の境から一基出土。山頂部からここまでを引き渡す。

7月2日 曇り時々晴 11号住居址と12号住居址を掘り始める。12号住居址から織維土器と東海系の七器が出土した。コンタ取り再開する。

7月3日 曇り時々晴 11・12号住居址を掘り下げる。

7月4日 曇り 11・12号住居址の掘り下げと13・14号住居址を掘り始める。13号住居址からは黒曜石片が多量に出土。14号住居址は約半分が攪乱を受けている。両住居址とも土器片は少ない。市澤英利長野県教育委員会文化課主事が訪れる。

7月6日 晴 文化財行政の理解と入手不足解決の一助として市役所新入職員体験研修を実施して、調査区の根切りと、15・16号住居址の発掘を行う。市役所庶務課、市開発公社の職員も参加。長峰中学の生徒数人が見学に来て発掘の体験もする。15号住居址は绳文時代中期末、16号住居址は平安時代の土器が出土した。

7月7日 曇り 15・16・17号住居址を掘り進む。17号住居址から平安時代の土器が出土した。

コンタを取る。

7月8日 晴 15・16号住居址の掘り下げ。15号住居址で周溝の一部を検出する。

7月9日 晴 15・16号住居址を掘り下げて、18号住居址に着手。16号住居址は遺物検出の状態まで掘り終わる。18号住居址の遺物包含層は浅く平安時代の土器が出土した。調査補助員の動員をして実測を進める。宮城教育大付属中学校3年生4人が小平恭尖石考古館館長の案内で訪れる。7月10日 晴 19号住居址に着手する。住居址の平面図を取り始め、調査補助員を動員する。19号住居址から織維土器が出上る。

7月13日 曇り 住居址を掘り進む。土坑の清掃を行い、遺構検出の写真撮影をした。

7月14日 小雨後雨 4号住居址のセクションベルトをはずして、17号住居址の遺物を取り上げる。雨が強くなり午後2時すぎ作業中止する。

7月15日 曇り 1号住居址カマドと7号住居址掘り上げ。

7月16日 曇り 土坑の掘り下げと7・14号住居址の清掃。

7月17日 曇り 後雨 20・21号住居址に着手する。雨が強くなり午後4時すぎ作業中止。

7月18日 雨 作業中止。金沢小学校4年生PTA発掘体験会は延期。

7月20日 晴 19・20・21号住居址を掘り進む。

7月21日 晴 19・20・21号住居址を掘り進む。20・21号住居址は遺物が少ない。

7月22日 曇り 捣乱部、土坑の掘り下げ。

7月23日 晴 土坑の掘り下げ。

7月24日 晴 10・18号住居址のセクションベルトをはずしと土坑の掘り下げ。

7月25日 晴 午後から金沢小学校4年学級PTAによる発掘体験会が50人が参加して26・28・29・40号住居址で行った。28号住居址から四耳壺片が出土、40号住居址からは弥生時代後期の土器片が出土した。

7月27日 晴 実測と掘り進み。

7月28日 晴 11・17号住居址の清掃と掘り進み。

7月29日 晴 15号住居址遺物出土状況の写真を撮影。台地平坦部先端を堀り始める。

7月30~31日 調査員、研修のため現場を休みとする。

8月1日 晴後曇り 台地先端部を中心に掘り進む。28号住居址から須恵器、土師器片が出上り、雨が強くなり集石が3個所洗い出される。北原明文化財審議委員訪れる。午後3時半すぎ作業中止。

8月3日 曇り 土坑のセクション、エレベーションを取りながら掘り下げる。市開発公社から再度切り渡し要請あり。

8月4日 曇り 27・28・29号住居址を掘り下げ、新たな土坑も掘り始める。

8月5日 曇り 27号住居址に隣接して70号土坑が検出され、完形の灰釉碗、皿セットが出土した。30・31号住居址を掘り始める。織維土器が出上る。

- 8月6日 晴 53号土坑から貝殻腹縁文土器片が出土。土坑、住居址を掘り進む。長峰中、富士見高原中の生徒3人が見学に来て発掘の体験をする。
- 8月7日 曇り 新規造構に取りかからず掘り下げを行う。2号集石の清掃、写真撮影。
- 8月10日 晴 9号住居址を掘り始める。平安時代の土器片出土。
- 8月11日 曇り 33号住居址を掘り始め、繩文時代早期の押型文土器片が出土する。
- 8月12日 曇り時々雨 写真撮影に重点を置き住居址の清掃作業を主として行う。
- 8月13日 雨 作業中止。現場はローム面が滑り危険な状態になる。
- 8月14日 晴時々曇り 清掃作業を行う。盆休みで見学者が多い。
- 8月15日 晴 清掃作業と30号住居址の號を出す。市外からの見学者が多い。
- 8月17日 晴一時雨 掘り下げる。
- 8月18日 雨後晴 雨のため実測できず、全員で台地先端の礫群を掘り始め32号住居址とする。
- 8月19日 雨 32号住居址から押型文土器片が出土。霧雨強くなり午前中で作業中止。
- 8月20日 曇り 26号住居址と設定していた部分は、上部が全面にわたり擾乱を受けていたため下部に残る焼けた石組を配石土坑とする。11号住居址の床下土坑を掘り始め、台地東側の土坑にも着手する。
- 8月21日 雨後曇り 32号住居址から押型文土器尖底部分出土。11号住居址掘りぬき終了する。
- 8月24日 曇り 32号住居址の掘り下げる。
- 8月25日 晴 32号住居址周辺を掘り広げる。要請のあった土取り用の切り渡しをする。
- 8月26日 晴 20号住居址を清掃し写真撮影、32号住居址周辺更に広く掘り下げる。20号住居址北側まで切り渡す。
- 8月27日 晴 摶乱の多い部分に焼土と壁の検出ができるところがあり、34号住居址を設定する。集石新たに2箇所検出する。
- 8月28日 晴 15号住居址の掘りぬき、9号住居址清掃。
- 8月29日 晴後曇り 35号住居址を掘り始める。弥生時代後期の土器片出土。原村教育委員会の平出一治氏訪れる。
- 8月30日 晴 35号住居址を掘り下げる。床直上から土器底部出土。
- 9月1日 晴 35号住居址の炉を検出。
- 9月2日 曇り 32・34・35号住居址を掘り進む。
- 9月3日 曇り 16号住居址の清掃。
- 9月4日 晴後曇り 24・35号住居址を清掃し写真撮影。
- 9月5日 晴 16号住居址を清掃。
- 9月7日 晴 9号住居址の掘り下げる。
- 9月8日 晴 9号住居址の掘り下げる作業を続ける。16号住居址清掃し写真撮影。
- 9月9日 晴後曇り 9号住居址の掘りぬき。台地の東側を大幅に切り渡す。

- 9月10日 晴 23号住居址清掃。59号土坑から灰釉の高台付杯、皿が完形で出土した。
- 9月11日 晴時々曇り 30・31号住居址清掃して写真撮影。
- 9月14日 曇り 掘乱部を重点に掘り下げる。
- 9月16日 晴時々曇り 16号住居址掘りぬきにかかる。造成工事の始まったIH天狗山の山頂から約11m下の地点から炭化木が出土した。
- 9月17日 晴時々曇り 16号住居址の掘りぬき完了。
- 9月18日 曙り 27号住居址を清掃して写真撮影。
- 9月19日 雨 作業中止。
- 9月21日 晴後曇り 配石土坑周辺を掘り下げる。
- 9月22日 晴 36号住居址掘り始める。配石土坑周辺の掘り下げ。
- 9月24日 曙り 34号住居址掘りぬき。
- 9月25日 雨 作業休み。
- 9月28日 晴後曇り 34号住居址清掃して写真撮影。
- 9月29日 小雨 現場作業中止。作業員は調査室で土器洗いを行う。
- 9月30日 晴 28号住居址清掃して写真撮影。
- 10月1日 曙り 調査補助員を増員。28号住居址から金と書かれた墨書き土器出土。
- 10月2日 晴 25号住居址清掃して写真撮影。
- 10月3日 晴 25・28号住居址掘り下げる。
- 10月5日 雨 37号住居址清掃。雨強く午前10時半すぎ作業中止。
- 10月6日 晴 36号住居址堀り始める。繊維土器出土。八ヶ岳に初冠雪。
- 10月7日 晴 集石の実測ほとんど終了。
- 10月8日 曙り後雨 38号住居址掘りぬきにかかる。
- 10月9日 雨時々曇り 38号住居址掘り上げの途中で雷雨となる。午後4時作業中止。
- 10月12日 曙り 作業小屋を撤去して表土剥ぎを行う。39号住居址掘り始める。
- 10月13日 雨 作業中止。
- 10月14日 曙り 39号住居址掘り下げる、弥生時代後期の住居址となる。
- 10月15日 雨 作業中止。
- 10月16日 曙り 29・40号住居址プラン確定のため掘り下げる。
- 10月17日 晴 横列址を検出。
- 10月19日 曙り後雨 撤収作業を行うが午後2時半すぎ雨強く作業中止。
- 10月20日 雨 午後晴れてきたので急遽作業を行う。撤収終了。

第Ⅲ章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置

天狗山遺跡は茅野市金沢地区に所在し、青柳駅の西700mに位置する。金沢地区は諏訪湖に注ぐ宮川とその支流の河川によって形成された谷合に主な集落があり、北西方向に緩やかに傾斜している。天狗山とはこの金沢と大沢の集落の間にある独立丘の名称で地元では「てんぐやま」あるいは「てんごやま」と呼び、金沢で一番先に春が訪れ、秋にはきのこ狩りのできる場所として親しまれていた。

第2節 遺跡の地理的環境

金沢は糸魚川～静岡構造線上にあり西に赤石山脈北端の入笠山系の急斜面が迫り、東は八ヶ岳の山麓が広がっている。天狗山は八ヶ岳山麓が断層によって切り離され、これを宮川支流の金川と中野沢川が侵食して形成した小円錐丘（丸山）で北西から南東に細長く、頂上（903.76m）は北西に寄っており南東側は平坦部になだらかな斜面が続き中野沢川に落ち込んでいる。天狗山の地質は苦鉄質岩類・緑色岩類・粘板岩類など火成岩や堆積岩の円錐上にローム層が乗っていた。また山頂から11m下の地点で炭化木が出土している。

金沢には標高1,600mの千軒平湿原があり金川の水源となっている。涌水は地下水位が高いこともあって下田川の大清水を始めとして各所にあり、天狗山の近くでは南西の鉄塔付近と農道に隣接する水田内の南側に水量は少ないが湧き出でおりイモリが生息している。

交通の要衝として栄えた金沢は現在も中央自動車道、国道20号線、JR中央東線等の幹線が整備され長野県と首都圏を結んでいる。江戸時代には甲州街道の宿駅が置かれ、大沢から金沢峠（松倉峠）を越える伊那高速街道や山浦方面（八ヶ岳西南麓）との分岐点として商業の要所としても栄えた。中世の主要道である鎌倉街道の道筋も大沢から天狗山の東、金沢近隣公園の西などに残っている。幹線道とは異なるが諏訪神社（現諏訪大社）上社御射山祭のため御射山社（原山様）に向かう参道が穂屋之木明神から称宣坂を登り、社域に通じており御射山道と呼ばれているがこれも古くからの道であろう。

第3節 遺跡調査の歴史

天狗山遺跡の発掘調査は今まで行われたことはないが、金沢にはその後の研究に多くの問題を投げかけることになった発掘があるので、主なものを列記してみる。金沢で考古学の学術的遺跡

調査が行われたのは1920年（大正9年）に信濃教育会調訪部会の委嘱で郡史編纂資料収集のため調訪を訪れた鳥井龍藏博士によるもので木舟の芝平俗称ケツヨリでは発掘調査が行われている。この時住居址と推測される竪穴が掘られ糸切り底の須恵器や弥生土器らしきものもあり、出土した土器片の中には縄文時代早期の楕円押型文土器が含まれていた。1922（大正11年）この報告を行った八幡一郎氏は押型文土器研究の先駆者となった。現在も発掘時の遺物は金沢小学校に保管されているが、校舎改築時に他の遺跡の出土遺物と混ざり分別できなくなっている。1924年（大正13年）に「調訪史」第一巻が発行され鳥居博士がこの竪穴の報告を行っている。また同書の調訪郡先史時代遺物発見地名表の金澤村にはハゴヤ、芥澤、西畠、狐塚、原山、柳木澤、久保畑、茂左衛門座、古屋敷、竹原上（ケツヨリ）、芝平、金澤峠、金澤山が、原始時代遺物発見地名表に矢ノロ、諏訪郡古墳調査表には稚子塚が記載されている。天狗山の記載はない。

1953年（昭和28年）天狗山と中野沢川を挟んで南東に位置する芥沢遺跡の小発掘が藤森榮一氏、戸沢充則氏らによって試みられ、道路沿いのごく狭い範囲を発掘しただけで全体は不明だが縄文時代早期末から前期初頭の住居址の一部が発見された。この時検出した遺物については、1983年長崎元廣氏により再確認がなされ、隆帯系と沈線系の両者が存在していることが明確にされた。

1975～1978年（昭和50～53年）には中央自動車道建設に伴う発掘調査が行われ、金沢の八ヶ岳西南麓に位置する遺跡において空白となっていた部分の性格解明が進んだ。この中で注目されるものは判ノ木山西遺跡で出土した縄文時代早期の周辺地域で類例のない土器群で現在も分析が課題となっている。

1990～1991年（平成2～3年）金沢工業団地造成に伴い発掘調査が実施された阿久尻遺跡は方形柱穴列が19基検出され、縄文時代前期前葉の集落論に隣接する国史跡の阿久遺跡とともに多くの問題点を投げかけている。

第IV章 遺構と遺物

第1節 住居址

1. 第1号住居址（第5図、図版4-①②）

Bd-5 IVグリットにあり南東向きの斜面に位置する隅丸方形の住居址。長軸3.88m×短軸3.30mで斜面北側の壁高は50cmを越える部分もあるが、南側の壁は立上りを僅かに検出できる程度で、竈は西側にあり石組竈中には2個体分の甕片（第5図10, 11）が入っていた。北側に袖石の一部が残存するだけで他の部分は壊されている。礫が散らばる東側にごく僅かな焼土粒子を含む層があり竈破却時の灰が飛び散った跡であろう。床面はかなりしっかりしているが北側に若干高くなる部分がある。床面で柱穴は明瞭に検出できなかったが竈の手前側に床面から30cmほどの楕円形の穴が検出された。周溝は北から東を周り南西隅まで竈のある西側では検出できなかった。南西隅では少量の鉄滓粒が検出されている。

遺物は土師器がほとんどで、須恵器片が一点、灰釉陶器片が一点、砥石片が二点、繩文土器片と黒曜石片が数点づつ出土した。出土した土器で完形のものはないが、土師器で器形復元可能なものがあるので図示しておく。

2. 第2号住居址（第6図、図版4-③）

Ca-6 Iグリットにあり南向き斜面に位置する。長軸2.86m×短軸2.62mで壁の立上りは南東隅を除いてしっかりしている。床面北西側は平に近いが南東側半分は皿状に浅く凹む。焼土、柱穴、周溝の検出はなかった。

遺物は黒曜石片と繩文土器片十数点出土している。

3. 第3号住居址（第6図、図版5-①）

Da-4 IVグリットにあり東向き斜面に位置する隅丸方形の住居址。一部採土による擾乱を受けしており現存する長軸は3.56m×短軸3.16mで、北から西、南の隅まで壁の検出ができた。床面は硬くしまっていて、南東側へ緩やかに傾斜している。周溝は東側の約三割が擾乱で欠損している。床面の柱穴は8本が検出され、4本づつ（P-1.3.5.7とP-1.4.6.8）がほぼ同じレベルとなるので、少なくとも2回の建てかえをしていると思われる。炉は中央からやや北西よりにあり、表土剥ぎの時に直上から繩文時代中期後半の土器片（第6図4）が出土した。炉石はほとんどが抜かれている。焼土も炉の底に焼け残りの部分があるだけで、灰を取り出したためか東側に不正形の穴があった。埋甕はなかった。

遺物は中期末の土器片が十数点出土しており、炉の中から（第6図3）が検出されている。蛇

紋岩製で刃部の一部に刃こぼれによる欠損が見られる小型磨製石斧が一点出土している。黒曜石片は数点出土しているが製品はなかった。

4. 第4号住居址（第7図、図版5-②）

Ca-6 IVグリットにあり南向き斜面に位置する住居址。南側は流されている。現存する長軸は4.12m×短軸3.92mで、壁は南側約三割が欠損している。また西側で拔根時の擾乱で壁の立上り部分だけを検出したところがある。住居址内にはかなりの礫が流れ込んでおり、床面ははっきり検出できずローム層下の礫層に到達した。柱穴も不明で、周溝も判らなかったが、炉の部分は礫が地山のものとは異なり、焼土も残っていたので区別できたが形は崩れている。

遺物は織維土器を中心に土器片十数点が出土しており特徴あるものを図示する（第7図1, 2）。黒曜石片は十数点出土しており、折れた石錐が一点、調整痕のある剝片が一点含まれている。

5. 第5号住居址（第7図、図版5-①）

Db-4 IIグリットにあり東向き斜面に位置する住居址。採土した跡と陥し穴、斜面に切られて、残存部は三削弱と思われる。調査前の写真を撮影に訪れた際発見した住居址で、この時すでに住居址の半分は土が掘り出されて大きな穴が開き、焼土の一部が露出して中から織維土器の破片がむき出しになっていた。現存する長軸2.23m×短軸1.42mで、壁も西側角が残っているのみ、立上りはかなり明確に検出できた。床面の締まりは硬く、柱穴、周溝は検出できなかった。東側半分は流れ欠けている。炉は地床炉、残っている部分は広めで厚く、セクションにかかっている部分では、径15cm以下の焼土ブロックが散っている状態だった。

遺物は織維土器片が二十数点出土しており特徴あるものを図示する（第7図3, 4, 5）。黒曜石片は十数点出土しているが製品はなかった。

6. 第6号住居址（第8図、図版5-③）

Eb-4 IIグリットにあり南向き斜面下のテラス状になった平坦部に位置する。北東側に擾乱を受けたところがあり壁の立上り部分も削り取られている。床面の中央から北東にかけて1号集石が切っている。長軸3.28m×短軸2.72mで、壁の立上りはしっかりしているが壁高は最大でも10cm以下だった。床は斜面に沿ってなだらかに傾斜し途中で段が付いて皿状に中央部分が凹む。床面の締まりは固めで、柱穴、周溝、焼土とともに検出できなかった。

遺物は織文が施文原体となっている織維土器（第8図1）と、東海系の土器片が一点出土している。黒曜石はチップを含め百十数点出土した。このうち石錐が五点で一点はねじれた剝片錐、三点には欠損部がある。安山岩系の凹石も出土している。

7. 第7号住居址（第8図、図版6-①）

Ed-5 IVグリットにありテラス状の北西側に位置する隅丸方形の住居址。南東側で床と地山のレベルが一緒になってしまふほど堀り方は浅い、南東側半分に溝が二本通り切っている。長軸4.69m×短軸4.23mで、壁高は10cm以下。床は水平に近いが北東側に縮まりの緩い部分があり、抜根時にローム層まで動かされてしまったためと思われる。

柱穴は、P-1.2.3.4と思われる。周溝の検出はなかったが、焼土は二箇所で認められ北寄りのものは暗褐色土層内で検出されローム層内まで焼けていた。東側のものはローム層内の焼土範囲だがこちらの焼けも著しい。両方の新旧関係についてははっきり判らなかった。

遺物は繊維土器片が二十数点出土し、特徴あるものを図示する。黒曜石は十数点出土たが石鏃が1点出土している。

8. 第8号住居址（第9図、図版6-②）

Cb-7 IIグリットにあり斜面南側先端のテラスに位置する。堀り方はごく浅く南西方向に若干傾く。50年生以上の松林のあったところで抜根による擾乱が深部まで達していた。壁の立上りは最大高10cm以下と低く、床面もやや軟弱だった。現存する長軸5.07m×3.38m南西方向に大きな土坑が絡み遺構を欠いている。柱穴、周溝の検出はなく、焼土については中央付近の抜根にからむ擾乱穴の北東側に図示できないほど微量な焼土が残り、擾乱穴内にも焼土ブロックが数点認められた。

遺物は繊維土器片が二十数点出土している。黒曜石はチップを含め百五十八点が出て石鏃が六点、拇指状石器が四点、チャートの石鏃が一点、緑色岩系の打製石斧が一点出土した。特徴あるものを図示する。

9. 第9号住居址（第10、11図、図版6-③）

Hb-7 IVグリットにありテラスがなだらかな南東向きの斜面にかかる肩に位置する。西側の張出し部分が抜根の際に擾乱を受けていたがローム層までは達していなかった。北と西の張出し部を除く長軸4.84m×短軸4.12mとなっている。壁の立上りはほぼ直角で平均40cmで低いところでも20cmは残っている。壁の縮まりは硬い。中央部分と南側を除いて焼土が検出された。竈については北西壁の中央付近のP-6に接する土坑で上面に礫があり焼土粒も詰っていたのでこれが最終的な竈の跡と考えられる。この土坑の南西に隣接する土坑から壁上にかけて焼け方の著しいところがあり、この土坑にも焼土粒が詰っていた。こちらが古い竈跡であろう。この住居址の中央北東よりに椭円形の土坑があり、上面には3~5cm厚のロームが硬く張られていた。中には焼土粒を多量に含む土が詰っており、壁面、底部ともかなり焼けているので窓で替えた前の竈跡と思われる。竈については3個所とも煙道はなかった。床面は北東側に最終住居址の床面レベルが残っているだけで、南北側の土坑上には張り床の残りがあった。中央から南北にかけての部分とは比

高差が6cmあるので、下段の床が前の住居址床面と思われ、中央部は中華鍋状に凹んでいる。柱穴はP-1.2.4.5が一組となり、P-3.6はセットとなる柱穴より深く古い住居址に伴うものかも知れない。周辺は北側の隅で検出しただけである。張出し部のうち西側の擾乱されていたところでは礫の出土はなかったが、北側では自然礫と割石が検出された。以上のように灰焼き穴が3か所認められるので住居の拡張等少なくとも3回は建て替えが行われているだろう。

遺物については土師器の甕、杯、須恵器の杯片、灰陶器の壺底部の破片などがコンテナ半分出土しており、器形復元できたものを図示する。出土遺物の中で2点の内黒土器の杯(10-1, 2)に墨書き残っている。

10. 第10号住居址(第12、13図、図版7-①)

De-7 IIグリットにありテラス平坦部のやや西側に位置する。東側の隅に拡張部は抜根によりローム層まで擾乱された部分があるため、土坑になるか、張出し部となるか判明しない。西側隅にも小範囲ながら同様に擾乱されているところがあり周辺は表面が黄土色に変質した礫層となつて西側隅まで続いている。住居址は長軸4.38m×短軸3.89mとなっている。窓は南西側壁中央にあり黄土色に変質していない礫を用いた石組窓で破碎されており中に甕の口縁部破片が入っていた。内部に焼土はあったがローム層と礫層までは達していなかった。壁の立上りはやや軟弱、焼土粒は北側の一部と中央から南側にかけて検出されている。床面は東側半分に床下土坑があり深さは地山検出面から11~26cmで焼土粒が量の大小はあるが詰っていた。中でもP-1は入っている焼土の量も多く土坑内の壁もかなり焼けていたので、建て替え前の窓の灰焼き穴と思われる。またP-2にもP-1とはほぼ同量の焼土が入っていたが土坑壁面は上部が若干焼けていただけだった。床面は床下土坑が絡んだ関係でやや軟弱、土坑上の張り床面は検出できなかった。以上のことから最低2回は建て替えが行われている。

遺物については土師器の甕、杯片と須恵器の瓶の破片などがコンテナ半分出土しており器形復元できたものを図示する。内黒杯の墨書き(成か戊で底部に×が書かれている)土器(13-11)が1点出土している。

11. 第11号住居址(第14、15図、図版7-②③④)

Gc-5 IVグリットにありテラスと北向きの斜面肩上との境に位置する。住居址中央に根が張っていたが、手作業による根切りで抜根による擾乱は最小限に押さえることができた。長軸4.72m×短軸4.43m壁の立上りはほぼ直角で40~50cmの高さを検出した。壁の縮まりは硬い。焼土粒が南東から北西の軸線上より南西側にある多くの床下土坑上から確認できた。窓は北西側の壁際中央付近に石組窓が破碎された状態で一基ありこれが最終の窓であろう。また南東側の壁内中央から検出された窓は住居の建て替え時に、壁中へ取り残されたもので床下へ続く灰焼き穴とは部分的に断たれているところもあるが、軸石もローム層内に食い込まれておりほとんどⅢ状をとどめて

いた。この窓の西側に20cmの白色系粘土の塊があったが窓で使用されている部分の検出は認められなかった。さらにP-5内の底にローム層内のかなり深くまで焼土が達している部分がありかなり高温で焼けたことが想定できるのでこれも窓のなごりと思われる。床面は固く、北側にある陥し穴には5~8cmの厚さで硬くロームが張られていた。東側隅と北東に張り出した形になっている。土坑の性格は、遺物も器形復元できるようなものが多く判明しない。柱穴はP-1.2.3.4が一組になると思われP-4内に滑り込んだような形で底部に三叉の墨書きが書かれた甲斐型杯（15-21）が出土した。周溝ははっきり判るものが2軒分検出され西隅では2本が合わさり幅広になっている。

遺物については土師器の甕、杯片、灰釉陶器の高台付き杯の破片等がコンテナ一杯分出土している。器形復元できたものを図示する。

12. 第12号住居址（第16、17図、図版8-①）

Ge-4 Vグリットにありテラスと東向き斜面の肩に位置する。北東側を溝が切って南東側には16号土坑がある。プランは擾乱が大きく判りにくい、長軸3.82m×短軸3.32mとなっている。壁の立上りは所々に緩やかになる部分があったが、残っている壁はしっかりと上がるが高さは15cm以下である。焼土は住居址のはば中央に15cmの厚さを検出した地焼炉、炉内から土器の出土はなかった。焼土の南西側にある扁平な礎の上面には擦痕が残っている。北東側の溝上に焼土が検出されているが暗褐色土より上層なので本址との直接的な関係はないであろう。床面はやや軟弱。西側の壁際に深さ23~37cmの小穴が検出されたが、明らかな柱穴と周溝は検出できなかった。

遺物については器形復元できるものはないが、条痕文系、東海系の縄文土器片と、黒曜石片、円石、砥石などが出土している。

13. 第13号住居址（第17図、図版8-②）

Fc-5 IVグリットにあり平坦部のはば中央に位置する。南西側に37号土坑がある。壁の立上りは高さ20cmほど緩やかに上がる。焼土は検出できず、床面も軟弱傾向で、柱穴もP-1.2.3.4.と思われるが深さは22~27cmと浅めだった。遺物については土器が少なく黒曜石片が65個(462g)出土している。住居址より石器製作工房のような性格をもつ生活址であろう。

14. 第14号住居址（第18図、図版8-③）

Fe-5 Iグリットにあり平坦部の北側に位置する。遺構の半分以上が採土により削り取られている。長軸3.29m×短軸1.98m壁は南東側にかなりしっかり立ち上がる。焼土は南よりで検出し、厚さは15cm位ある地焼炉。床面は元々軟らかめだったと思われるが採土の影響を受けてかローム層の一部まで軟弱状態になっており硬く締まった床の検出は部分的にもなく、柱穴、周溝の検出もできなかった。

遺物については器形復元はできない繩維土器片と縄文中期の土器片が出土している。黒曜石片も若干出ている。

15. 第15号住居址（第18、19図、図版9-①②）

Fb-8 I グリットにあり平坦部の南側に位置する。縄文時代中期曾利IIの住居址。長軸4.86m×短軸4.24mで壁の立上りもほぼ直角で高さ30~40cmを検出した。壁の締まりは硬い。中央北よりにある右開戸は床面から深さ25cmで北西側の半分の石が抜き去られており焼土も少ない。残存部の石組みは円礫と角礫でいずれも地山の礫とは異なる搬入物で南側は角礫を複列に組み合わせて作られていた。床面の締まりは硬いが張り床は検出できなかった。主柱穴はP-1.3.7.8で床面から64~72cmの深さだが、P-2.4.6も底部は不定形ながら37~65cmの深さがありP-4.5.6は出入口に伴う施設と思われP-5上の河川礫は中礫岩で上面がかなり磨滅していた。この部分は上層構造を考える上での指針となろう。周溝は10~20cmほどの深さではほぼ一周しており南西隅に2列に回る部分があるが新II関係の検出はできなかった。

遺物については器形復元できるものが5点ある。19図2は炉の北側床直上に転位で底部を含み約六割を欠損して内側が上に向いていた。地文は縄文で波状に蛇行する粘土紐が頸部を廻り、直線とセットになったものがそれから垂下する。内側には横撫でした整形痕が残る。胎土は長石を含み粒子はやや細かい。焼成は良い方で下部が暗赤褐色、上部が黒褐色になっている。19図1は炉の上からおもに出土し胴下部を含み約六割を欠損する竈目文土器、蓋受け状の口縁を持ち、頸部を波状に蛇行する粘土紐が廻る。この下から鋭い平行沈線が垂下し地文となっている。頸部にある半球状の突起から直曲線の粘土紐が垂下する。内側には横撫でした整形痕が所々に残る。胎土は長石、石英を含み粒子はやや細かい。焼成は良い方だが二次焼成を受けている胴下部は崩れやすくなっている。19図3は炉の東側壁との間に口縁を南側にして倒れ押し潰された状態で出土した。底部もあるが崩壊が著しく器形復元できたのは図示した部分までである。地文は縄文で口縁部を一条の隆線が廻りこれから深めのねじれた縄文が垂下している。内側に残る整形痕の仕上げは粗く、胎土も山砂を多量に含んでいるためもろく外側は暗赤褐色、内側が暗褐色になっている。19図4は炉の南側礫岩との間から検出したもので口縁の一部と胴下部を欠損する。無文の段が付く口縁部と頸部の間に四单位の渦巻状突起があり連続する刺突文がこれを充填している。頸部から下は平行細沈線下降し地文となっている。突起下部から三本右向きの釣針形に沈線の施文があり中央を蛇行する垂沈線が降りている。内側に整形痕が残り、胎土は長石と雲母砂などを含むためやや粗い、焼成は良い方で暗赤褐色、胎土の関係で剥落したり崩落している部分がある。19図5は出土した破片を接合したところ三割が残っていた。駒骨文と綾杉文で表面を構成波状の口縁に小把手が付く。内側の整形はかなり勢いのある横撫で把手は上から下方へ末広がりに撫でている。胎土は長石、雲母砂を含みやや粗いが表面は滑らか、焼成は良い方で暗黄褐

色だが飛び出ている部分は赤色変化を起こしている。他にはコンテナ半分の中期末の土器片が出士した。石器は南側壁際から乳棒状磨製石斧が刃部を炉側斜め下にして検出した他、打製石斧、磨石、石鎌等が出土している。

16. 第16号住居址（第19、20図、図版9-③）

Fd-8 IIIグリットにあり15号住居址の南東に隣接して位置する。長軸5.15m×短軸4.53mとなっている。壁の立上りはほぼ直角で壁高16cmから31cmを検出する。壁の縦まりは硬い。炭化材が多く検出されたがどこの部材かは判らない。これに伴う焼土も多い。竈は新旧二個所で新竈は南西側壁中央付近の石組竈で破碎されている。旧竈は北東側壁中央付近にあり竈本体は抜き取られているが煙道と灰掻き穴の一部を検出している。床面での新旧関係は床下土坑が多く検出できなかったが残っている部分の縦まりは硬い。ほとんどの床下土坑からは量の多少はあるが焼土粒と炭化粒を検出している。柱穴はP-1.2.3.4.5の組合せでいずれも深さが床から30cm以上となっているので1セットと考えられる。柱穴の新旧関係については判明しないがP-1.2、P-3.5がほぼ等間隔になるので多分最も新しい住居の柱穴であろう。周溝は北西と南東側の壁近くで部分的に検出しているが深さ5-15cmと浅かった。

遺物については土師器の甕、杯、皿、須恵器の杯、瓶、灰陶陶器などの破片がコンテナ一箱分出土しており器形復元できたものと内黒土器の杯で墨書の判明したもの（20-1）を図示する。

17. 第17号住居址（第21図、図版10-①）

Dc-8 Iグリットにありテラスの南西向き斜面の肩に位置する。表土剥ぎの際に、表面の熊糞を剥いだだけで検出した住居址で南東から北西にかけて抜根等の擾乱が入っている。現存する長軸は2.63m×短軸2.62mとなっている。壁の立上りを検出したのは北隅の約三割で最大壁高は8cmとなっている。残っている壁と床面の縦まりはやや硬く焼土の塊が所々に点在し、東側の土坑内がかなり強く焼けているのでこれが灰掻き穴と竈の一部と思われ、北寄りに出土している礫もかなり焼けているので竈の石組の一部であろう。柱穴、周溝は明確に検出できなかった。

遺物については土師器の杯と甕の破片などが出土している。11号住の三叉墨書土器（甲斐型杯）と接合する破片がある。

18. 第18号住居址（第21図、図版10-②）

Ed-7 Vグリットにあり15号住居址の西側に隣接し位置する。17号住居址同様に熊糞を剥いだだけで検出して覆土も浅かったが、深さ5-10cmの周溝が約七割にわたって検出されたためプランの判明した住居址。長軸4.50m×短軸3.28mの隅丸長方形となっている。壁高は北隅で10cm確認できたがながらかな立上りだった。図示した焼土範囲は床直上のもので炭化粒を含んでいた。竈は東と南東の土坑には同質の焼土が詰っており、土坑壁も所々焼けている。東側の土坑壁東

側に焼土の多く形成されたところがあるので直接窓に関係する施設であろう。床面の縁まりはやや軟弱で中央南側で不正形に凹むところが在った。南東の土坑からは土師器で器形復元できる杯、椀が出土している。柱穴の住居址内検出はなかったが周溝の外側で小ピットが検出されており上屋構造を考える上で参考となる可能性がある。

遺物については土師器片の他に灰釉陶器の皿(21-8)が完形で出土しており、杯にも器形復元できるものがある。

19. 第19号住居址 (第22図、図版10-③)

Hc-5 I グリットにあり12号住居址の東に隣接する。抜根による擾乱と土坑が二個切り合うため残りが少ない。床面が軟弱で焼土検出部分は範囲のみ残して掘り下げたため明らかに床面として検出した部分は南西側の長軸3.04m×短軸1.32mとなっている。壁の検出部分は高さ30cmで床の軟弱さに比べ縁まりはやや固めで、焼土の範囲は狭いが厚さは10~20cmまで形成されている。住居址内で検出された土坑は陥し穴と円形の底部に一部周溝を検出したワイン樽形で遺物はないが、切り合いの関係からも新しいものと思われる。

遺物については量的に少なく繊維土器が数点で、黒曜石の拇指状搔器が2点、凹石と磨石が1点づつ出土している。

20. 第20号住居址 (第22図、図版11-①)

Ie-5 IV グリットにあり19号住居址南西に隣接する。抜根による擾乱と斜面に位置する関係で残りはよくない。長軸3.39m×短軸2.95mとなっている。壁の立上りは南西側で30cmを検出ほぼ直角で縁まりは固めだった。中央付近に検出された焼土は20cm近い厚さで炭化粒を若干含む地焼炉。北東寄りで検出した焼土は5cm以下の厚さで斜面部の擾乱面近くで確認されたもの。床面はやや軟弱で北東に向けてなだらかに傾斜する。柱穴、周溝の検出はなかったが壁際で3個ほぼ垂直で深さ30cm以上の中穴があった。

遺物については繊維土器片が30数点、黒曜石の石鎌と拇指状搔器が1点づつ出土している。

21. 第21号住居址 (第23図、図版11-②)

Ic-6 III グリットにありなだらかな東向き斜面の上側に位置する。斜面と陥し穴に切られ壁と床面の残りが少ない住居址。長軸4.02m×短軸2.13mとなっている。壁はなだらか立上りを見せ、縁まりもやや軟弱、焼土は斜面上で検出されているが厚さが10~15cmでローム面まで達している地焼炉。床面は灌木の根による擾乱で軟弱になっていた。柱穴、周溝の明らかな検出はなかった。

遺物については繊維土器片が30数点(条紋文土器を含む)、黒曜石が数点に、凹石と磨石が1点ずつ出土している。

22. 第22号住居址（第23図、図版11-③）

Hc-6 IIグリットにありテラス東側斜面との境に位置する。住居址中央を土坑が切っており東側は抜根等により擾乱されている。長軸3.02m×短軸2.71mとなっている。壁高は23~27cmでなだらかに立ち上がり縫まりはやや軟弱だった。焼土は範囲は狭いが中央北よりで検出、一部が擾乱穴にかかっている。床面は軟弱、四隅に10~30cmの深さで凹みが確認されている。しかし形が不正形で深さも一定でないことから柱穴とは考えにくい。

遺物は黒曜石片が10数点検出されているだけである。

23. 第23号住居址（第24図、図版12-①）

Hd-6 IVグリットにあり22号住居址に隣接する。擾乱の多い住居址で焼土も床面直上から若干検出した程度である。長軸3.46m×短軸2.35mとなっており、壁高は5cm前後で縫まりも軟らかめだった。床はやや軟弱、壁中央付近に楕円形の小ピットを確認したが上屋構造との関係については不明な点が多く柱穴となる可能性もある。周溝については検出できなかった。

遺物は繊維土器片が10数点、黒曜石片が20数点、凹石が1点出土している。

24. 第24号住居址（第24図、図版12-②）

Hd-8 Iグリットにあり9号住居址の南西に隣接する。壁、床とも軟弱で近代の杭跡が各所に残る。斜面で床の半分強を削られているが焼土は床面上で検出しており厚さは15cm弱である。検出した壁の両側は土坑と根の擾乱を受けており、長軸4.12m×短軸2.26mになっている。はっきりした柱穴、周溝の検出はなかった。

遺物については黒曜石片が数点と凹石が出土している。

25. 第25号住居址（第25図、図版12-③）

Ea-9 Vグリットにあり南西向き斜面に位置する。桑とうどの根による床面の擾乱が著しい住居址。壁については明確な検出ができなかった。焼土はかなり広範囲に散らばっているが竈に關係する部分はP-2の北側にある土坑で不正形ではあったが底部まで焼けており灰搔き穴と思われる。床面がはっきりしないので床下土坑と断定できないが円形もしくは楕円形の土坑内には焼土粒を含む例が多い。柱穴はP-1.2.3.4が浅いながら同レベルに近いのでセットになるだろう。

遺物について土師器の細片が出土している。

26. 第26号住居址（第25図）

Ib-10 IIグリットにあり27号住居址の東上面に隣接する。プランの明らかな検出はなかったが竈に關係すると思われる厚さ15cmの焼土を黒褐色土層内で検出、周辺のほぼ同レベルにある焼土粒を含んだ部分を残したところ4号集石を挟んで並んだことと、この内側と思われるところで2

点の光形土師質土器（25-1, 2）が出土しているので住居址とした。プランの範囲が27、40号住居址にかかる可能性があるためそれぞれの床面比高差を示しておく。本址は27号住居址より22cm上、40号住居址より25cm上となっている。

27. 第27号住居址（第26図、図版13-①）

Hd-10IIIグリットにあり南東向き斜面中段の平坦部に位置する。北西に隣接する所に天地返しが行われており、プランについて攪乱は受けていないと思われるが南側隅で多量の地山礫を検出した部分があった。長軸5.73m×短軸4.28mの隅丸長方形で壁の立上りも20~35cmでしっかりとし、ており硬い。焼土の検出は床上では確認できなかったが中央から北東よりの壁との間に小型で深さ12cmの石開い炉を検出、この付近に焼上りが形成されていた。床面はかなり硬く地山は礫屑となっているがこの礫もほとんどはすされている。柱穴はP-1.2.3.4の4本を検出、いずれも細く床から40cm以上の深さとなっていた。周溝は確認できなかったが不定形の深さ10cmほどの溝を北東側で2本検出、1本は柱穴につながっている。この溝の用途は不明だが攪乱とは異なるものである。北側にある凹みは深さ20cmで中の床とほぼ同レベルに円礫が入っていた。

遺物については量が少なく多時代にわたっており時期の決定が難しいが敢えて行うと一番多いのは繊維土器、次に土師器の細片となる。しかし繊維土器は割れ口が磨滅しているものが多く付近で天地返しも行われているので流れ込みによるものと思われる。土師器の細片については須恵器の破片や上面にプランが不明ながら40号住居址を設定できることからこれに伴うものであろう。そこで残るものが赤色彩色土器を伴う赤生式土器で細片と接合できないものがほとんどで器形復元は不可能だが整形はヘラ磨き、焼成も良好で時期決定の資料としてよいと思う。他に黒曜石片が出土している。

28. 第28号住居址（第26、27図、図版13-②③）

Ib-11IIグリットにあり南東向き斜面の中段に位置し農道に接する。南東側の壁と柱穴の一部はは開道時に削り取られていた。プランは隅丸方形で現存する長軸5.99m×短軸4.96mとなっている。焼土は中央と壁際を周って放っており、一番新しい竈は北西側壁の北よりに形の多少崩れた石組竈で煙道、袖石など備え残っていた。また南西側壁中央付近に竈に関係すると思われる土坑があり底部から北西側壁にかけて強く焼けていた。床下土坑に関係するもので北東壁中央よりのものは底部から壁まで全面強く焼けており灰搔き穴と思われる。更に北隅の住居址壁に絡む土坑は壁の一部で他の焼土を検出したレベルより上で強めに焼けている所があり、これも竈の一部になる可能性がある。新旧関係については判明しなかった。壁は北東と南西ではなだらかだが北西側は切り立ち縮まりも硬く壁高40cm以上のところもある。床面も地山が礫を含んでいるため縛まって硬くなっている。張り床は検出できなかった。柱穴は8本を検出、P-1.2.5.6が新で一組、P-3.4.7.8は旧で一組と思われる。この状況を踏まえると新旧の住居址で主軸がほぼ直角に

回転されていることが判る。周溝は西側隅で深さ10cmを確認している。

遺物については土師器の甕、杯、皿、須恵器の四耳壺、杯、灰陶器の椀、皿などの破片が出土しており器形復元できるものを図示する。器形復元できた杯のうち4点が横になり壁に貼り付いたような状態で出土している。また内黒土器の27図1、2、3、須恵器の杯27図15に「金」の墨書きが残り、2点は明らかに同一人物により書かれたもので南西隅から2枚が正位で重なり出土(27-2、3)した。遺物の中に底部と高台のみを残して打ち欠かれた灰陶器が2点(27-13、14)あり高台内の底面が滑らかになって微量ながら炭化物の付着が確認できるので手元の資料に類例はないが転用窯と考えたい。

29. 第29号住居址 (第28図、図版14-①)

Ic-10Vグリットにあり検出された遺構は石圓炉だけである。炉の掘り込みは18cm炉底から焼土を検出している。プラン確定のため3回にわたり床面の剥ぎ下げを行ったが確実な床面、柱穴、周溝は確認できなかった。但し柱穴については28、40号住居址の近くにあるピットが関係する可能性がある。時期の決定に当たっては炉の西から縄文時代中期後半の土器胴上部(28-1)が出土しておりこれに基づいている。石器は磨製石斧の刃部が出土している。

30. 第30号住居址 (第28、29図、図版14-②)

Jd-8IIグリットにあり東向き斜面の中段に位置する。東側半分を斜面が切っているがプランは隅丸長方形、長軸5.25m×短軸3.11mとなっている。壁の立上りは角ばかりながらなだらかに上がり、締まりは硬く北西側で最大38cmが残存していた。焼土、柱穴、周溝の検出は認められなかった。

遺物については織維土器が多く時期の特定ができるものは縄文時代早期末前期初頭がほとんどである。石器は凹石や石鐵などの製品のほか黒曜石片も出土している。

31. 第31号住居址 (第28、29図、図版14-②)

Je-7Vグリットにあり30号住居址の北東に位置する。擾乱が広くプランは不明。壁、柱穴、周溝など遺構の検出がほとんどなく、擾乱されていたが焼土層が確認できたこと、本遺跡のはば同時期の住居址の状況と比べて住居址とした。

遺物については遺構検出ができなかった割に多く、石器は尖頭器(29-20)が出土している。

32. 第32号住居址 (第30図、図版15-①②)

Id-10Iグリットにあり南東向き斜面中段の礫群内に位置する。壁の立ち上がりがほとんど検出できず、プランの確定は完掘後にいった。上面にあった礫群内から押型文土器が出土し、周辺に焼石炉と思われる小型の集石群が所在するため縄文時代早期の遺構として調査に取り組む。礫

群は上層の黒褐色土と下層の暗褐色土との境にあり、押型文土器はおもに下層から出土した。柱穴は壠方は浅いが深さがほぼ同レベルのP-1.2.3.4が1組になると思われる。中央にある石組は底部に扁平な河川礫を用いてその上端に半盤状の礫を花弁形に立ててあった。この配石内からは焼土、炭化物とともに検出されず上層の黒褐色土が下層の暗褐色土をほぼ垂直に切りやや縮まりのある状態で詰っていた。

遺物については上層と下層の境付近から黒曜石片が出土し始め中には製品も含まれていた。石器を図示する。また用途については今後の研究課題となろうが網石刃の片側へ挟りを入れたような黒曜石片(30-15)も出土している。押型文土器片は器形復元できるものはないが立野式土器の尖底部(30-4)が配石から約1.5m北の黄褐色土上から検出されている。多分尖底部の出土した付近がプランの境になると思われる。

33. 第33号住居址（第31図、図版16-①②）

Jb-9 IIIグリットにあり南東向き斜面のなだらかな谷の底辺に位置する。長軸3.33m×短軸2.53mで卵形プランとなっている。壁は緩やかな鍋底状で立上り北西側で最大壁高32cmを検出、壁は縮まりがありやや硬いが壁柱穴はなかった。当初土坑として調査を開始したところ押型文土器片が出土し始めたため遺構内全面を一段掘り下げてセクション設定をした。出土した押型文土器は上層から胎土の粗いネガティブな輪円押型文が、約20cm下の床直上付近からは細い工具の先端で器面を削ぎ取るように施された圧痕を有する刺突文の破片が検出された。住居址のほぼ中央から小型の固定石皿状の扁平な河川礫が出土しており、南西の壁際から出土した凹石と共に石器組成の上で良い資料となろう。セクションでは中央からやや南東よりで上層の暗褐色土が床上まで届いている部分があり柱痕の検出を想定し作業を進めたが確認はできなかった。床の縮まりはやや硬めで中央部へ向かってごくなだらかに凹む。柱穴については床面で検出ができなかつたため5回にわたる削り下げを試みたが確認できなかつた。

遺物については石器類を図示するがこの住居址からも挟りの入った細石刃様の黒曜石片(31-45)が出土している。上器片は器形復元できるものはなかったが山縁部等特徴あるものを示す。

34. 第34号住居址（第32図、図版17-①）

Ge-9 Iグリットにあり南東向き斜面の上側に位置する。天地返しによる擾乱が著しく北東隅の壁の一部と焼土が残っているだけでプランの確定はできない。残存していた長軸4.15m×短軸2.55mとなっている。壁、床とともに擾乱の影響からか軟弱で柱穴、周溝の検出はなかった。焼土はほぼ中央と思われるところにあり厚さ6.5cmだった。

遺物については繊維土器片と黒曜石片が検出されている。

35. 第35号住居址（第32図、図版17-②）

Gb-11IIグリットにあり南向き斜面の下方に位置する。長軸4.72m×短軸3.61mで隅丸長方形の住居址。壁はやや硬く締まっており、立上りも最大32cmを検出した。焼土は中央から南西に寄った石窓の中でも若干確認でき、床面が礫層まで達しているが、地山の礫は右開いの礫と質が異なっているので石窓炉の一種と考えてよいだろう。床面は締まりが硬く、楕円形の柱穴4本を検出している。いずれも30cm位の深さとなっていた。周溝の検出はなかったが深さ5cmほどの溝を東隅で検出しておらず、出入り口施設の一部となるかもしれない。

遺物の出土は少なく弥生時代後期の櫛描き波状文の土器片とヘラ磨きされた甕の底部、(32-3) 黒曜石片、石鎌(32-1, 2)が検出された。

36. 第36号住居址（第33図、図版17-③）

Gb-9Iグリットにあり南向き斜面の上部に位置する。南西側に大きく天地返しを受け擾乱されたところがあり、この影響で造構の大半が削られ壁の一部と焼け浅いピットが検出されただけである。残っているのは長軸2.06m×短軸1.52mである。壁は最大高11cmで締まりは床と同様にやや硬い。焼土の厚さが約15cmあり地床炉である。

遺物については繊維土器片等が出土している。

37. 第37号住居址（第33図、図版18-①）

Ee-9Vグリットにあり南向き斜面の上部に位置する。斜面の削平と西側の陥れ穴により広く擾乱されており、北東側壁の一部分と中央付近と思われる地点の焼土を検出、地焼炉の一部になると思われる。プランは不明。壁、床とともに締まりはやや硬い。柱穴、周溝の検出はなかった。

遺物については繊維土器片等が出土している。

38. 第38号住居址（第33図、図版18-②）

Ha-11Iグリットにあり南西向き斜面の中段に位置する。開墾後に行われた土引きで造構のほとんどが削られ、礫層の地山まで達し北東側で壁と深さ10cmほどの周溝が一部と、北隅の床面だけを床上では検出したのみである。プランについては6m角の隅丸で長方形か方形になると思われるが、確実な範囲は住居址の東隅に擾乱部があることから断定できない。床下では灰焼き穴、土坑、柱穴が検出されている。東隅の灰焼き穴は焼土の範囲は不正形ながらかなり強く焼けており硬く締まった状態になっていた。東側の床下土坑には焼土粒、炭化粒を含むものが多くあったが、底面、壁面の焼けているものはなく、中から炭化材や土師器なども出土している。柱穴はかなり細く、深さがほぼ同レベルとなるP-1.2.3.4が一組と考えられ、残存している床面を基準にするといずれも70cm以上となる。

遺物についてはすべて床下から検出された。土師質土器で器形復元できた皿(33-5)を図示

する。

39. 第39号住居址（第34図、図版18-③）

Gd-12IIグリットにあり南向き斜面下段の平地に位置し、農道に接する。隅丸長方形のプランを持ち長軸5.63m×短軸4.38mで南西側の半分ほどを欠損している。壁は立上り部を検出しただけで最大壁高12cm、締まりはやや硬い。床面は礫層に達しており硬く、炉と柱穴が4本検出された。炉は小型の石窯でP-3.4の中間に深さ10cmの堀込みで上に石を並べてあり焼土範囲もごく狭い。中央東よりも堀込みの上に焼土がある部分がありこれは旧かとなるかもしれない。柱穴P-1.2.3.4はいずれも楕円の平面形を持ち35cm位の深さを持っている。

遺物については構描き波状文の弥生土器片が出土し、石器では青黒い粘板岩の石鋤（34-2）が北側の床直上から検出されている。

40. 第40号住居址（第34図）

Ic-10IVグリットにあり南東向き斜面の中段に位置する。プランの残りは北西側の約半分で隅丸方形で残っている長軸4.02m×短軸2.05mである。高さ20cmほどの壁を検出、戸、床とともにやや軟弱傾向である。焼土は北側で確認され、北東よりの石窯は深さ12cmで小型ながら全面に焼土が検出された。柱穴と周溝については29号住居址同様に確認できなかったので床面を3回にわたり剥ぎ下げたが検出はなかった。29号住居址との床面レベル差は約10cm高い。

遺物は弥生時代後期の甕が出土しており器形復元できるので図示（34-3）する。この甕は西側隅の壁近くから横転した状態で、表裏も剥落し粉々になって検出されたが口縁から底部まで約四分の一周が接合した。胎土は長石などを含むが粘土は細かい。整形は外側の口縁上端に7本1単位の構描文が横引きされてこの下には同単位の波状文が続いている。頸部には1単位の簾状文が一周しその下を波状文が胴上部まで充填されている。胴部の整形は下方に向かって垂直と斜行するヘラ磨きがなされており底部に近づくに従って仕上げが粗くなる。内側は口縁から頸部にかけて横撫で整形の線跡が残っている。頸部から下は底部も含め粗いヘラ磨き整形がなされている。焼成は良好で灰黄褐色を呈し、煮こぼれの跡が各所に残っている。

第2節 掘立建物址

1. 第1号掘立建物址（第49図9、図版24-②）

Ha-8IIIグリットにあり9号住居址の南に位置する。平面は不正長方形で、柱穴の直径はいずれも20cm以下と小さいが、深さはローム面からだけでも1mを超え、底面に向かうほど先細りとなっている。柱穴は上部で不規則な段が付き、壁面は硬く締まっていたが、中に堆積していた暗褐色土は締まりが軟弱で1cm以下のロームブロックや微量の炭化物を含んでいた部分もあった。

細い穴を掘るには上総掘りのように水を流し込みながら掘り込んでいく方法と、杭を打ち込みこれを持抜いて更に長い杭を打つ繰り返しで穿つ方法が考えられるが、調査の結果ではいずれの方法を探ったか特定するには至らなかった。ちなみに掘り下げに当たっては合成樹脂の管を用いて径が細くなれば取り換える方法を探ったが、硬い壁は削れることはなかった。上屋については柱穴間が不等間隔で狭いこと、柱穴上部に支柱に関係すると思われる段があること等から櫓のような構造を想定することができよう。

第3節 集 石

1. 第1号集石（第35図、図版19-①）

Eb-4 I グリットにあり6号住居址内に位置する。同住居址内を掘抜いて設けられており床レベルより20cm位上面で最初の焼けて赤変した礫を検出、礫層は15cm以下のおもに角が丸くなり始めた角礫で構成されており平面楕円形の皿状で中央部がなだらかに凹む。北東側に焼土と炭化材の集中するところがあり焼土層は1cm以下と薄い。礫層の凹んでいる下層には大量の炭化物を含む粒子が細かく締まりのない漆黒土層があり、下段の礫群上まで続いている。下層の礫群は締まりのある黄褐色土層内にあり、礫は上層より若干大きめで平面円形に固めてあった。礫層をすべてはずすと底面が長円形の土坑となった。遺物は6号住居址から流れ込んだ纖維土器片が出土しただけである。

2. 第2号集石（第36図、図版19-②）

Ia-9 III グリットにあり南東向き斜面の中段に位置する。平盤状の一つの礫を除き15cm以下の角礫で構成されており、平面は円形、ほとんどの礫が強い火力を受けたか、長時間焼かれていたために赤変するとともに熱変化によると思われる割れが生じていた。礫は暗褐色土の中で微量の焼土粒と炭化粒を含む層内にあり底面は中華鍋状をしている。遺物の出土はなかった。

3. 第3号集石（第36図、図版19-③）

Ib-9 V グリットにあり南東向き斜面の中段に位置する。礫層は平面楕円形で外側から底部にかけて拳大よりやや大きめの礫が多く、内側は拳より小さな礫で構成されているが、土層観察ではいずれも焼土粒と炭化粒を含む暗褐色土層内にあり分層はできなかった。礫に割れが生じているものは少なく小礫が多いことから合計296個も集められており、底面は中華鍋状になっている。遺物は検出されなかった。

4. 第4号集石（第36図、図版19-④）

Ie-9 V グリットにあり平面が円形で、礫層は暗褐色土層内に位置し微量の焼土と炭化物を少

量含み中華鍋状の底面に達している。集石としては小型で底面から立上り部まで地山の礫と同質系統の大きな盤状礫を用いて花弁形に組み、内側に小礫を詰めている。礫はいずれも焼けており取り上げる際には割れるもののが多かった。遺物の検出はなかった。

5. 第5号集石（第37図、図版19-⑤）

Ic-10 IIグリットにあり26号住居址下層に位置する。雨により洗いだされた集石で礫の焼け方、構成とともに2号集石に似て平面も円形で、礫屑のある暗褐色土層内で焼土はほとんど確認されなかったが、わずかな炭化物を含んでいた。この集石の外側は所々にある比較的大きめの礫で構成され、この礫は長辺が底面中央を向く形に並んでいる。底面は中華鍋状で遺物は南西の礫内から砾石が検出された。

6. 第6号集石（第37図、図版19-⑥）

Ie-10 Iグリットにあり地山から10cmほど上の暗褐色土層内に位置する。平面不正形で大きめの角礫により構成されている。焼土、炭化物の検出はほとんどなかったが礫は焼いている。集石の南隅で凹石を検出した。

7. 第7号集石（第37図、図版19-⑦）

Ie-10 Iグリットにあり5号集石と7号集石のほぼ中間に位置する。礫層は暗褐色土層内にあり底面となる黄褐色土層より5cmほど上で平面形は不正橢円形をしている。礫層内に微量の焼土粒と炭化粒を含み、礫は大きめの角礫が多く焼けていた。底面は橢円形の鍋底形で中央が舟底状に凹み炭化物が検出されている。遺物は底面の立上り部から縄文早期の土器片、南側から石鐵が出土している。

第4節 配石土坑

1. 第1号配石土坑（第37図、図版24-①）

He-9 IVグリットにあり天地返しにより広く攪乱を受けた中に残存していた。攪乱部であったので層序は記録していないが、やや焼けた黄褐色の基盤層上に盤状の礫をほぼ水平に据えて、そこへ上方がわずかに開く花弁形に盤状や柱状の礫を並べてあった。礫は焼けて一部赤変している。配石内に礫はなく、焼土粒、炭化粒の検出も認められずただ綺まりの少ない黒褐色土が入っていた。配石内から遺物の出土はなかったが、周囲の攪乱層からは繊維土器と土師器の破片、黒曜石片が検出されている。

第5節 土 坑

1. 第1号土坑（第38図1）

Ba-5 I グリットにあり南向き斜面に位置する。平面は半円形で断面錐形。遺物は繊維土器の細片が出土している。

2. 第2号土坑（第38図2）

Bd-4 IV グリットにあり南東向き斜面に位置する。平面楕円形で底面が東側に傾斜する。断面は皿形。遺物は縄文時代早期末前期の条痕文系繊維土器片と東海系土器片、黒曜石片が出土している。

3. 第3号土坑（第38図3）

Bd-4 II グリットにあり南東向き斜面に位置する。平面円形で断面桶形。遺物は黒曜石片が出土している。

4. 第4号土坑（第38図4）

Ca-4 I グリットにあり南東向き斜面に位置する。平面円形で断面半球形。遺物の検出はなかった。

5. 第5号土坑（第38図5）

Ca-3 IV グリットにあり南東向き斜面に位置する。平面楕円形で南西側が抜根の擾乱部に接して底面は長軸側に延びている。断面は錐形。遺物は黒曜石片が出土している。

6. 第6号土坑（第38図6）

Da-3 V グリットにあり東向き斜面に位置する。平面円形で断面錐形。遺物の検出はなかった。

7. 第7号土坑（第38図7、図版20-②）

Db-4 I グリットにあり東向き斜面の下方に位置する。平面楕円形で底面長円形の陥し穴。上部が抜根の擾乱を受けており5号住居址の遺物が大分流れ込んで新旧関係はよく判らない。壁、床面ともハードローム層内で硬く縮まっており、掘り込む際にスコップが当たっても弾き返すほど固くなっていた。両側の中ほどに入頃大の礫が検出されている。底面には長軸の中心付近に深さ20cmほどの小穴が直線に3個並んでいた。遺物は5号住居址のものと思われる繊維土器や黒曜石片が出土している。

8. 第8号土坑（第38図8、図版20-③）

Dd-4 I グリットにあり7号土坑の東に位置する。平面楕円形で底面長円形の陥し穴。壁の下方では壁中に礫が残っている。周間に焼土を形成しているところが接し、断面でも暗褐色土層内から焼土ブロックを検出している。小穴の径が若干大きめの他は7号土坑によく似ている。遺物の検出はなかった。

9. 第9号土坑（第38図9、図版21-①）

Dd-2 IV グリットにあり北東向き斜面に位置する。平面不正楕円形で北側が擾乱部に接している。底面は長円形の陥し穴。底面の長軸付近に深さ10cmほどの小穴が2個並んでいた。遺物の検出はなかった。

10. 第10号土坑（第39図1、図版21-②）

Ee-2 IV グリットにあり平坦部上で北向きの斜面肩に位置する。平面不正楕円形で底面長円形の陥し穴。底面に小穴はなく、遺物は黒曜石片が出土している。

11. 第11号土坑（第39図2、図版21-③）

Ed-2 V グリットにあり10号土坑のほぼ西側に位置する。平面不正楕円形で東側に抜根の擾乱跡が残る陥し穴。底面はローム層下の結まりのない礫屑に達しており底面形ははっきりしないが長円形と思われる。小穴は確認できなかった。遺物は縄文時代早期末前期の東海系土器片と黒曜石片が出土している。

12. 第12号土坑（第39図3）

Dd-2 III グリットにあり9号土坑のほぼ北側に位置する。平面楕円形で断面錐型。遺物は条痕文系の繊維土器片と黒曜石片が出土している。

13. 第13号土坑（第39図4、図版21-④）

Ce-4 III グリットにあり3号住居址の北西側に位置する。平面楕円形で上部は抜根によりローム層まで擾乱されている陥し穴。壁内にはかなり大きめの礫が残り、底面は長円形。7号土坑によく似ているが、小穴は礫があるため逆円錐状になっている。遺物の検出はなかった。

14. 第14号土坑（第39図5）

Fa-2 V グリットにあり10号土坑の南東に位置する。平面円形で断面は浅い桶形。底面中央に深さ25cmの小穴がある。遺物の検出はなかった。

15. 第15号土坑（第39図6、図版21-⑤）

Fe-3 II グリットにあり平坦部北隅の北向き斜面肩上に位置する。平面長円形の陥し穴。底面も長円形で、7号土坑に酷似し、深さ30cmほどの小穴が3個並ぶ。遺物は繊維土器片と黒曜石片が出土している。

16. 第16号土坑（第40図1）

Ha-5 I グリットにあり12号住居址内の南側に位置する。平面円形で断面鍋形の底面が若干西側に傾く。遺物は尖頭器、繊維土器片、黒曜石片が出土しており、11号住居址からの流れ込みと思われる土師器の杯片も2点検出されている。

17. 第17号土坑（第40図2、図版21-⑥）

Fe-4 IV グリットにあり14号住居址の北側で攪乱部により接する。平面橢円形で底面不正長円形の陥し穴。小穴は3個並ぶタイプだが7号土坑よりは小型で北側の小穴は斜めに入っている。遺物は繊維土器片、黒曜石片などが出土している。

18. 第18号土坑（第40図3、図版21-⑦）

Fb-4 IV グリットにあり17号土坑のほぼ西に位置する。平面長円形で底面不正長円形の陥し穴。小穴は2個のタイプ。遺物は繊維土器片、黒曜石片、凹石、調整加工のある青色石系の礫などが出土している。

19. 第19号土坑（第40図4、図版21-⑧）

Ee-4 III グリットにあり18号土坑のほぼ西に位置する。平面、底面とも不正長円形の陥し穴。小穴は3個並ぶタイプで深いものは40cmになっている。遺物の出土はなかった。

20. 第20号土坑（第40図5）

Fe-3 V グリットにあり平坦部の北側に位置する。平面円形で断面は浅い桶形、中央付近に直径20cm深さ10cmの穴がある。遺物の出土はなかった。

21. 第21号土坑（第40図6）

Fe-3 IV グリットにあり20号土坑の北に位置する。平面円形で断面は桶形。遺物の出土はなかった。

22. 第22号土坑（第40図7）

Fd-3 IVグリットにあり21号土坑の西に位置する。平面楕円形で壁の北東から底面中央部にかけて抜根による擾乱を受けている。断面は桶形。遺物は黒曜石片が出土している。

23. 第23号土坑（第41図1）

Fc-3 Vグリットにあり20号土坑の西に位置する。平面円形で、底面中央付近から約10cm上に人頭大の角礫があり、断面は桶形。遺物は黒曜石片が出土している。

24. 第24号土坑（第41図2）

Fb-3 Vグリットにあり23号土坑の南西に位置する。平面円形で断面桶形。遺物は黒曜石片が出土している。

25. 第25号土坑（第41図3）

Ee-3 Vグリットにあり24号土坑の西側で東側を擾乱部に接して位置する。平面楕円形で断面鉢形。遺物は黒曜石片が出土している。

26. 第26号土坑（第41図4、図版22-①）

Ea-2 Vグリットにあり9号土坑の南東に位置する。平面楕円形の陥し穴。10号土坑に似て底部に小穴は検出されていない。遺物の検出はなかった。

27. 第27号土坑（第41図5）

Ec-4 IIグリットにあり西側が6号住居址に接して位置する。平面円形で断面鉢形。底面に2個抜根による擾乱穴がある。遺物は黒曜石片が出土している。

28. 第28、28'号土坑（第41図6、図版22-②）

Ea-4 Iグリットにあり6号住居址の南に位置する。平面楕円形の陥し穴で、28'号土坑を径50cm位の大きなロームブロックで埋めて28号土坑が若干深く作られている。壁、底面とともに硬く締まっており切り合い部も固い板状になって検出された。底面形はいずれも長楕円で小穴が3個並ぶタイプ。遺物は繊維土器片、黒曜石片が出土している。

29. 第29号土坑（第42図1）

Gc-4 IIIグリットにあり11号住居址内に位置する陥し穴。平面楕円形で底面長円形。底面に2個小穴があるタイプで径20cm、深さは70cmと他の陥し穴に比べ若干大きく深い。遺物の検出はなかった。

30. 第30号土坑（第42図2）

Bd-6 I グリットにあり2号住居址の西側斜面に位置する不正形の浅い土坑で縄文時代中期前葉の土器片が出土している。

31. 第31号土坑（第42図3）

Bc-6 II グリットにあり30号土坑の南西に隣接する。平面円形で東側は抜根による擾乱部があり底面も荒れて角礫が詰まっている部分があり、遺物の検出はなかった。

32. 第32号土坑（第42図4）

Bd-6 II グリットにあり30号土坑の南に隣接する。平面円形で抜根による擾乱を全体にわたり受けており底面の擾乱もローム層まで達している。遺物は縄文時代中期初頭の土器片と黒曜石片が出土している。

33. 第33号土坑（第42図5、図版22-③）

Gc-3 IV グリットにあり北東向き斜面の肩に位置する。平面楕円形で抜根による擾乱を周辺からも受けしており、底面不正長円形の陥し穴。小穴は3個並ぶタイプ。遺物の検出はなかった。

34. 第34号土坑（第42図6、図版22-④）

He-4 IV グリットにあり33号土坑の南東に位置する。平面楕円形で長円形の底面に小穴が3個並ぶタイプの陥し穴。遺物の検出はなかった。

35. 第35号土坑（第42図7）

Gd-4 I グリットにあり34号土坑の北西に位置する。平面、底面ともに長円形、小穴が3個並ぶタイプの陥し穴で33、34号土坑に似ている。遺物の検出はなかった。

36. 第36号土坑（第43図1、図版22-⑤）

IId-5 I グリットにあり19号住居址内に位置する。平面長円形で南西側が近世の土坑に接している。底面長円形で小穴が3個並ぶタイプ。遺物は繊維土器片と黒曜石片が出土している。

37. 第37号土坑（第43図2、図版23-①）

Ia-5 I グリットにあり19号住居址の東に位置する。平面円形で断面鍋形、底面中央に小穴がある。遺物は条痕文系土器片が出土している。

38. 第38号土坑（第43図3）

Ee-6 II グリットにあり平坦部のほぼ中央に位置する。平面円形で断面鍋形の小型土坑。縄文土器が1点出土している。

39. 第39号土坑（第43図4）

Fa-6 IV グリットにあり38号土坑の南東に位置する。平面円形で断面鍋形。近代の遺物と織維土器片、黒曜石片が出土している。

40. 第40号土坑（第43図5）

Ee-6 V グリットにあり39号土坑の南西に位置する。抜根による擾乱が多いため締まりも弱く平面形は不正形。近代の遺物と縄文土器片、黒曜石片が出土している。

41. 第41号土坑（第43図6）

Ga-6 III グリットにあり13号住居址の南東に位置する。平面長方形の土坑で中に人頭大よりも大きめの角礫がびっしり詰まっていた。底面は周囲を深さ20cmほどの溝が回っており遺物は近代の陶磁器片が出土している。

42. 第42号土坑（第43図7）

Ed-5 V グリットにあり7号住居址の南東に位置する。平面馬蹄形で断面皿形、底面が北側に傾いている。遺物の検出はなかった。

43. 第43号土坑（第43図8）

Ga-6 V グリットにあり39号土坑の東に位置する。平面橢円形で断面桶形、上部が抜根により擾乱されている。底面南東に礫が固まっている部分があった。遺物は近代の陶磁器片が出土している。

44. 第44号土坑（第43図9）

Ea-6 II グリットにあり平坦部の溝内に位置する。平面橢円形で壁、底面ともに硬く締まって断面は桶形。遺物は押型文、条痕文の土器片と緑色岩系の打製石斧、黒曜石片が出土している。

45. 第45号土坑（第44図1）

Eb-6 I グリットにあり44号土坑の北東に続く溝内に位置する陥し穴。抜根による擾乱がローム層内まで達しており遺構として残っていたのは底面の小穴2個と壁の一部だけである。遺物の検出はなかった。

46. 第46号土坑（第44図2）

Fd-6 I グリットにあり41号土坑の北西に位置する。平面円形で断面鍋形、遺物は縄文土器片と黒曜石片が出土している。

47. 第47号土坑（第44図3）

Hc-5 II グリットにあり19号住居址内の36号土坑南西に接して位置する近世遺構。平面円形で断面桶形、南側底面に深さ5cmの溝が検出されている。遺物は陶磁器片が出土している。

48. 第48号土坑（第44図4）

Bd-6 IV グリットにあり4号住居址の北西に位置する。平面椭円形で断面中華鍋形、抜根により内部は搅乱されているが縄文土器片が出土している。

49. 第49号土坑（第44図5）

Gd-6 II グリットにあり22号住居址の西に位置する。北側が抜根による搅乱で欠けているが平面形は円形で断面は桶形と思われる。底面に16個の環が散らばっていた。遺物は織維土器の破片と黒曜石片が出土している。

50. 第50号土坑（第44図6、図版23-⑤）

Hc-6 II グリットにあり22号住居址内に位置する。平面円形で断面桶形、底面東側に長辺50cmの扁平な河川縁があった。遺物は縄文時代早期末の条痕文系、東海系土器片が多く、主なものを図示する。黒曜石片も510g出土している。

51. 第51号土坑（第45図1、図版22-⑥）

Ia-5 IV グリットにあり20号住居址の北東に位置する。平面椭円形で底面隅丸長方形、小穴が3個並ぶタイプの陥し穴。遺物の検出はなかった。

52. 第52号土坑（第45図2）

Hc-6 II グリットにあり22号住居址内の50号土坑東に接し位置する。平面円形で断面桶形、遺物の検出はなかった。

53. 第53号土坑（第45図3、図版23-⑥）

Gd-6 V グリットにあり22号住居址の北西に位置する。平面不正形で底面椭円形、途中に縫や

かな段が付く。遺物は縄文時代早期末の沈線文、貝殻腹縁文の土器片が出土している。

54. 第54号土坑（第46図1）

Gc-7 Vグリットにあり9号住居址の西に位置する。平面不正形で南東側は浅いが細長く擾乱を受けている。遺物は縄文土器片と土師器の杯片、黒曜石片が出土している。

55. 第55号土坑（第47図1、図版22-⑦）

Ib-6 IVグリットにあり21号住居址内に位置する。平面、底面とも長楕円形で小穴が3個並ぶタイプの陥し穴。遺物は縄文土器片と黒曜石片が出土している。

56. 第56号土坑（第47図2）

Fc-8 IVグリットにあり16号住居址の南に位置する。平面楕円形で断面錐形、遺物の検出はなかった。

57. 第57号土坑（第47図3）

Fe-8 Vグリットにあり56号土坑の東に位置する。平面円形で断面錐形、遺物の検出はなかった。

58. 第58号土坑（第47図4）

Gb-8 IIIグリットにあり16号住居址の東に位置する。平面楕円形で断面錐形、遺物の検出はなかった。

59. 第59号土坑（第47図5、図版23-④）

Fa-10 IIグリットにあり37号住居址の南東に位置する。北側が抜根により擾乱された平面長方形の土壤。遺物は灰釉陶器の高台付杯（47-5-1）と段付皿（47-5-2）が完形で出土している。また擾乱部内から出土した繊維土器片は37号住居址から流れ込んだものと考えられる。

60. 第60号土坑（第47図6）

Ja-6 IVグリットにあり55号土坑の東に位置する。平面楕円形で南東が長芋の耕作による擾乱を受けたところに接している。底面長楕円形で小穴がないタイプの陥し穴。遺物は繊維土器片と黒曜石片が出土している。

61. 第61号土坑（第47図7、図版23-③）

Ja-7 IVグリットにあり60号土坑の南に位置する。平面楕円形で断面錐形、底面の短軸壁際に

小穴があり東側の上面からは焼土を確認している。遺物は繊維土器片と黒曜石片が出土している。

62. 第62号土坑（第47図8）

Ja-7 IVグリットにあり61号土坑の南東に位置する。平面楕円形で北東側が円形に一段下がる。遺物の検出はなかった。

63. 第63号土坑（第47図9）

Ie-8 IVグリットにあり30号住居址の南西に位置する。平面楕円形で断面桶形、遺物は黒曜石片が出土している。

64. 第64号土坑（第47図10）

Hb-8 IIグリットにあり9号住居址の南に位置する。平面不正形で西側を65号土坑により切られている。遺物の検出はなかった。

65. 第65号土坑（第47図10）

IIa-8 IIグリットにあり64号土坑を切って位置する。平面不正楕円形で中に人頭大の角礫が一つ入っていた。遺物は繊維土器片と黒曜石片、チャート片が出土している。

66. 第66号土坑（第48図1、図版23-⑦）

Ge-10 IIグリットにあり38号住居址の北に位置する。北側から東側にかけて広範囲が天地返しによる搅乱を受けている。平面円形で断面鍋形、底面は礫層に達していた。搅乱されている部分が一部礫層まで達しているためはっきりした検出はできなかつたが、周辺に平安時代末期の遺物が散在していたので住居址等に関係する遺構である可能性が否定できない。遺物は灰釉陶器の壺と焼成のあまりよくない須恵器の杯、量的には少ないが繊維土器片と黒曜石片も出土している。

67. 第67号土坑（第48図2）

Ic-9 Iグリットにあり33号住居址の北西に位置する。平面楕円形で断面鍋形、底面に小穴はないが陥れ穴の可能性もある。他の陥れ穴から遺物が検出されることは少なかつたが、この土坑からは接合はほとんどできないが条痕文と羽状縄文の繊維土器片、東海系の土器片と黒曜石片が出土している。

68. 第68号土坑（第48図3）

Ic-9 IVグリットにあり67号土坑の南に位置する。平面円形で断面鍋形、底面は楕円形となっている。遺物は凹石が出土している。

69. 第69号土坑（第48図4、図版23-②）

Ic-10 I グリットにあり32号住居址の北西に位置する。平面、底面ともに楕円形で底面中央に深さ35cmの小穴がある陥し穴。遺物の検出はなかった。

70. 第70号土坑（第48図5、図版23-⑧）

Hb-10 III グリットにあり東側が27号住居址に接する。平面隅丸長方形の土壙。壁、底面ともに硬く締まっていた。遺物は灰釉陶器の碗（48-5-1）と皿（48-5-2）がセットで出土しているほか、土師器片、須恵器片と黒曜石片が出土している。

71. 第71号土坑（第48図6）

Ha-9 III グリットにあり36号住居址の南に位置する。平面楕円形で断面錐形、遺物の検出はなかった。

72. 第72号土坑（第48図7）

Hb-9 II グリットにあり71号土坑の北西に位置する。平面円形で断面錐形、遺物の検出はなかった。

73. 第73号土坑（第48図7）

Hb-9 I グリットにあり72号土坑の北に隣接する。平面不正形で断面錐形、遺物の検出はなかった。

74. 第74号土坑（第48図8）

Hd-7 IV グリットにあり24号住居址の北側に一部が絡んで位置する。平面円形で断面錐形、遺物の検出はなかった。

75. 第75号土坑（第48図9、図版22-⑧）

Ie-6 I グリットにあり27号住居址の北東に位置する。拔根の擾乱により上半分はローム層まで擾乱されている。平面楕円形で底面に小穴が3個並ぶタイプの陥し穴。遺物の検出はなかった。

76. 第76号土坑（第48図10）

Ia-5 II グリットにあり19号住居址の東に位置する。平面円形で断面楕形、拔根による擾乱を構内でも受けているが、壁、底面ともに締まっておりローム面までは及んでいない。遺物の検出はなかった。

77. 第77号土坑（第49図1）

Ed-9 IVグリットにあり37号住居址西に隣接する。平面楕円形で底面長円形、小穴が3個ならぶタイプの陥し穴。遺物の検出はなかった。

78. 第78号土坑（第49図2）

Gb-10IVグリットにあり38号住居址の西に位置する。平面円形で断面桶形、遺物の検出はなかった。

79. 第79号土坑（第49図3）

Fe-9 Vグリットにあり59号土坑の北に位置する。上側が抜根による搅乱をローム層まで受けしており、平面は円形になると思われる。断面桶形、遺物の検出はなかった。

80. 第80号土坑（第49図4）

Fb-9 Iグリットにあり59号土坑の西に位置する。平面楕円形で断面鍋形、遺物の検出はなかった。

81. 第81号土坑（第49図5）

Ee-9 Iグリットにあり80号土坑の西に位置する。平面円形で断面桶形、遺物の検出はなかった。

82. 第82号土坑（第49図6）

Ee-9 IIグリットにあり81号土坑の南西に位置する。平面楕円形で断面桶形、遺物の検出はなかった。

83. 第83号土坑（第49図7）

Ec-9 Iグリットにあり25号住居址の東に位置する。平面円形で断面桶形、遺物の検出はなかった。

84. 第84号土坑（第49図8）

Fb-8 IVグリットにあり15号住居址の南に位置する。平面不正形で断面鍋形、遺物の検出はなかった。

第V章 まとめ

住居址

天狗山遺跡には縄文時代早期から平安時代末期までの生活址が断続的に残されていた。縄文時代早期押型文土器が検出された遺構は市内全域に散在しているが明らかな住居址が発掘されたのは金沢工業団地内にあった阿久尻遺跡について2例目である。本遺跡の場合、住居址と焼石炉がセットで検出されており、早期の短期間でも定住した生活址と考えることができよう。中でも33号住居址の場合、住居址の層序内に織維土器をまったく含まず大川式に比定される立野式の押型文土器のみを検出したことは石器組成の面と併せ貴重な資料となった。

縄文時代早期末期の遺構は糸魚川—静岡構造線上に位置する関係で近代になって周辺の断層や地割れを埋めた際に土引きをされたところに重なってしまうため住居址の残りも2、3割というものがほとんどで集落論を展開する上では問題が多いが、土器片は好資料を得ることができた。沈線、条痕、際帶いずれの土器も出土し、絹条体圧痕も2点だけであるが検出されている。特徴としては東海系土器の搬入が数形式にわたっている点であろう。今後の課題として東側で対向する芥沢遺跡との関係があげられる。芥沢には農機具による深耕を受けず、現在原野化しつつある畑が1953年に調査された続きにあり、開発の波が押し寄せないことを願いたい。

縄文時代中期後半の八ヶ岳西南麓で縄文文化が黃金期を迎えて終息して行くころの遺構は2件の住居址だけで天狗山だけでは集落として成り立たない。この住居址のあり方も今後の課題の一つになろう。

今回の調査で成果が上がったもの一つに弥生時代後期の住居址の検出がある。住居址により異なるが土器の上では箱清水式、座光寺原式・中島式各文化圏のものが確認されており両文化の接点であったことが伺える。茅野市の西山城では同時代の住居址発掘例は今までなく、最も近い阿弥陀堂遺跡からも直線距離で約7kmも離れている。今回の発掘で弥生時代の遺跡範囲が広がったことは、金沢から下流の宮川流域において弥生時代以降の水田址を発見の可能性もでてきたので、今まで調査され少なかった低湿地でも発掘調査の必要性を強く感じた。

平安時代末の住居址は最終的に建て替えられた段階ではほぼ同時期と考えられるものがほとんどで9、11、16、25、27号住居址は壁の中央付近に石組竈があり、竈の両側の壁際に柱を建て対向する壁際にはほぼ等間隔の柱を建てている。更に主軸が東西、南北軸に対して約45度ずれていることも特徴の一つといえよう。また1、10、17、18、25、16、38、27号住居址は芥沢側から見て20mの幅内には直線に並ぶが、これには集落を計画的に形成していく可能性が考えられる。また墨書き土器の出土も複数の住居址にわたっており、別の住居址から同一個体の破片が検出されたたり、異なる住居址から同じ筆跡の墨書きが見つかるなどそれぞれの住居址の関係についても課題を

残す結果となった。

集 石

集石は7基が検出され5号集石を除き橢円形か円形の集石炉で、遺物は少ないが1号集石以外は縄文時代早期のものと考えられる。金沢で集石炉が発掘された例は、中央自動車道建設に伴い検出されているが、本遺跡の構造はこれより小型のものが多い。礫の大きさや石質から分類を試みると、1号集石は利木山西、金山沢北、頭城沢、阿久各遺跡で検出されたタイプに似た要素を持っているが、他とは明らかに異なる。2号集石は4号、5号集石に酷似し、平面形は異なるが、石質の面からいえば6号、7号集石も地山の礫を主構成の石として用いている。3号集石は小さな河川礫で主に構成されている点とそれに伴い礫の密度も高いことが特徴となっている。4号集石は内部の小礫をはずした段階で配石土坑に酷似し、底部だけを見ると4号集石東側のId-10IIグリットにある扁平礫のあり方にもよく似ており、これらは共通の性格を持つ可能性もある。

土 坑

土坑について本遺跡の場合、可能な限り表土を剥いだこともあって特色ある陥し穴が並んで検出された。まず9、26、11、10号土坑は小型ながら深く9号土坑を除いて小穴が検出されず、北向き斜面の谷に向かいほぼ同レベルで直行しながら弧状に並ぶことから一群を形成した同時期の陥し穴と考えられる。この一群の外側には斜面中段から13、7、8、28'、28、19、18、17、29、34、35、33、15号土坑が一部分は複列となりながら弧状に並ぶ。この陥し穴群は29号土坑の2穴を例外として上面は抜根により荒されていることが多い一方、底面は長円形で3穴のタイプになっており、重複しているところもあるが、一群と考えてよいだろう。また北東側の平坦部から斜面にかけて複列に並ぶ36、51、75、55号土坑は長軸が北東—南西で大きさには差があるがいずれも3穴タイプでこれも一群としてよいだろう。45、60、69、77号土坑には群を構成する要素は少ないが周辺に広く擾乱されたところが多く、この中に陥し穴があった可能性も否定できず別の群を構成している可能性もある。更に群構成をした部分についても北側の斜面は土引きで削り取られているものもあるが、ここに群の続きが並んでいたとも考えられる。本遺跡は縄文時代早期から前期にかけて一定期間は居住地として、また居住生活の中心が芥沢に移動したときには陥し穴の構築方法、配列から見ても狩り場として、双方が一つの生活圏を構成していたことを伺わせている。

そ の 他

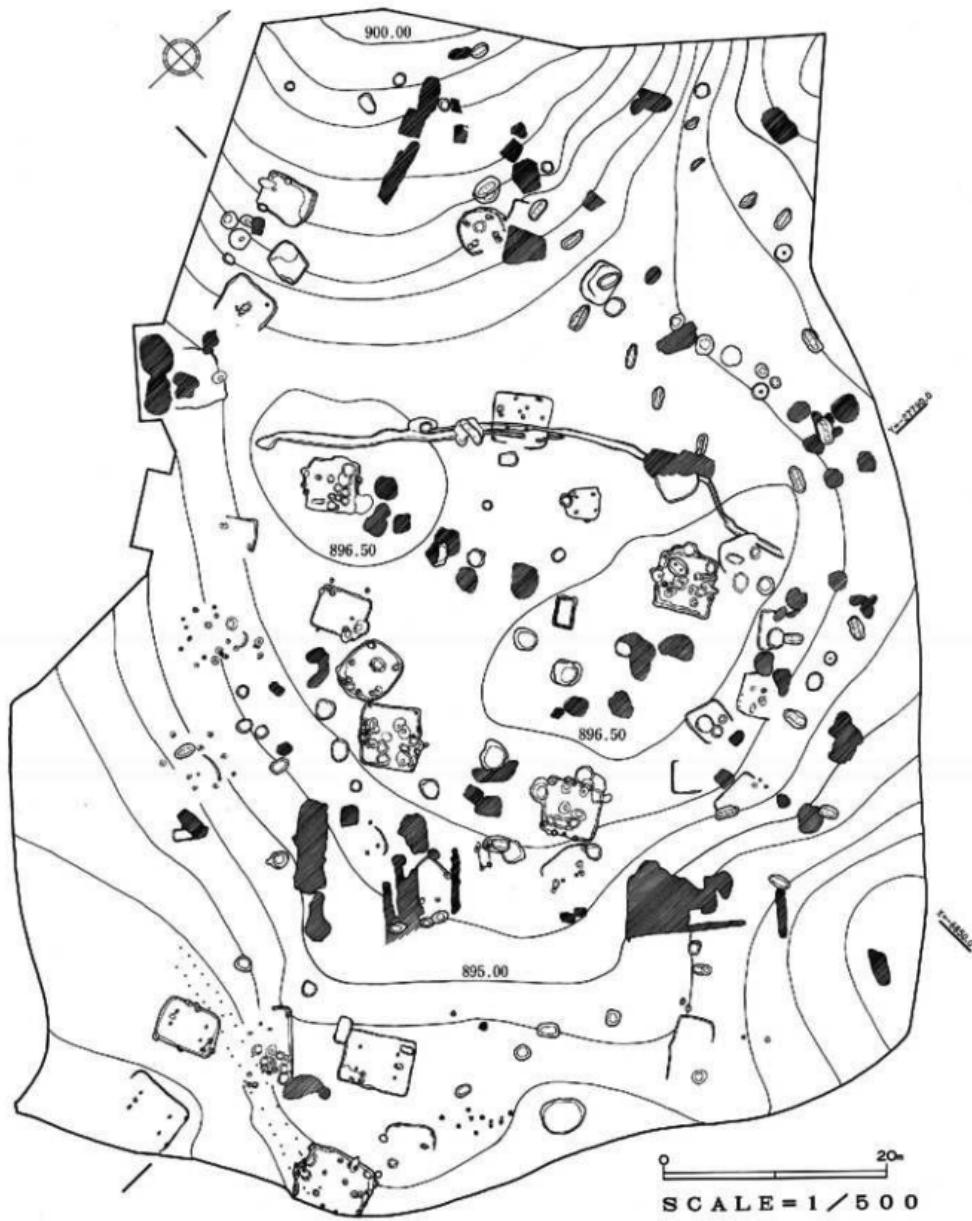
調査区内を北東—南西に抜けている溝については、人為的に構築したものか、断層に伴う地割れであるか検出部が浅くて判断に迷ったが、遺構との切り合いを見る限りでは断層によるずれは確認できなかったので人工的な溝と思われる。

28号住居址内から35号住居址の北側に二列に並ぶ柵と思われる小さくて細い杭痕(図版24-③)は、いずれも直径7cm以下で、ローム面からでも平均30cm以上の深さまで入っていた。この柵列は小字『馬飼場』の中で角に飛びだした部分を斜めに結んでおり、牧場に関係する施設の可能性も否定できない。

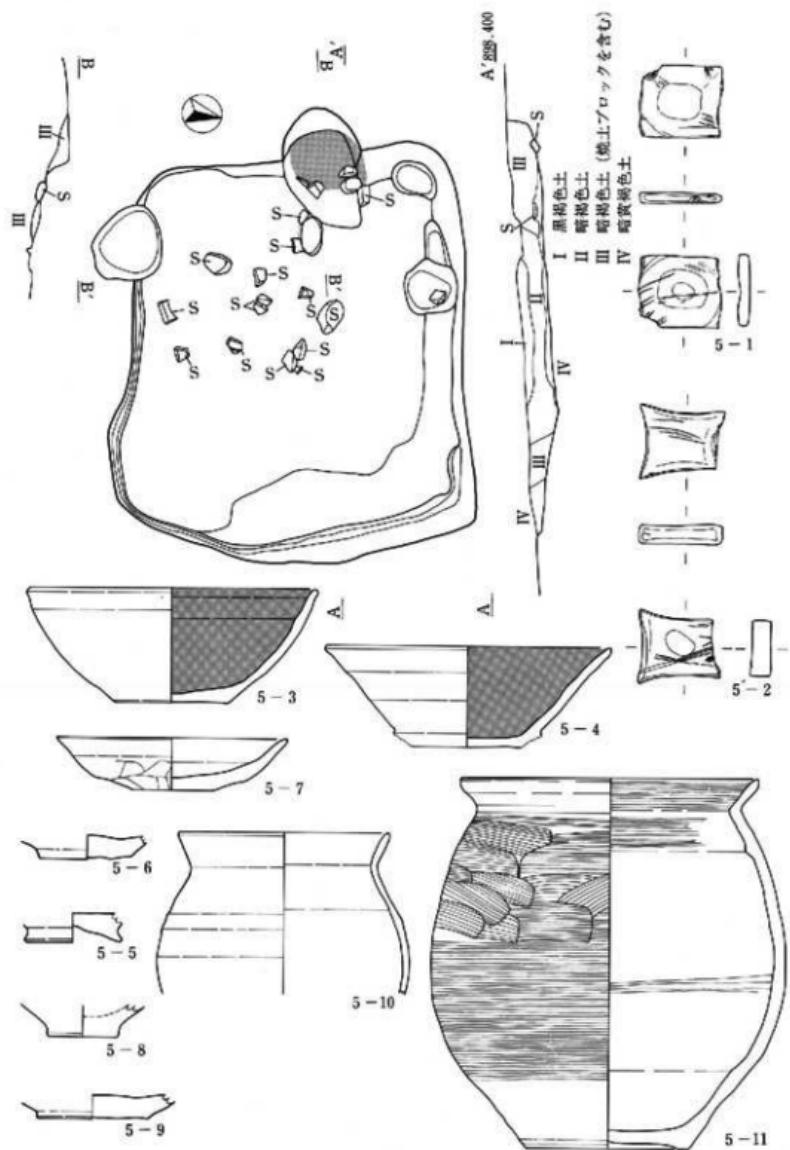
天狗山遺跡は茅野市史で短期間の生活が営まれた小規模の遺跡であると記されているが今回の調査結果では当初の予想を上回る大きな成果を上げることができた。一方で山の削平という大規模な開発でまた一つ貴重な遺跡が跡形もなく消えてしまった。調査区が短い調査期間の中で大きく広がり、整理作業も短期間で行わなければならず、個々の遺構、遺物について説明、分析、考察ともに十分ではない。更に各時代について多くの問題を提起する結果となった。将来再考をする予定である。

引用参考文献

- 八幡一郎 1922 「信濃国諏訪郡金澤村の堅穴」『人類学雑誌』37-9
- 鳥居龍藏 1924 『諏訪史』第一卷 信濃教育会諏訪部会
- 岡谷市教育委員会 1981 「橋原遺跡」
- 長野県教育委員会 1981 「昭和51・52年度長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—茅野市・原村(その3)」
- 長野県教育委員会 1982 「昭和51・52年度長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—原村(その5)」
- 神奈川考古同人会 1983 「シンポジウム 繩文時代早期末・前期初頭の諸問題」『神奈川考古』 第17号
- 茅野市教育委員会 1983 「高部遺跡」
- 茅野市教育委員会 1983 「構井・阿弥陀堂遺跡」
- 茅野市教育委員会 1986 「高風呂遺跡」
- 茅野市教育委員会 1986 「茅野市史 上巻 原始・古代」
- 茅野市教育委員会 1987 「磯並遺跡」
- 長野県史刊行会 1988 「長野県史 考古資料編 全一巻(四) 道情・遺物」
- 松田真一 1988 「大川式土器と神宮寺式土器」
- 会田 進 1988 「中部山岳地方押形文系上器の様相—長野県を中心に—」『縄文早期を考える—押型文化の諸問題—』帝塚山考古学研究所
- 守矢昌文 1989 「長野県における縄文時代早期末から前期初頭の土器群について」『会報 3』諏訪考古学研究会
- 茅野市教育委員会 1990 「狐塚遺跡」
- 茅野市教育委員会 1990 「芥沢遺跡」
- 金沢村史刊行会 1992 「信州金沢の歴史」

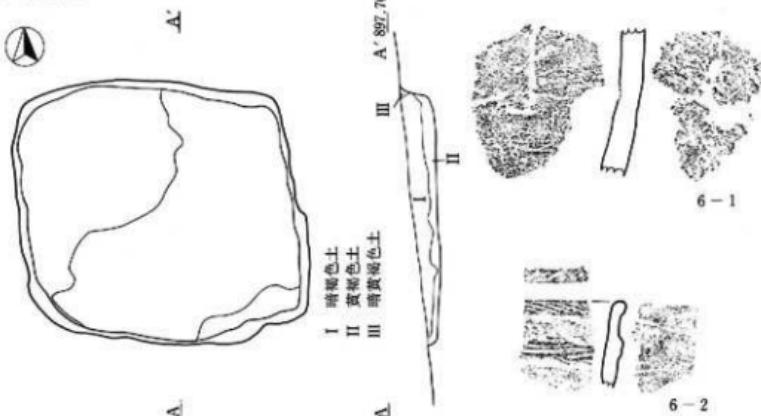


第4図 遺構分布図



第5図 第1号住居址遺構と遺物

第2号住居址

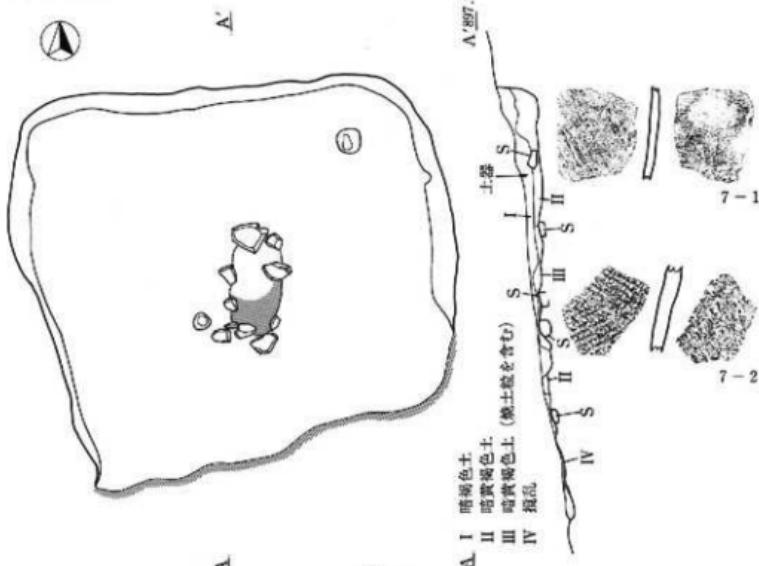


第3号住居址

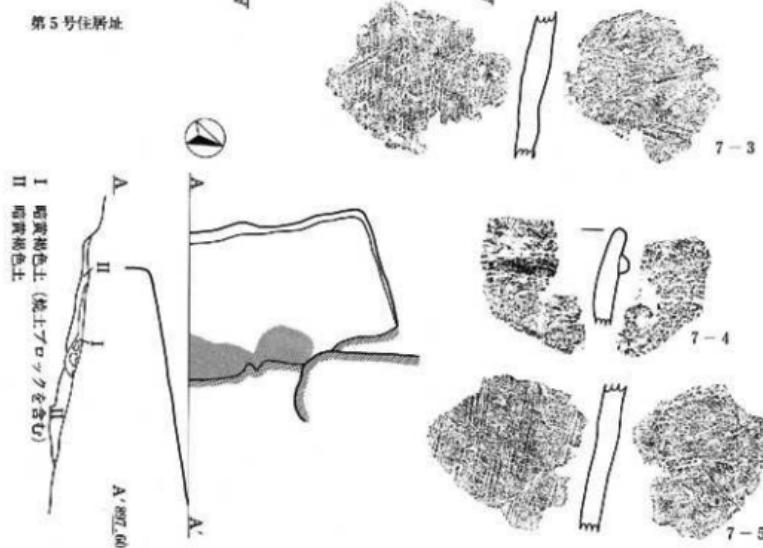


第6図 第2号住居址、第3号住居址遺構と遺物

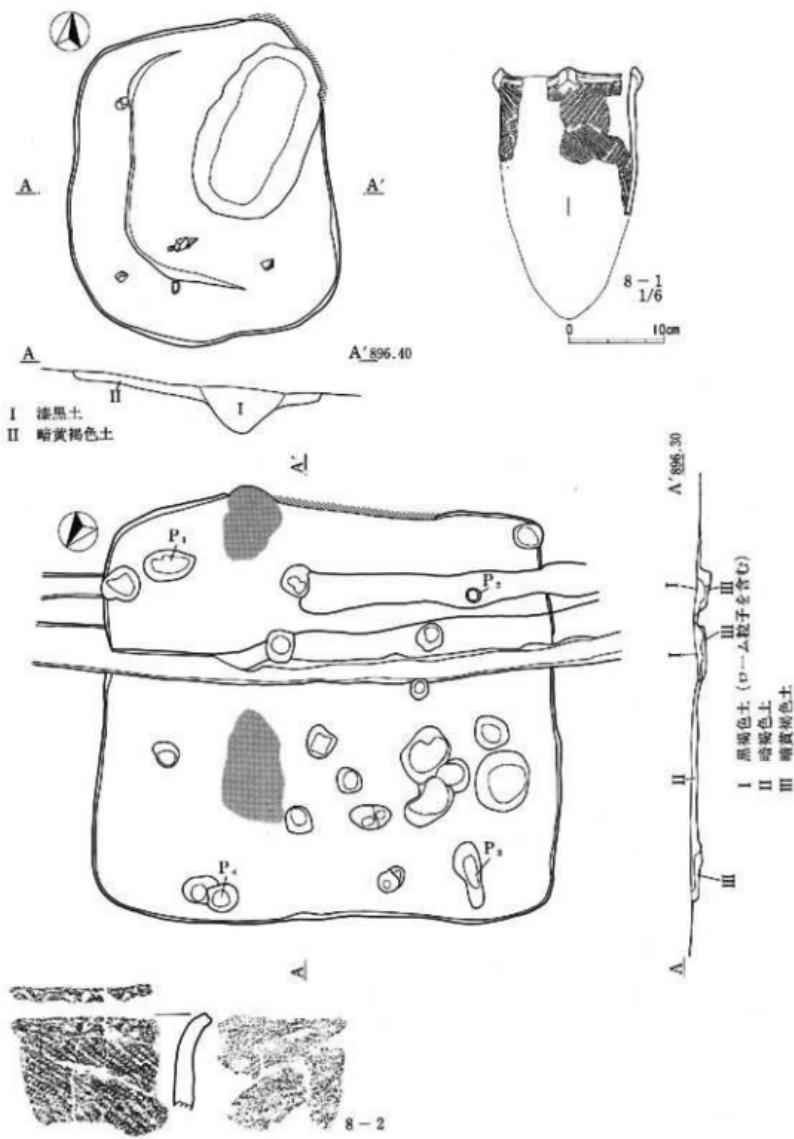
第4号住居址



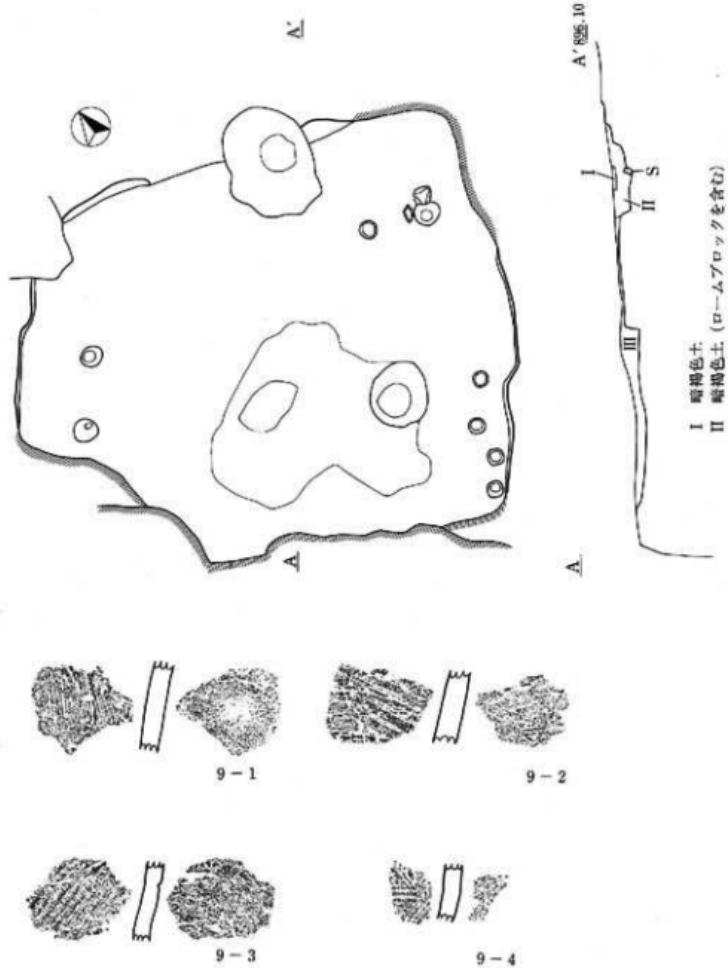
第5号住居址



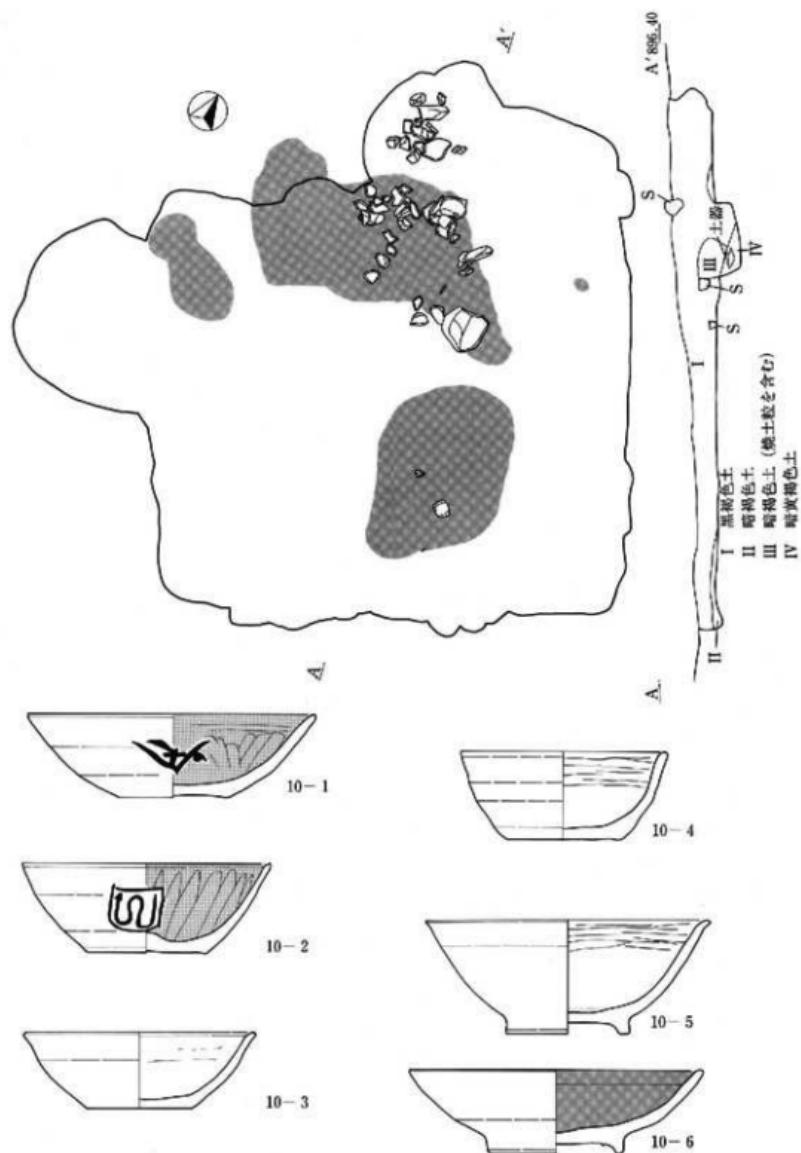
第7図 第4号住居址、第5号住居址遺構と遺物



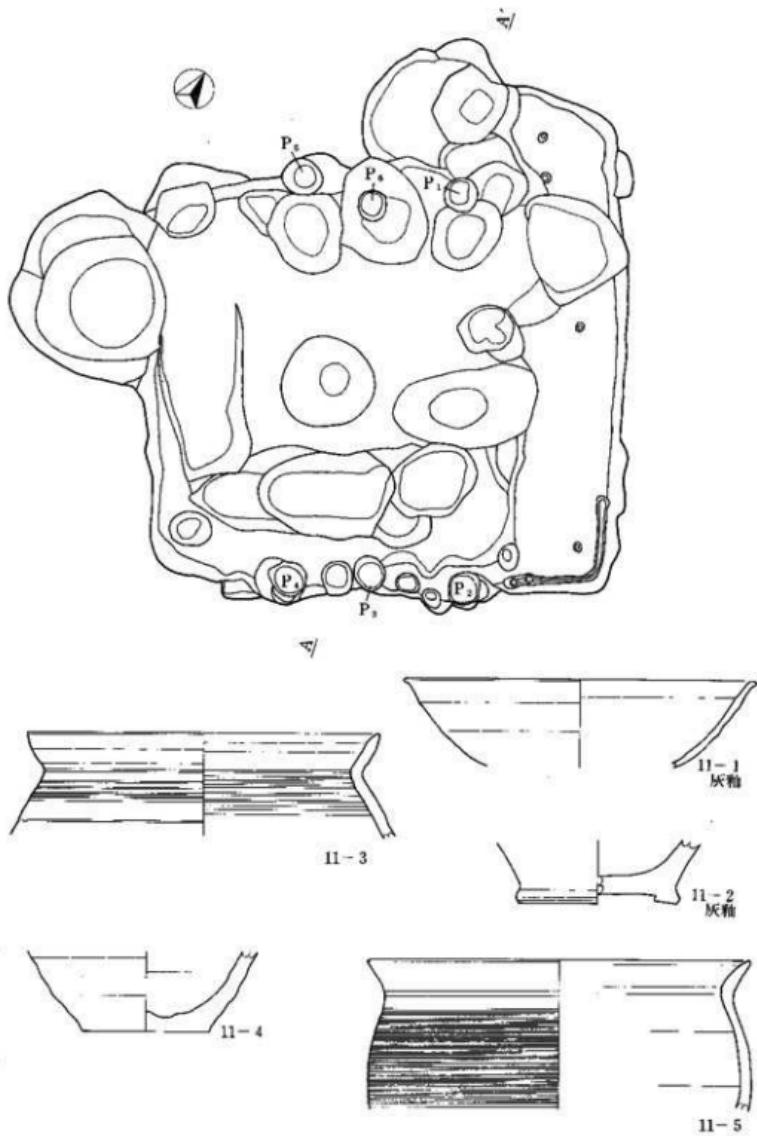
第8図 第6号住居址、第7号住居址遺構と遺物



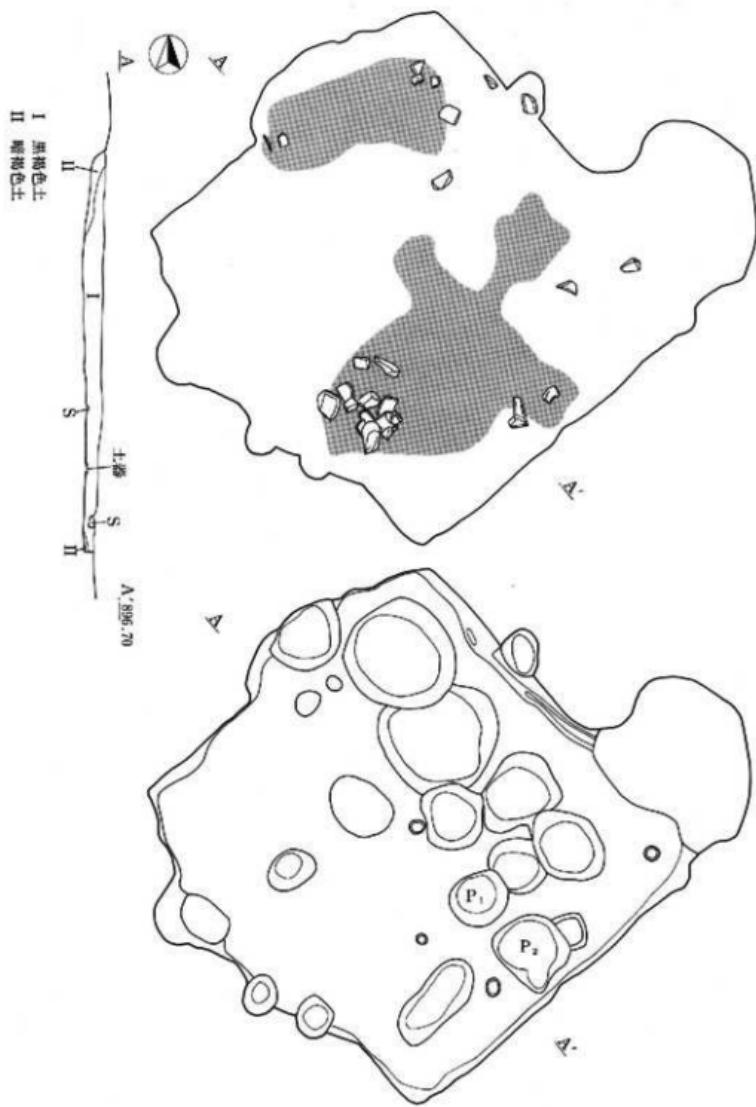
第9図 第8号住居址造構と遺物



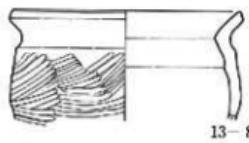
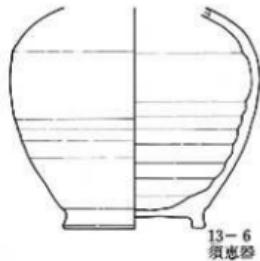
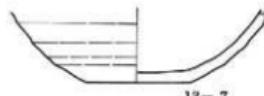
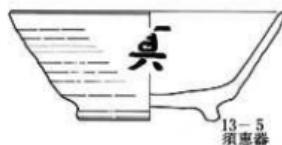
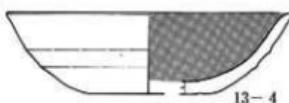
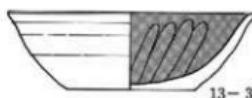
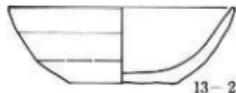
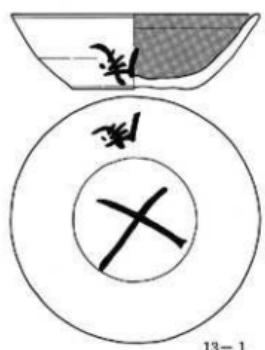
第10図 第9号住居址焼土、発検出状況遺物



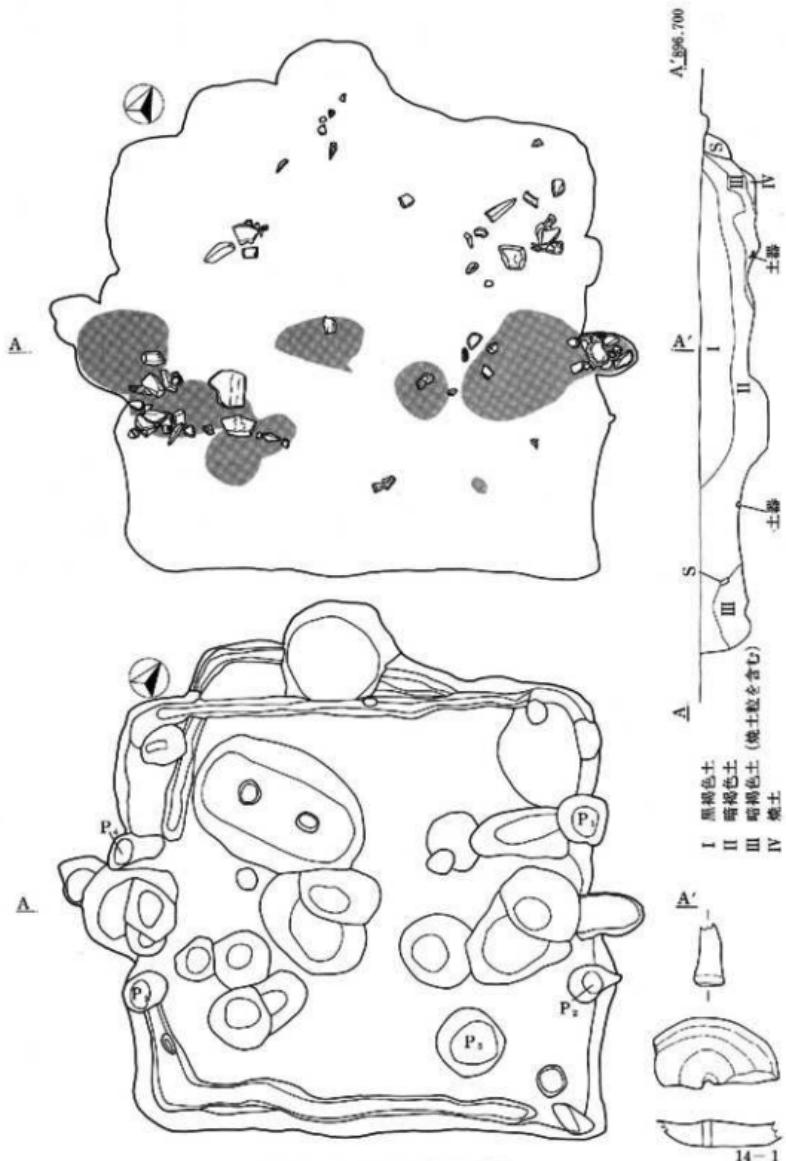
第11図 第9号住居址遺構、遺物



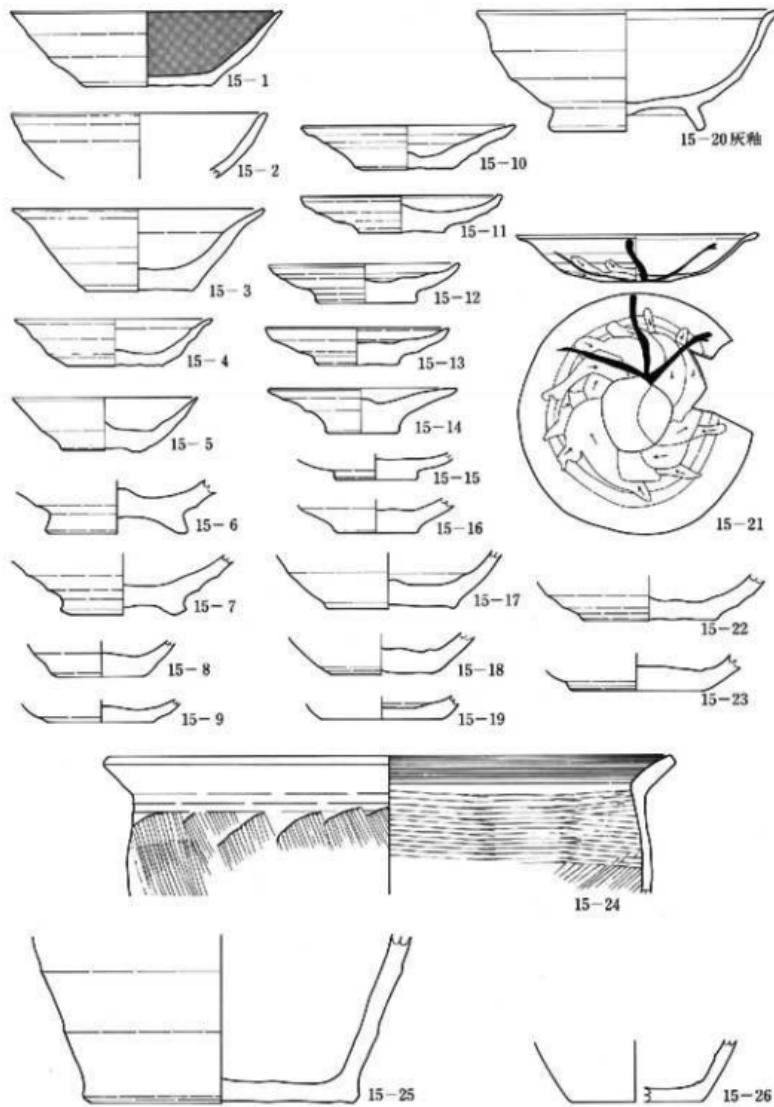
第12図 第10号住居址遺構



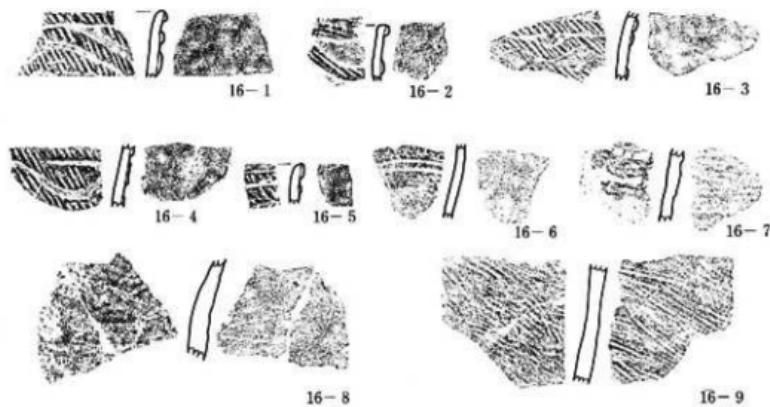
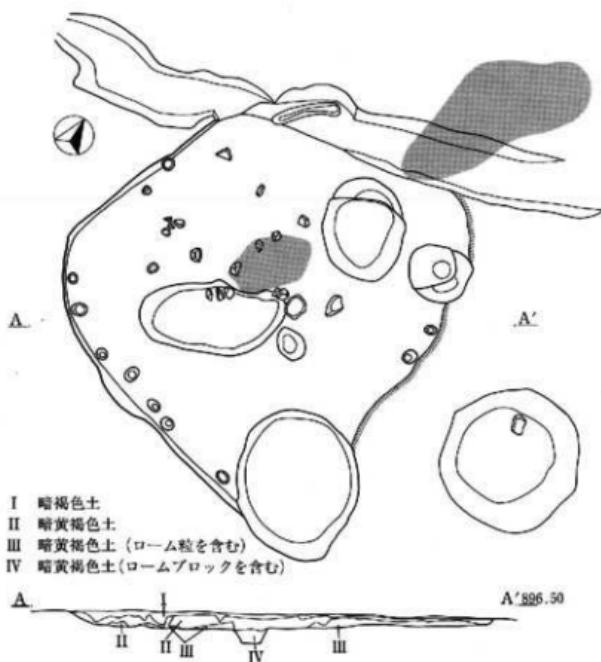
第13圖 第10號住居址遺物



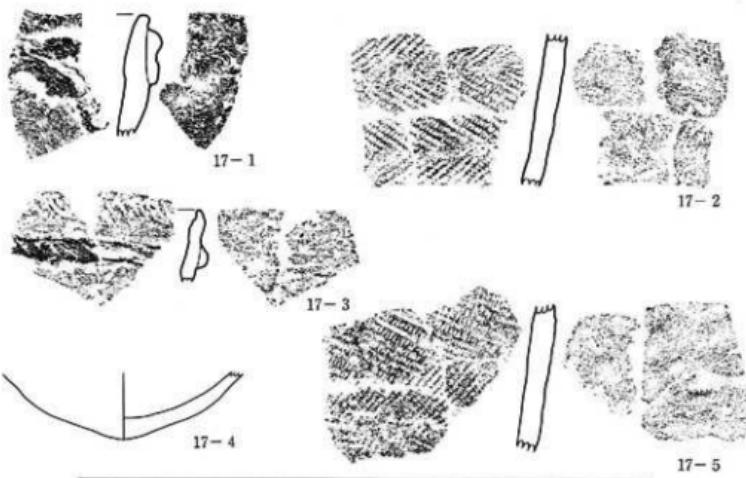
第14図 第11号住居址遺構と遺物



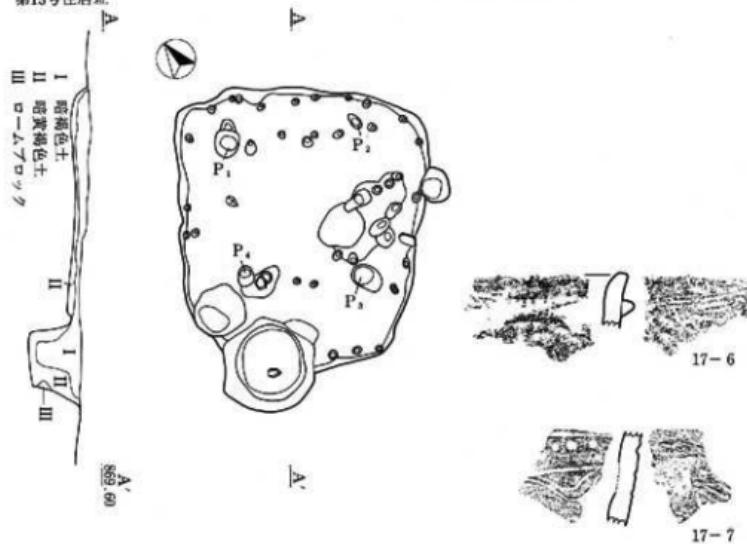
第15図 第11号住居址遺物



第16図 第12号住居址遺構と遺物

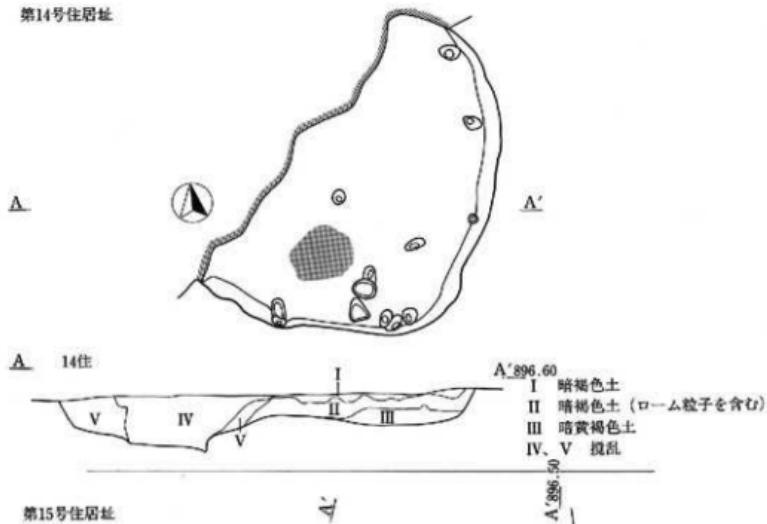


第13号住居址

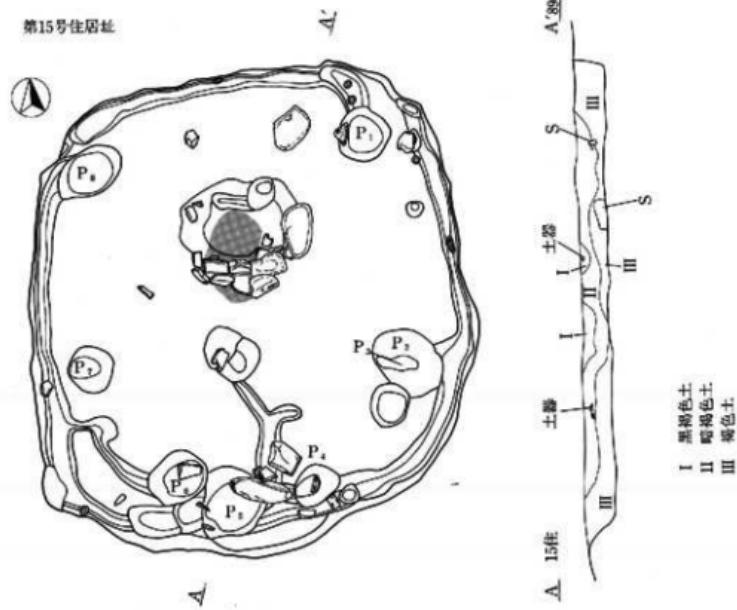


第17図 第12号住居址遺物、第13号住居址遺構、遺物

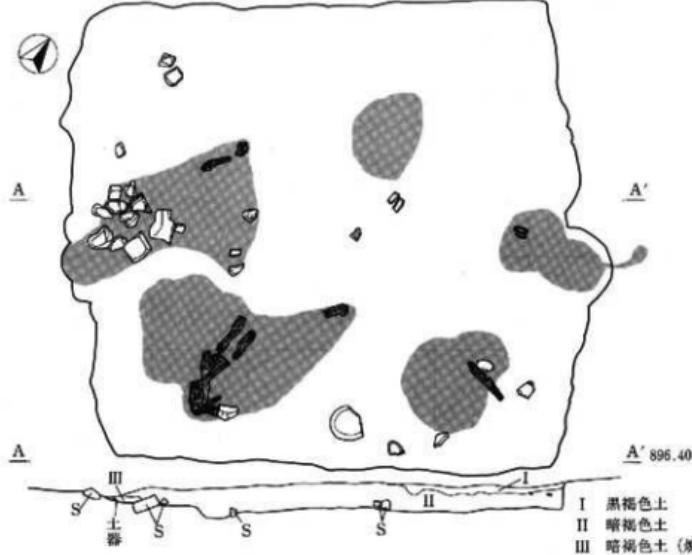
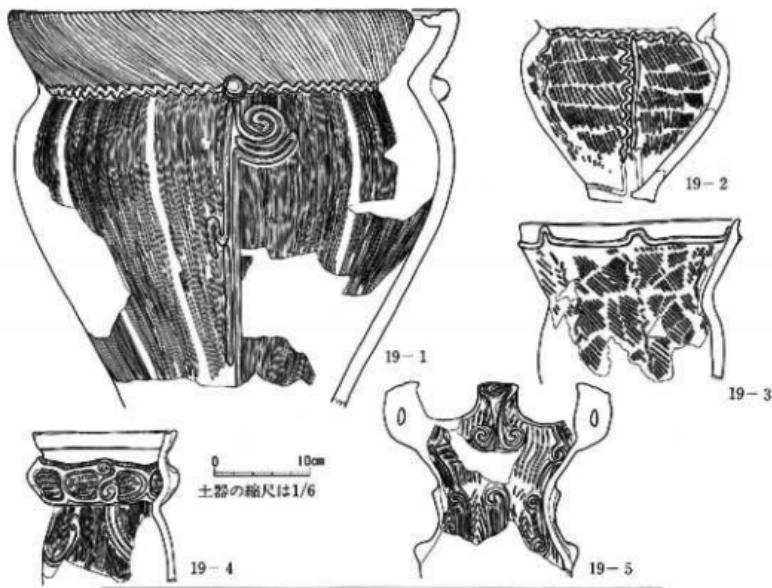
第14号住居址



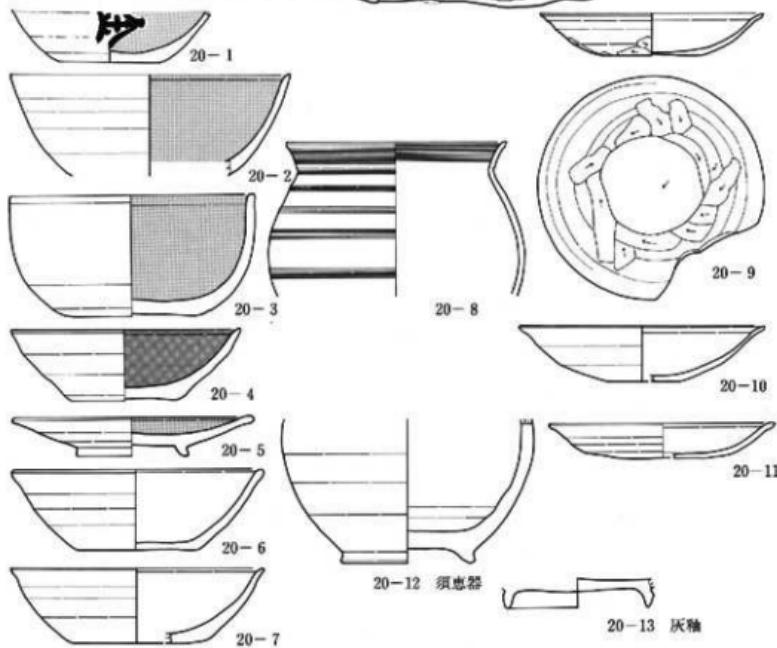
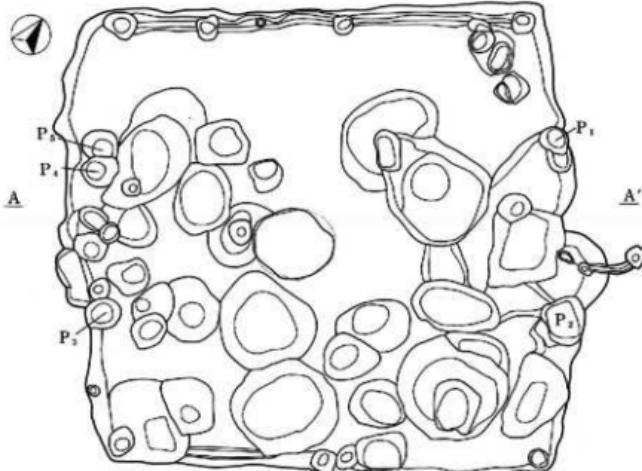
第15号住居址



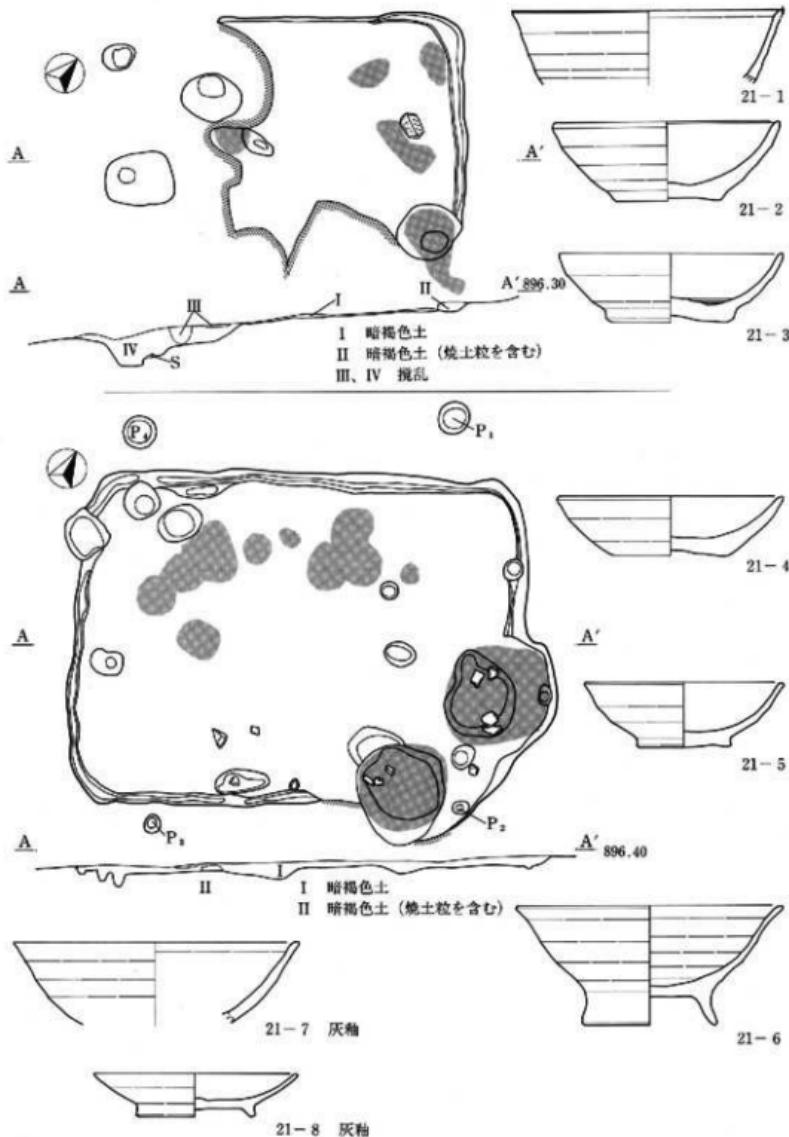
第18図 第14号住居址、第15号住居址遺構

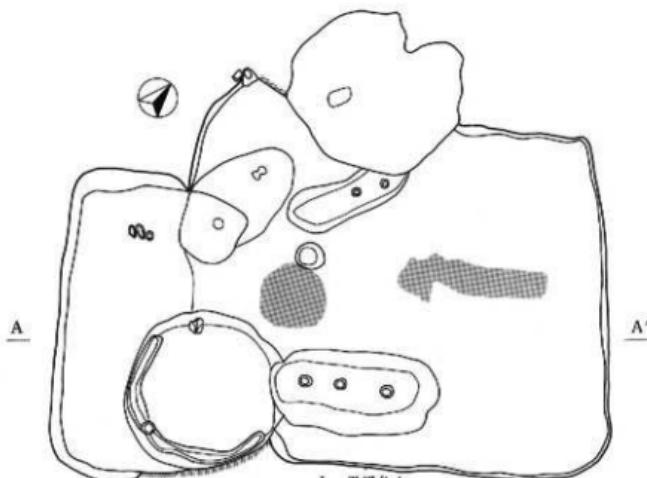


第19図 第15号住居址遺物、第16号住居址焼土、礎



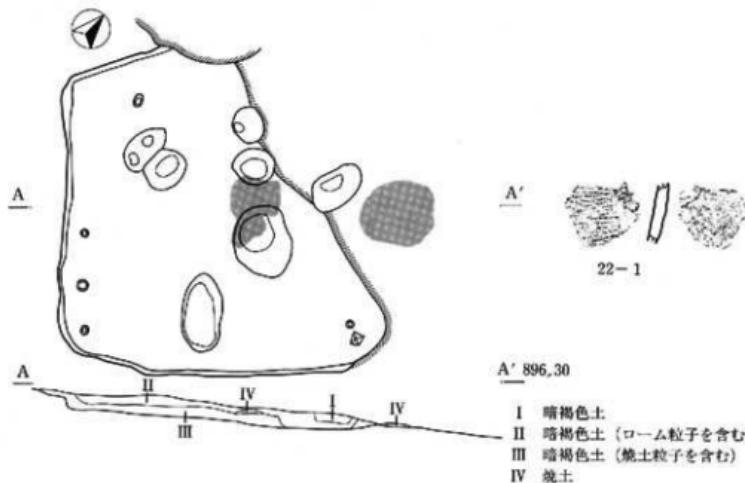
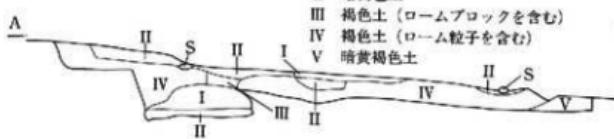
第20圖 第16号住居址遺構、遺物





I 黒褐色土
II 暗褐色土
III 棕色土 (ロームブロックを含む)
IV 棕色土 (ローム粒子を含む)
V 暗黄褐色土

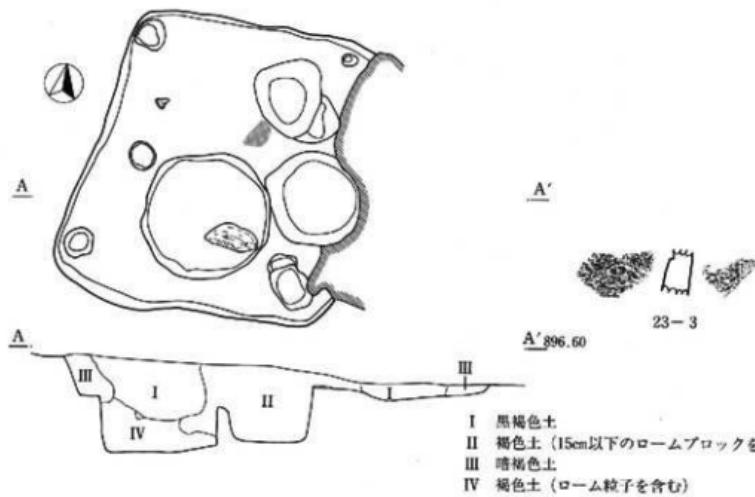
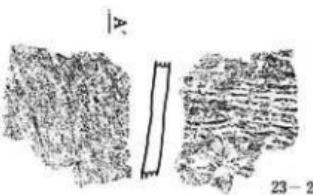
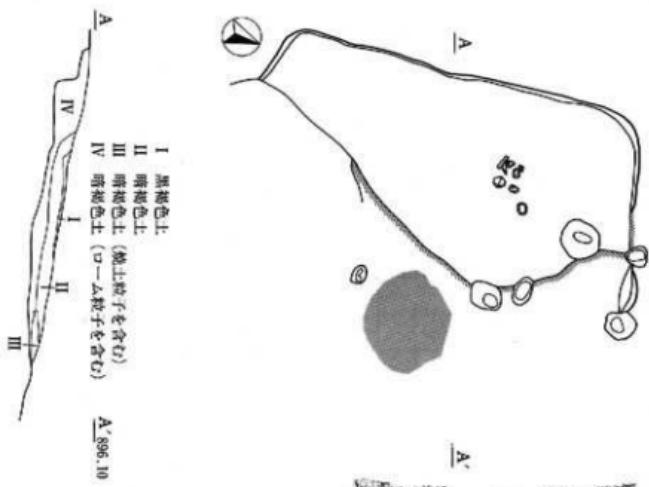
A' 896.40



A' 896.30

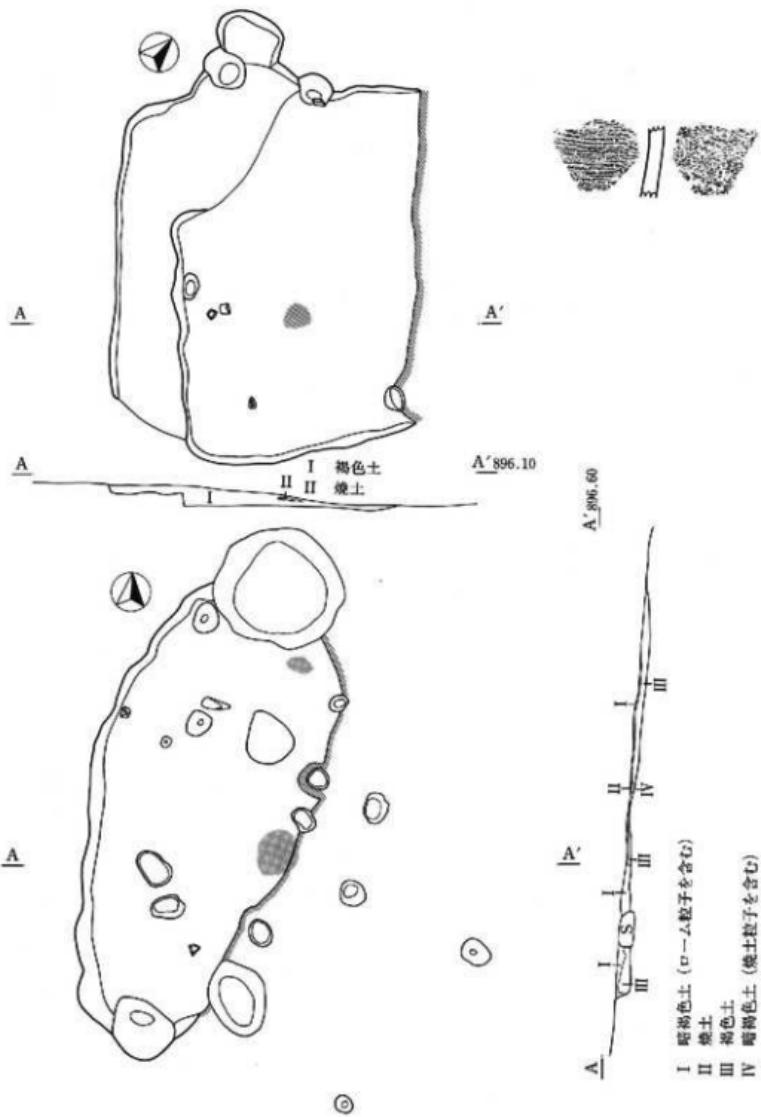
I 暗褐色土
II 暗褐色土 (ローム粒子を含む)
III 暗褐色土 (焼土粒子を含む)
IV 焼土

第22図 第19号住居址、第20号住居址遺構、遺物

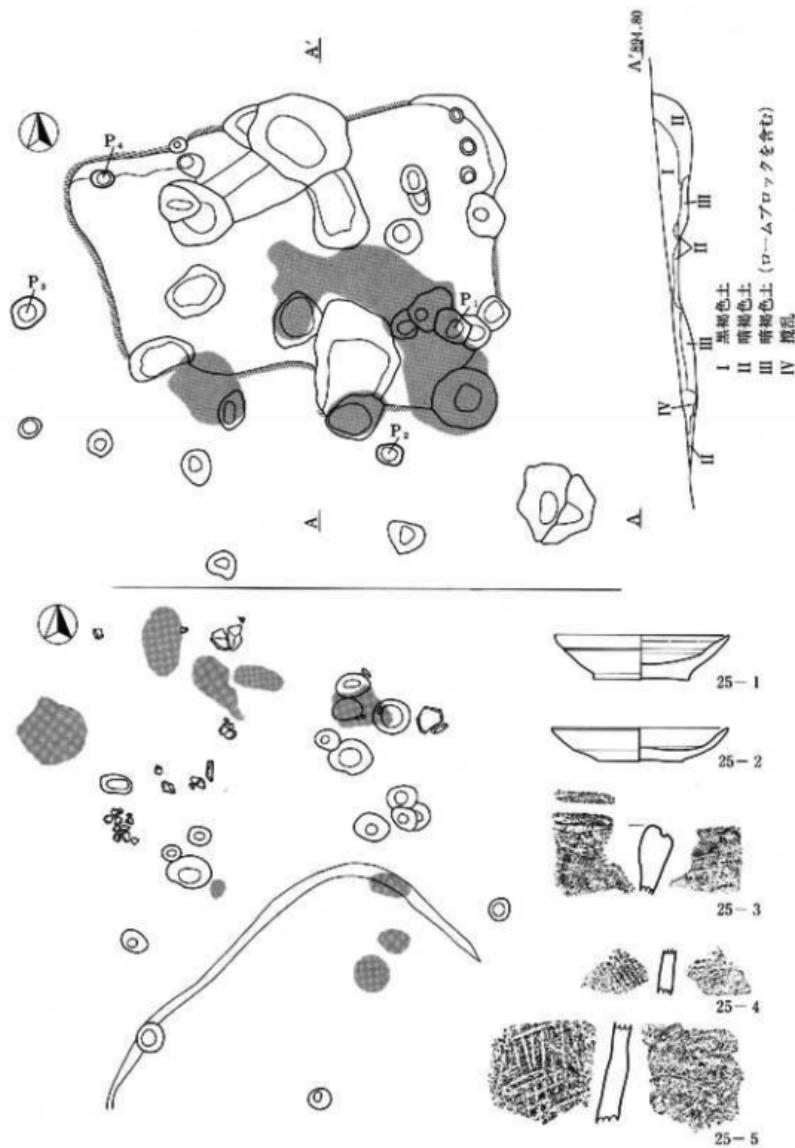


I 黒褐色土
II 褐色土（15cm以下のロームブロックを含む）
III 暗褐色土
IV 褐色土（ローム粒子を含む）

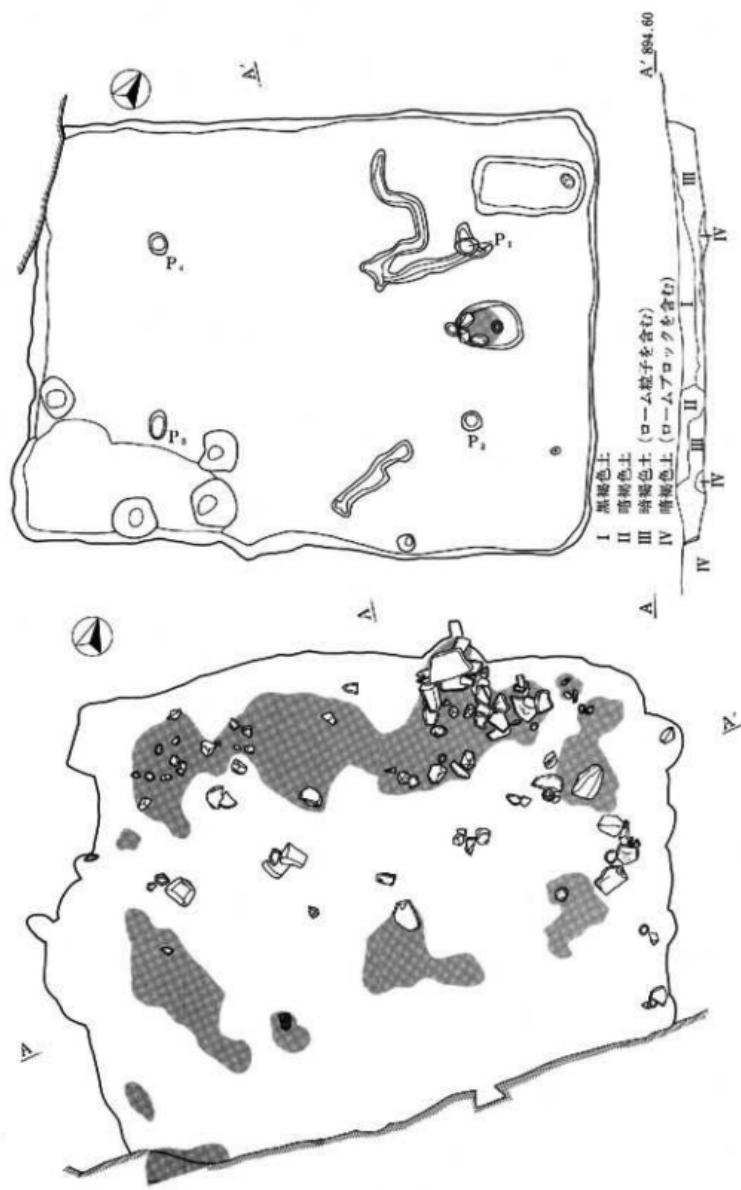
第23図 第21号住居址、第22号住居址遺構、遺物



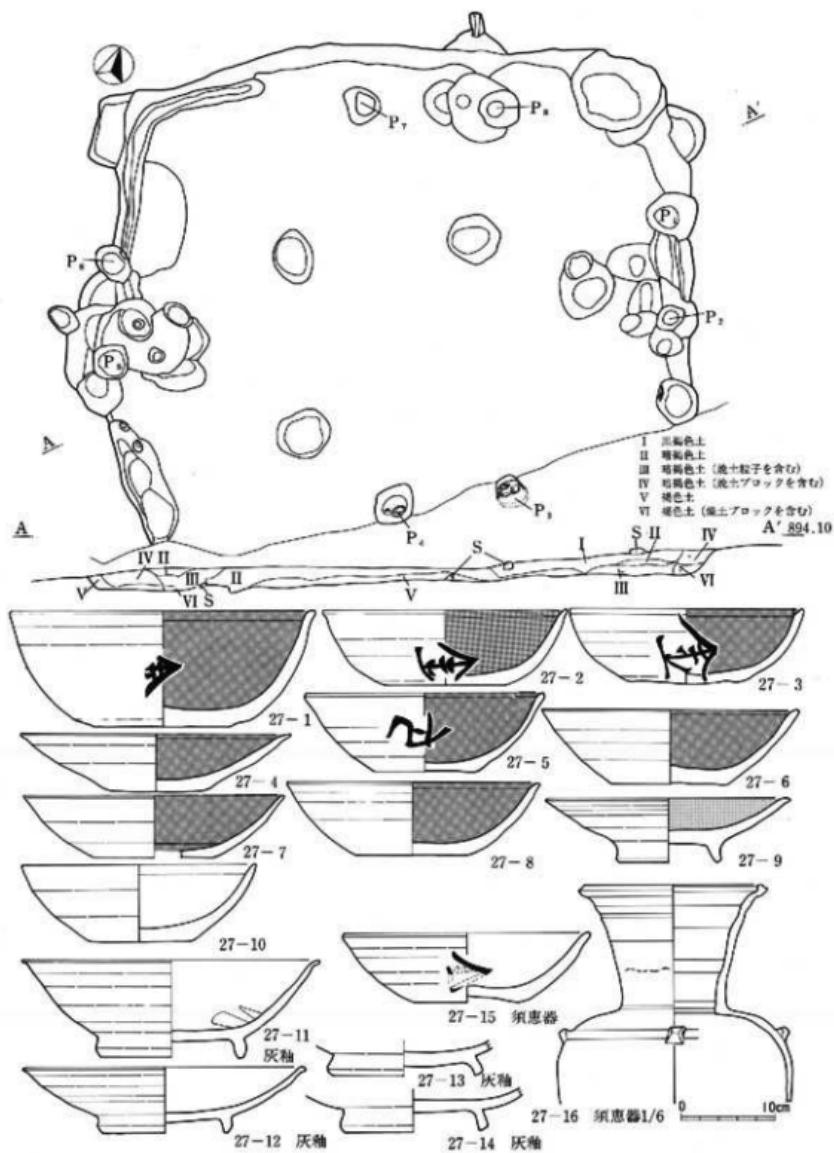
第24図 第23号住居址、第24号住居址遺構、遺物



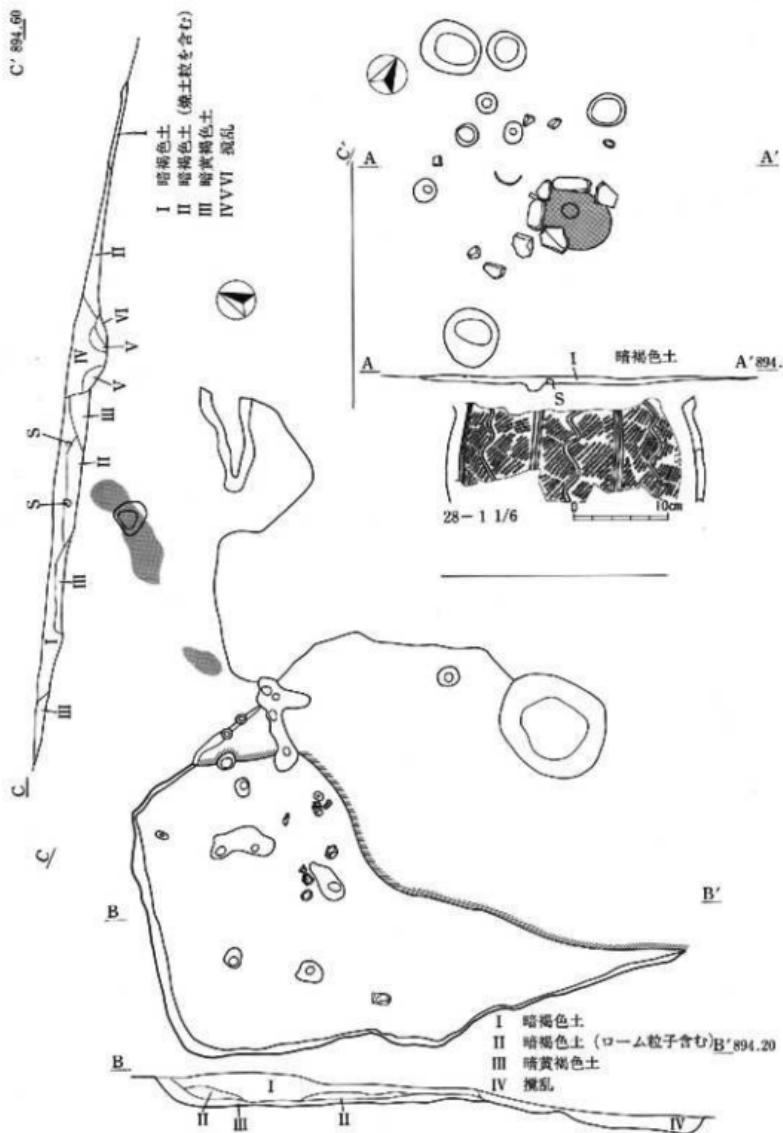
第25図 第25号住居址、第26号住居址遺構、遺物



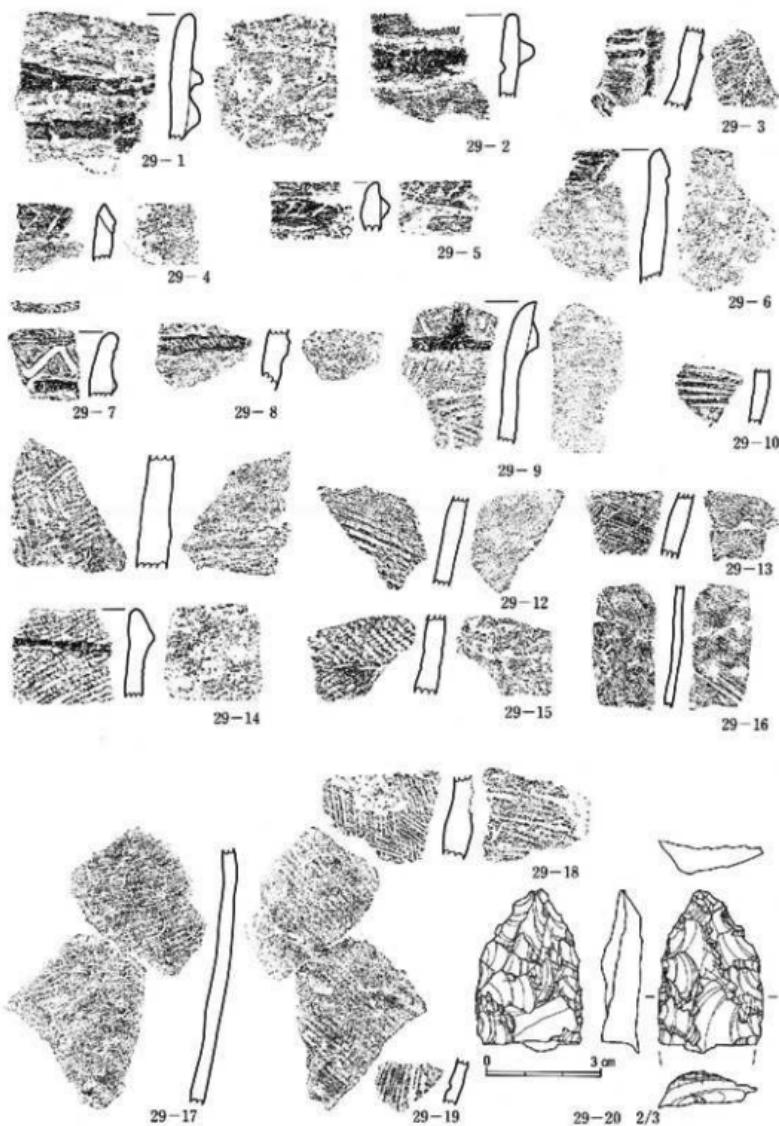
第26図 第27号住居址遺構、第28号住居址焼土、礫



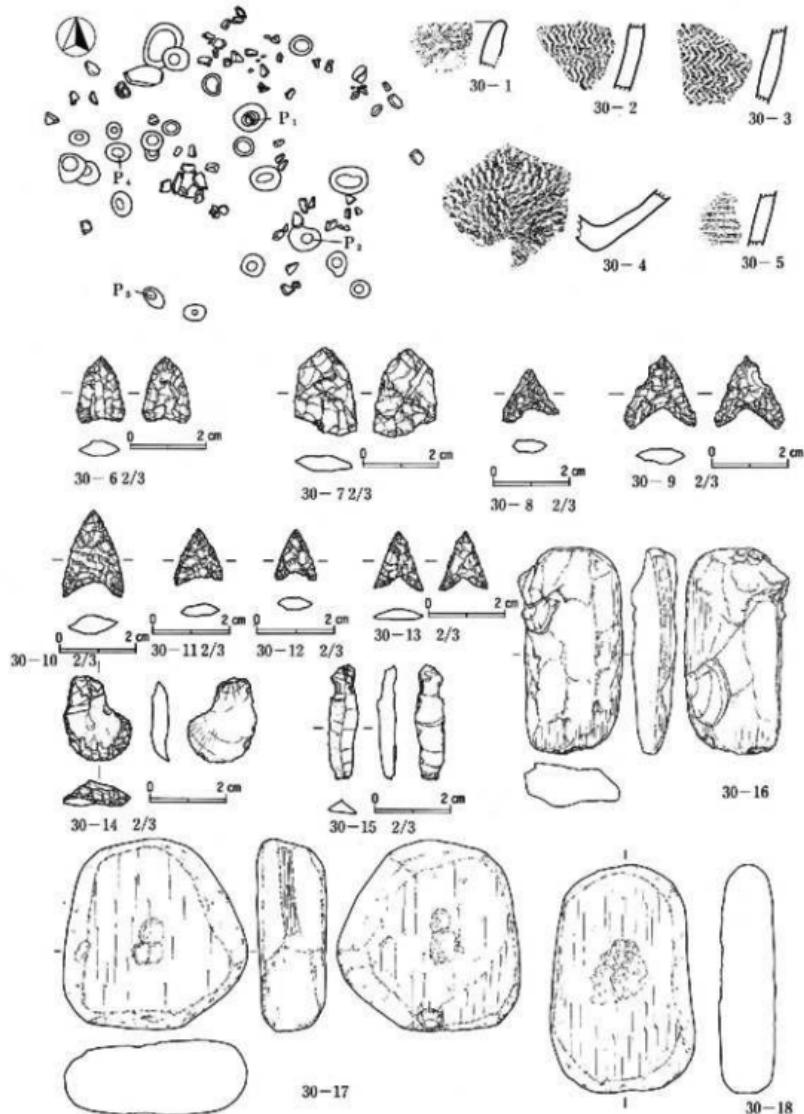
第27図 第28号住居址遺構、遺物



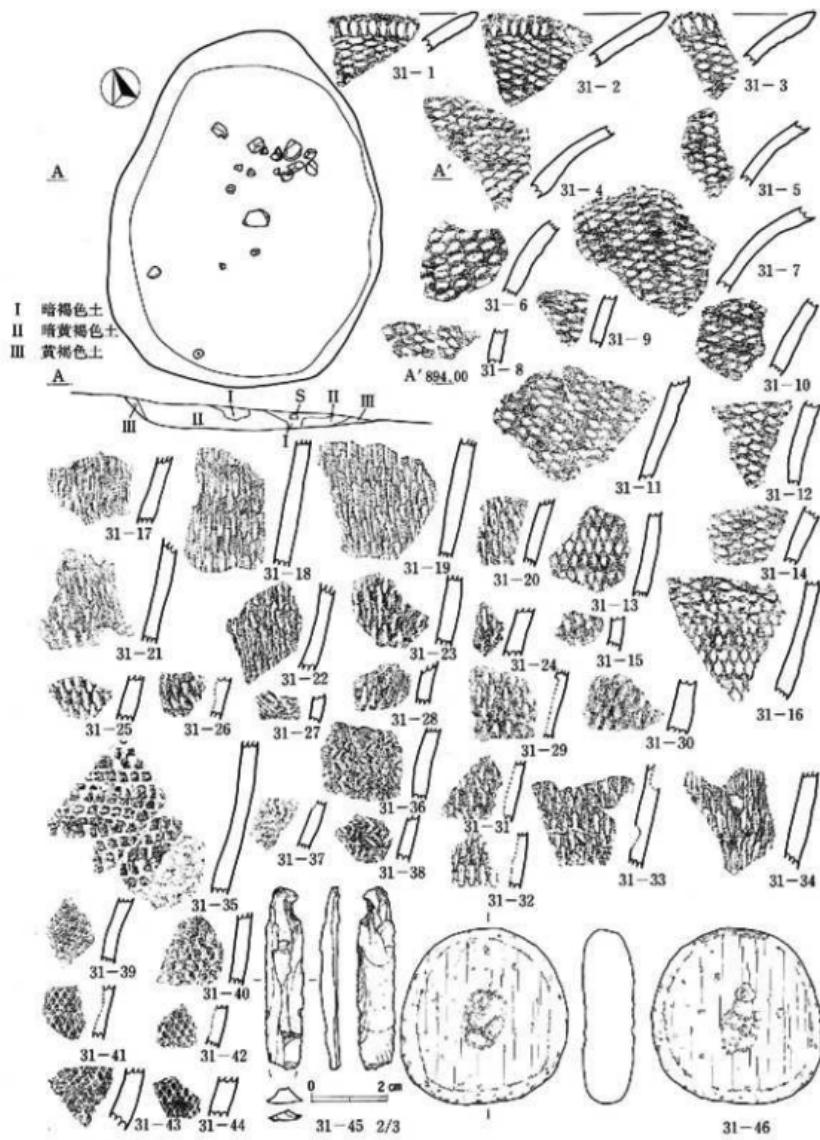
第28図 第29号住居址遺構遺物、第30、31号住居址遺構



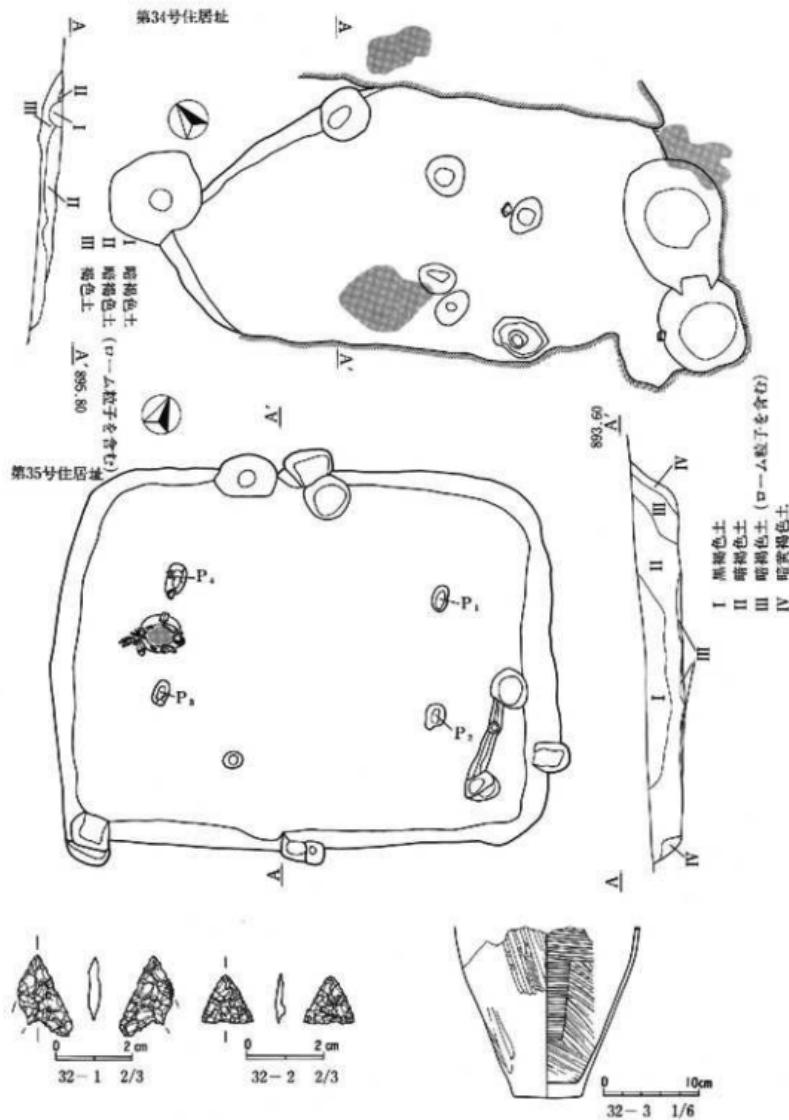
第29図 第30号住居址、第31号住居址遺物



第30図 第32号住居址遺構、遺物



第31図 第33号住居址遺構、遺物

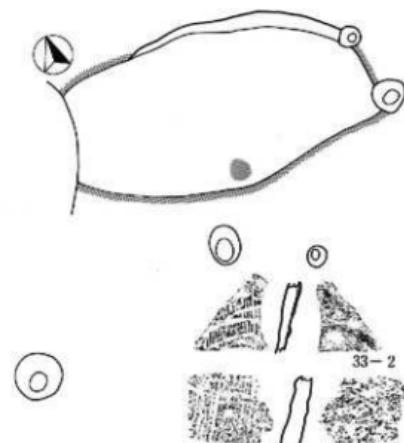


第32図 第34号住居址、第35号住居址造構、遺物

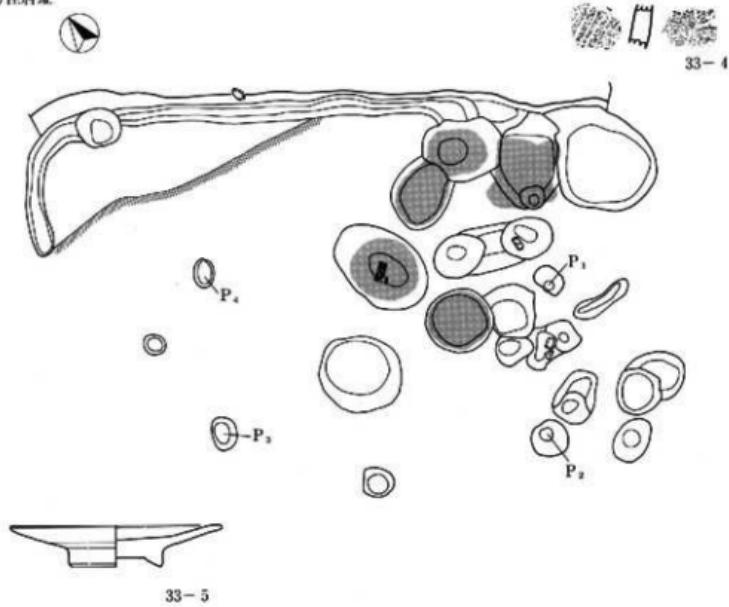
第36号住居址



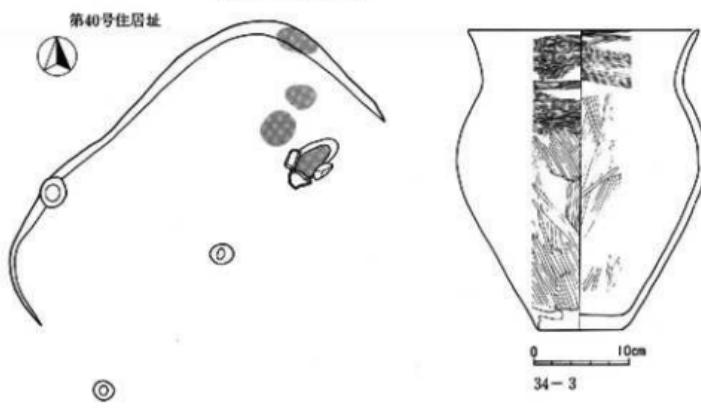
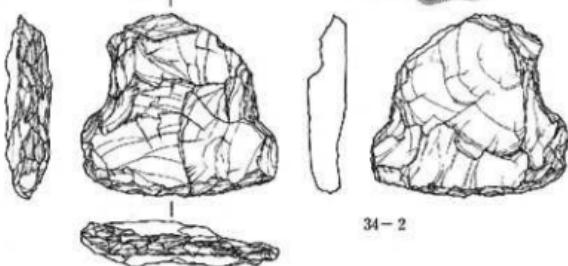
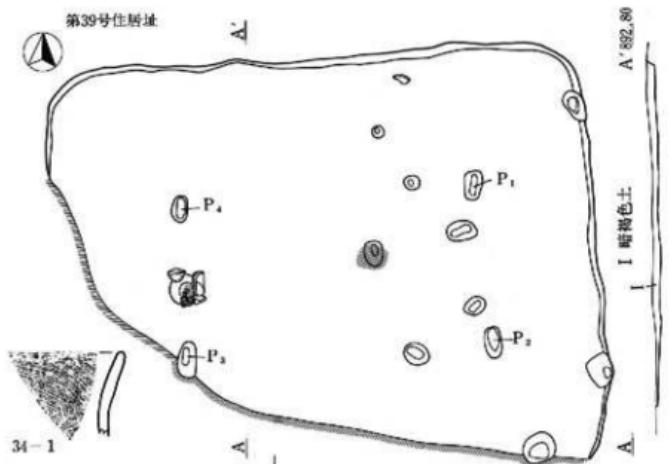
第37号住居址



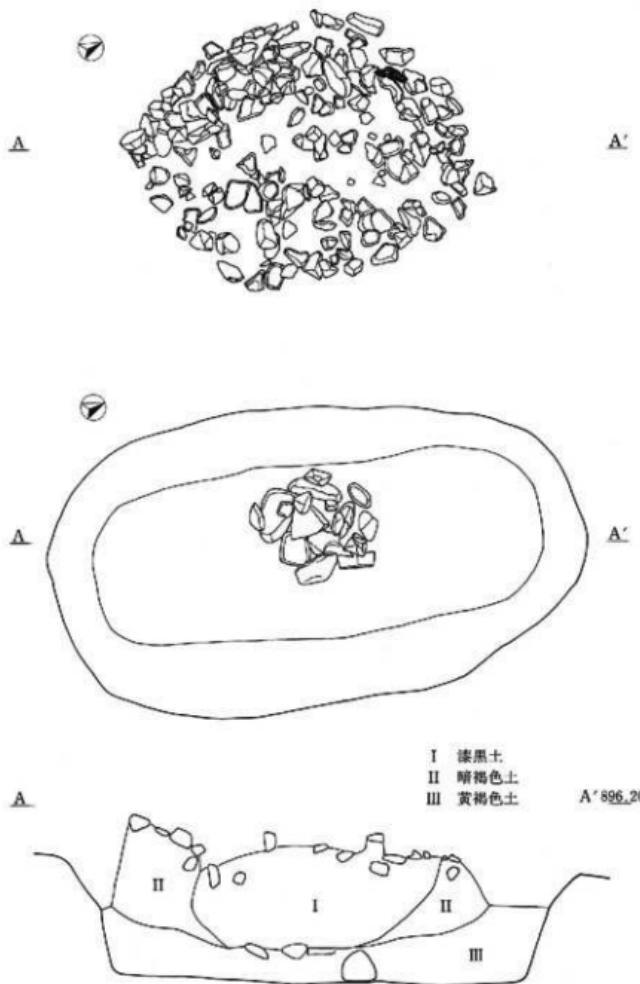
第38号住居址



第33图 第36号住居址、第37号住居址、第38号住居址造構、遺物

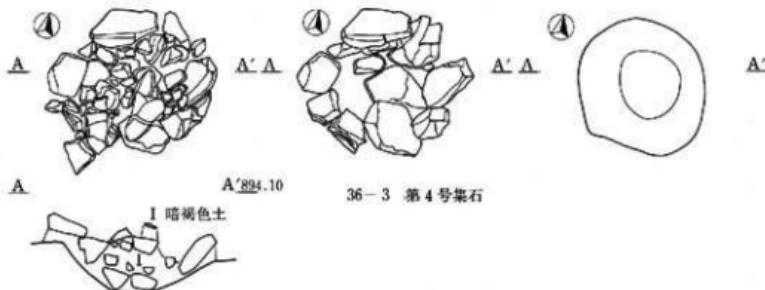
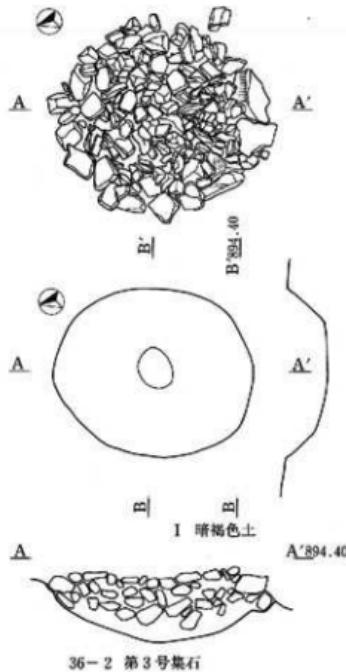
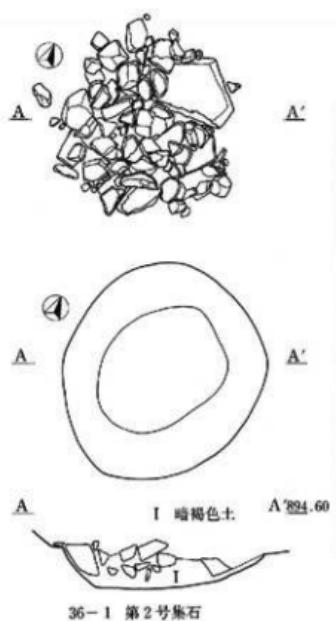


第34図 第39号住居址、第40号住居址遺構、遺物

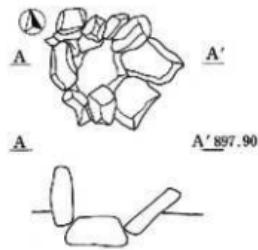
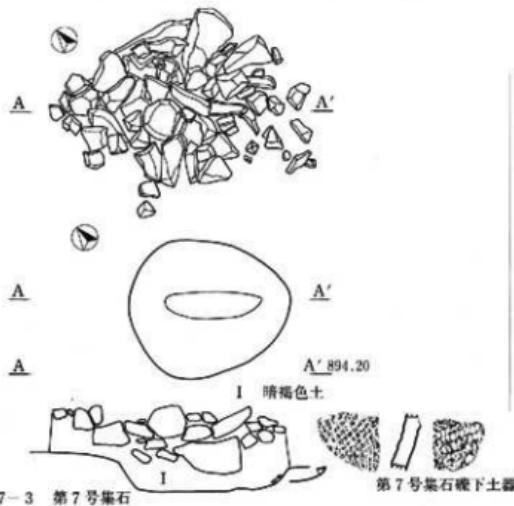
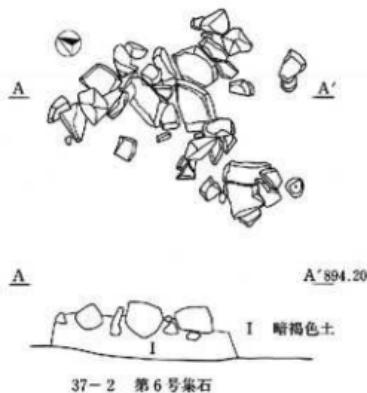
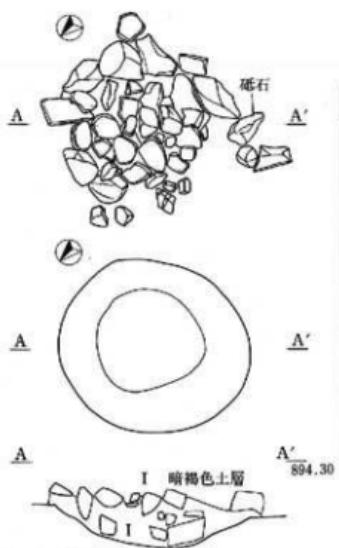


第1号集石

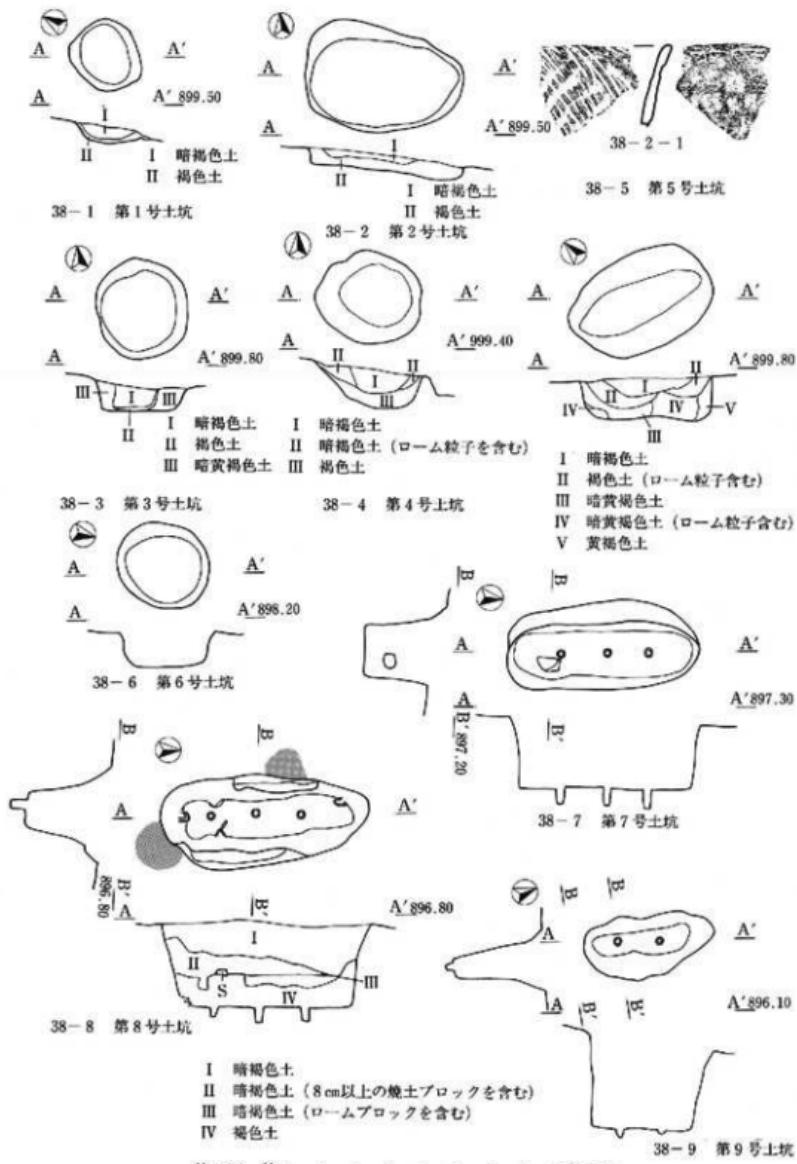
第35図 第1号集石



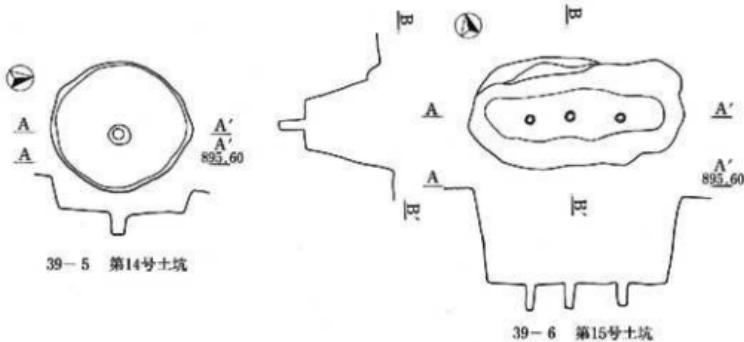
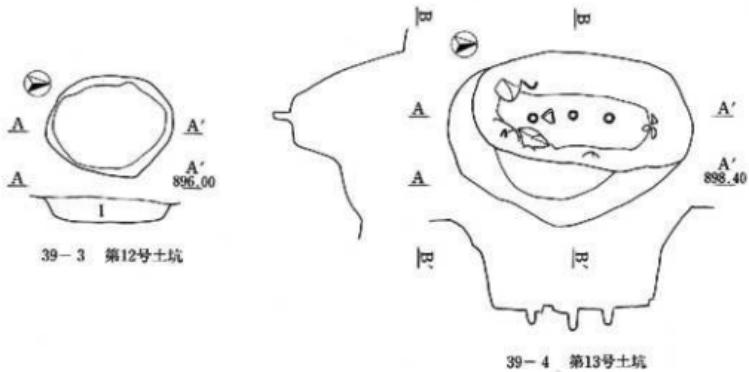
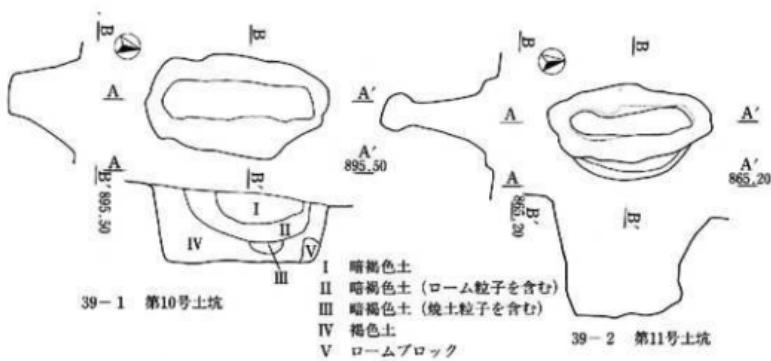
第36图 第2、3、4号集石



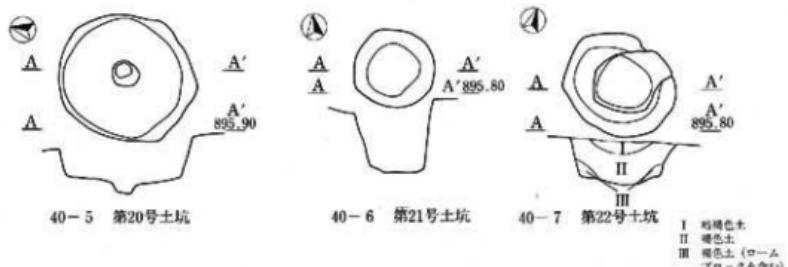
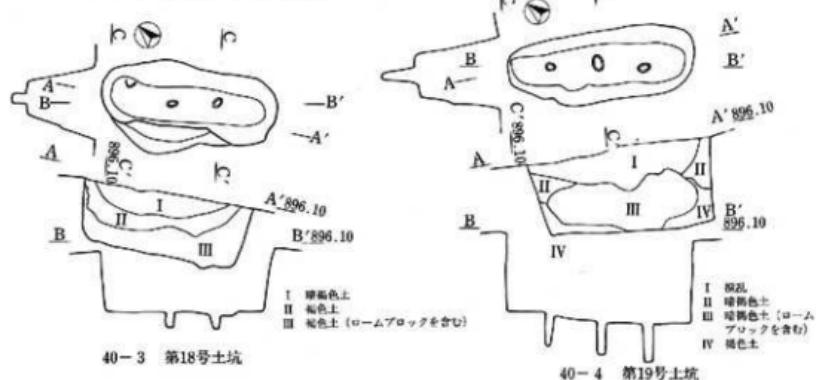
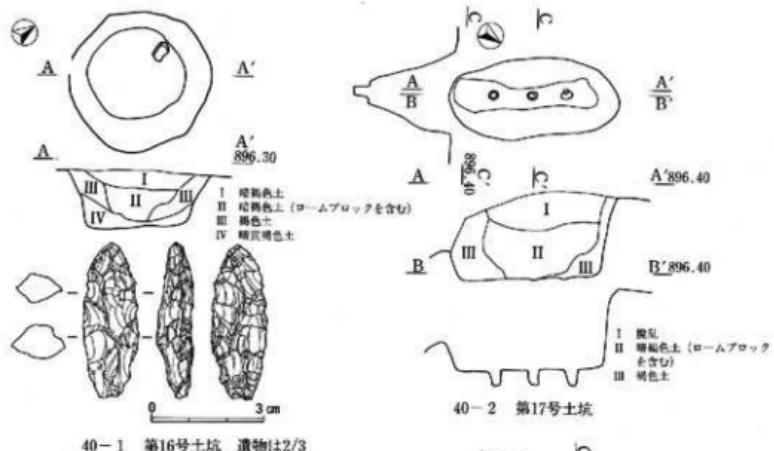
第37圖 第5、6、7號集石、第1號配石土坑



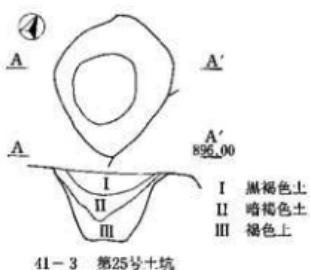
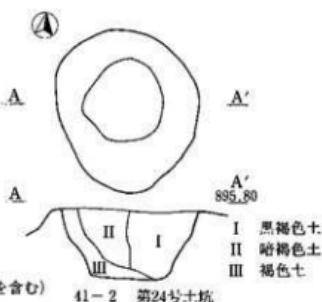
第38図 第1、2、3、4、5、6、7、8、9号土坑



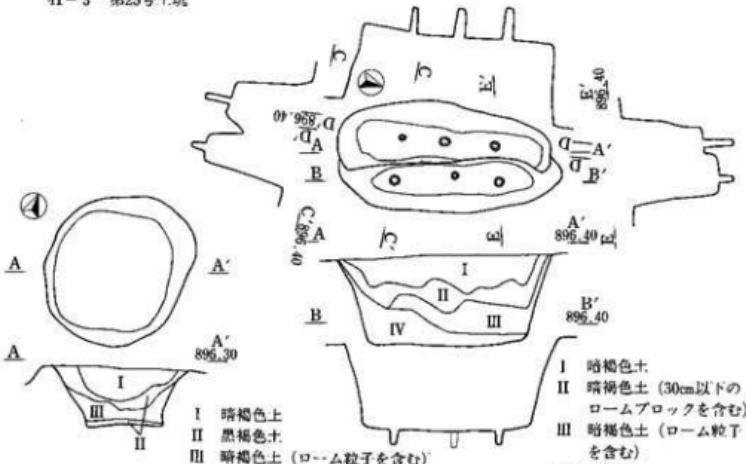
第39図 第10、11、12、13、14、15号土坑



第40図 第16、17、18、19、20、21、22号土坑



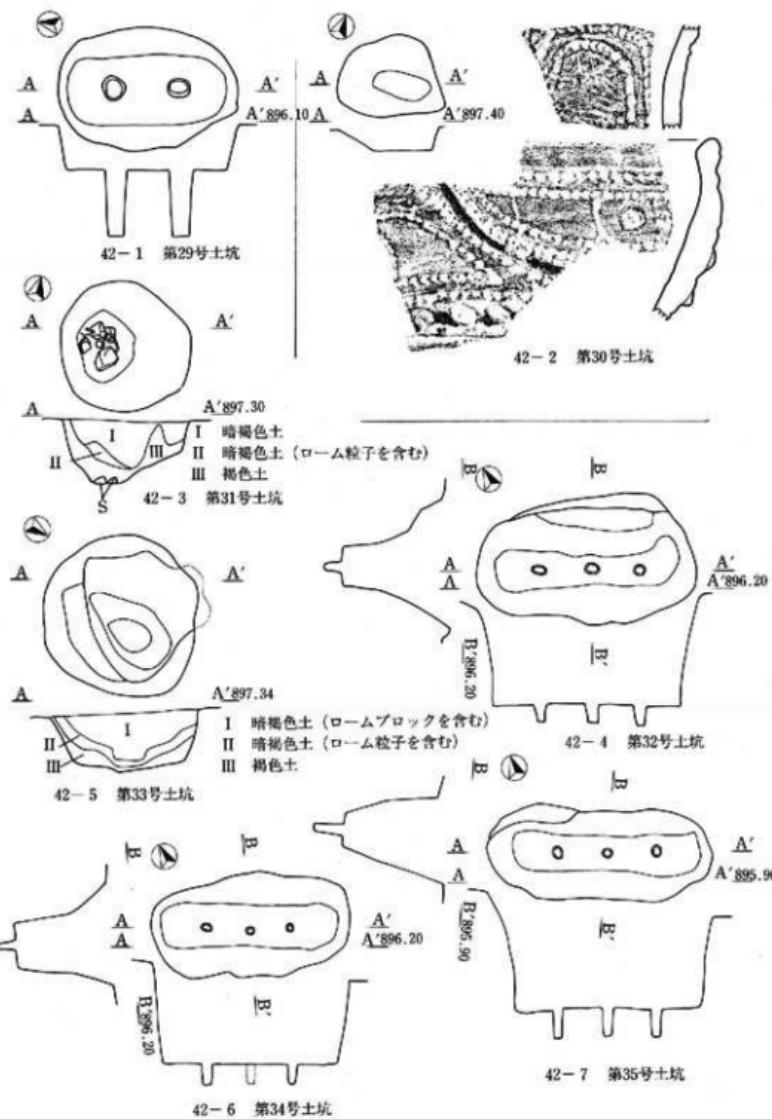
41-3 第25号土坑



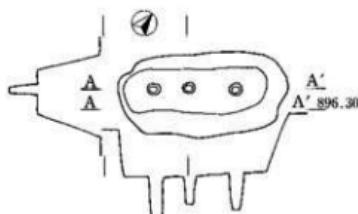
41-5 第27号土坑

41-6 第28号土坑

第41図 第23、24、25、26、27、28号土坑



第42図 第29、30、31、32、33、34、35号土坑



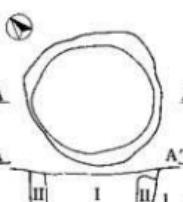
43-1 第36号土坑



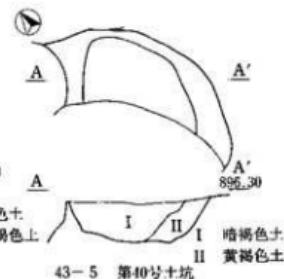
43-2 第37号土坑



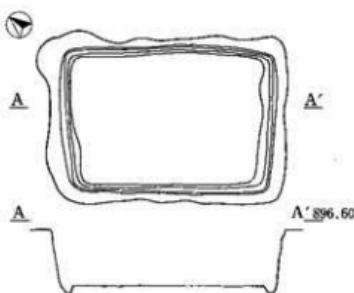
43-3 第38号土坑



43-4 第39号土坑



43-5 第40号土坑



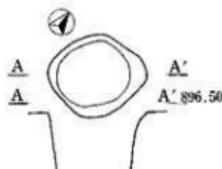
43-6 第41号土坑



43-7 第42号土坑

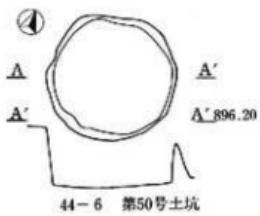
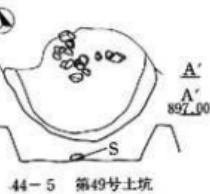
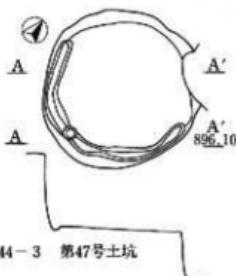
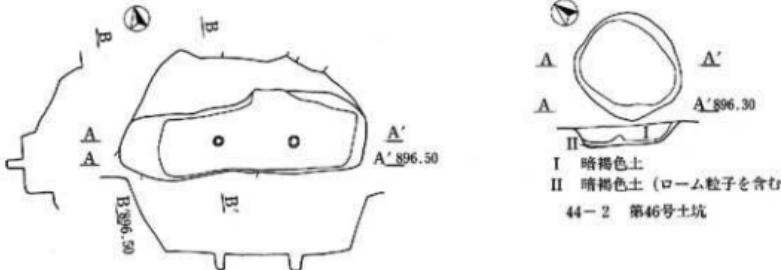


43-8 第43号土坑

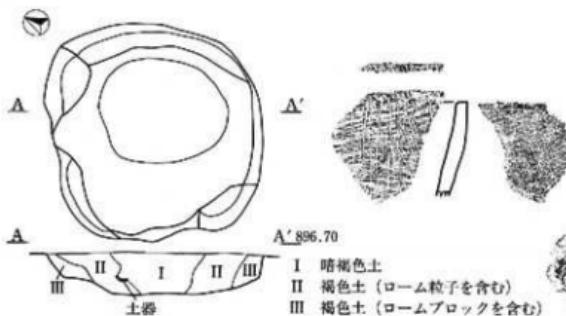
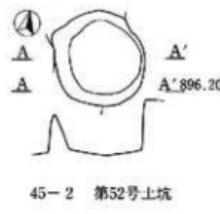
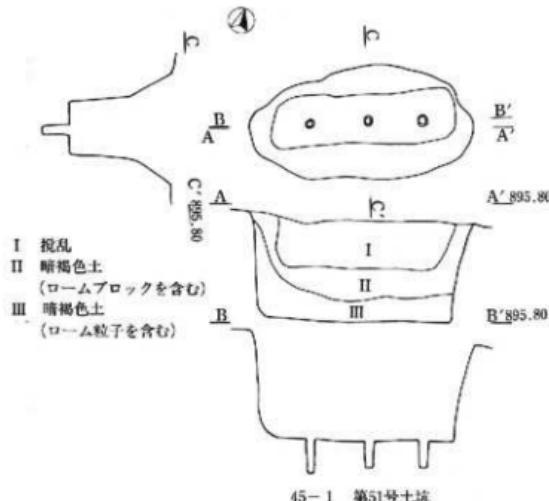
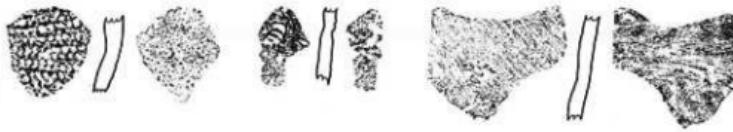


43-9 第44号土坑

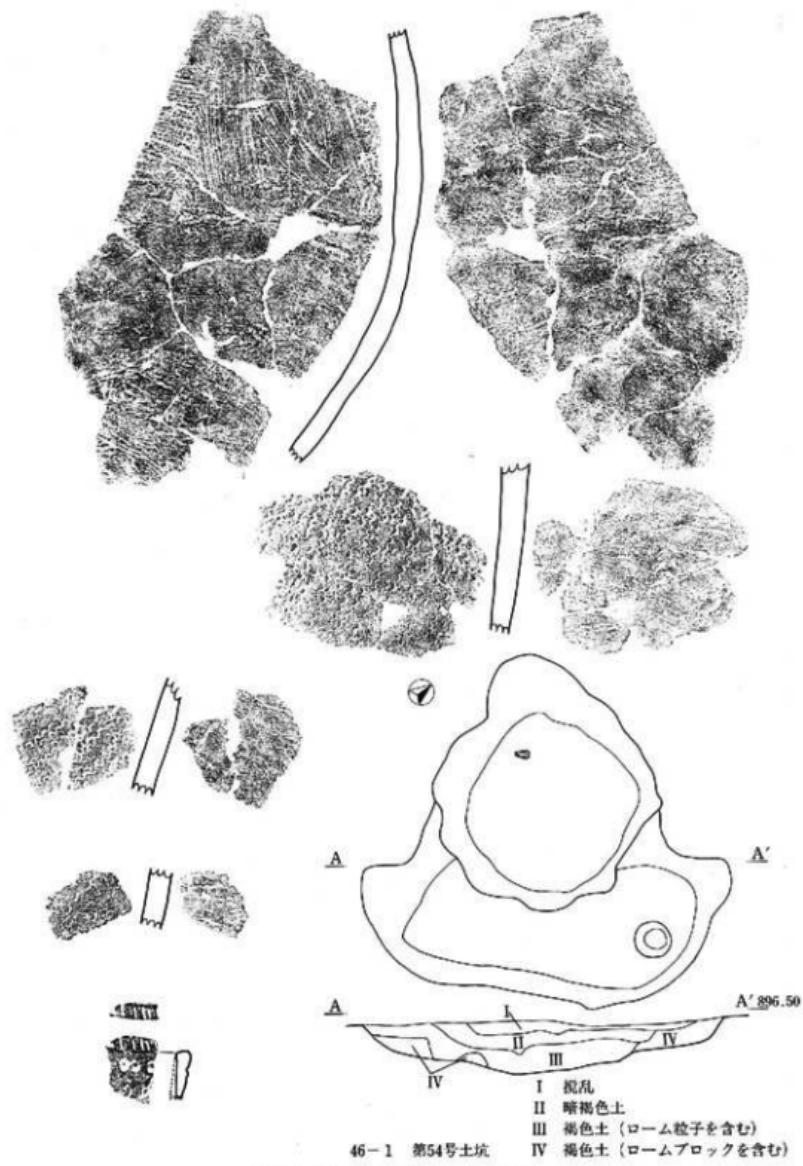
第43图 第36、37、38、39、40、41、42、43、44号土坑



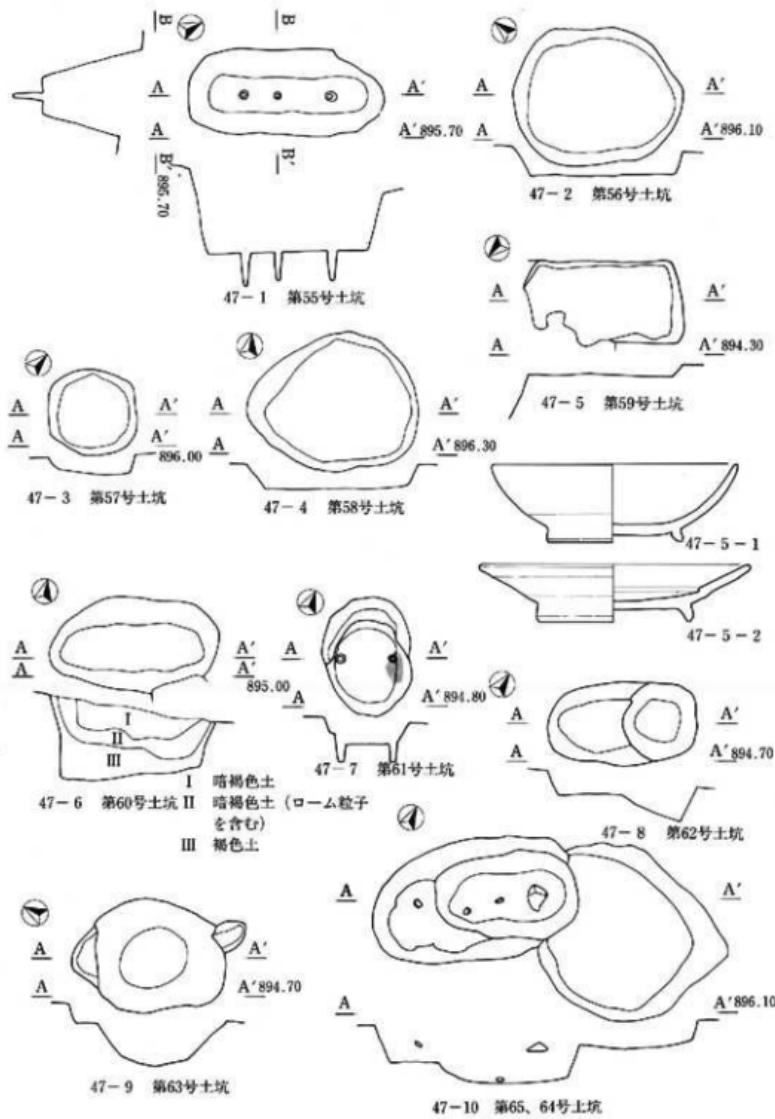
第44図 第45、46、47、48、49、50号土坑



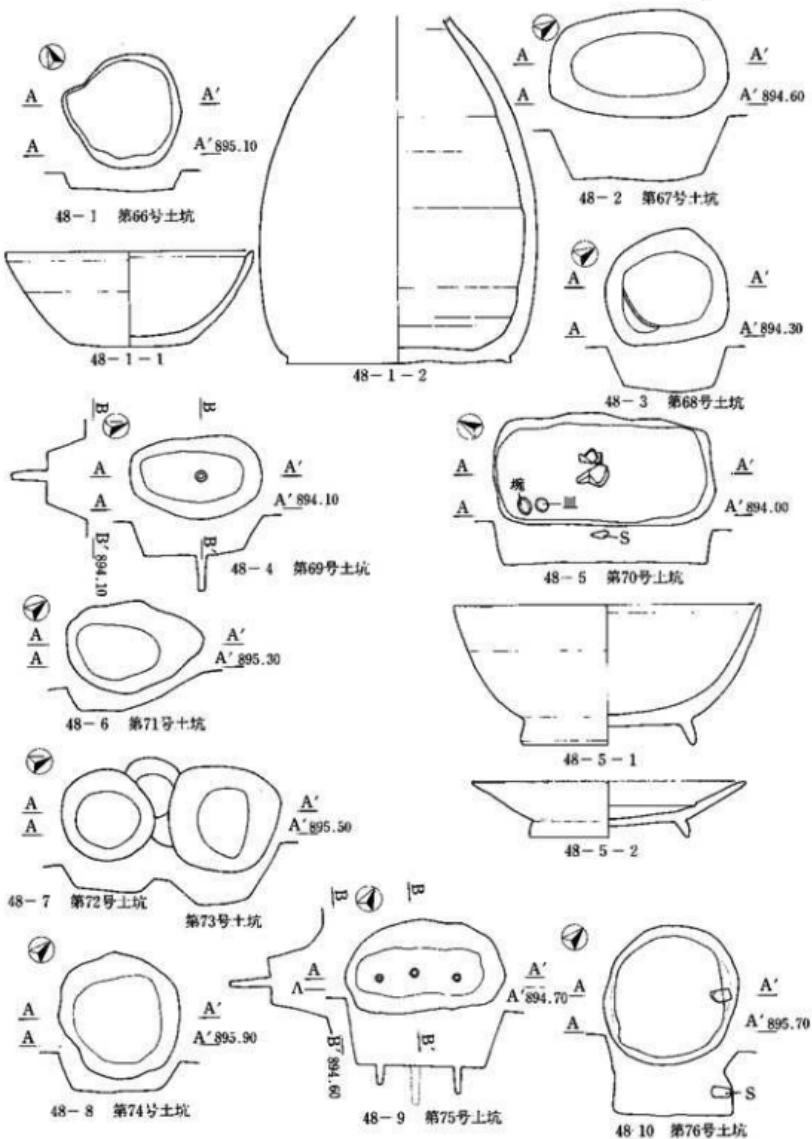
第45図 第50号土坑遺物、第51、52、53号土坑



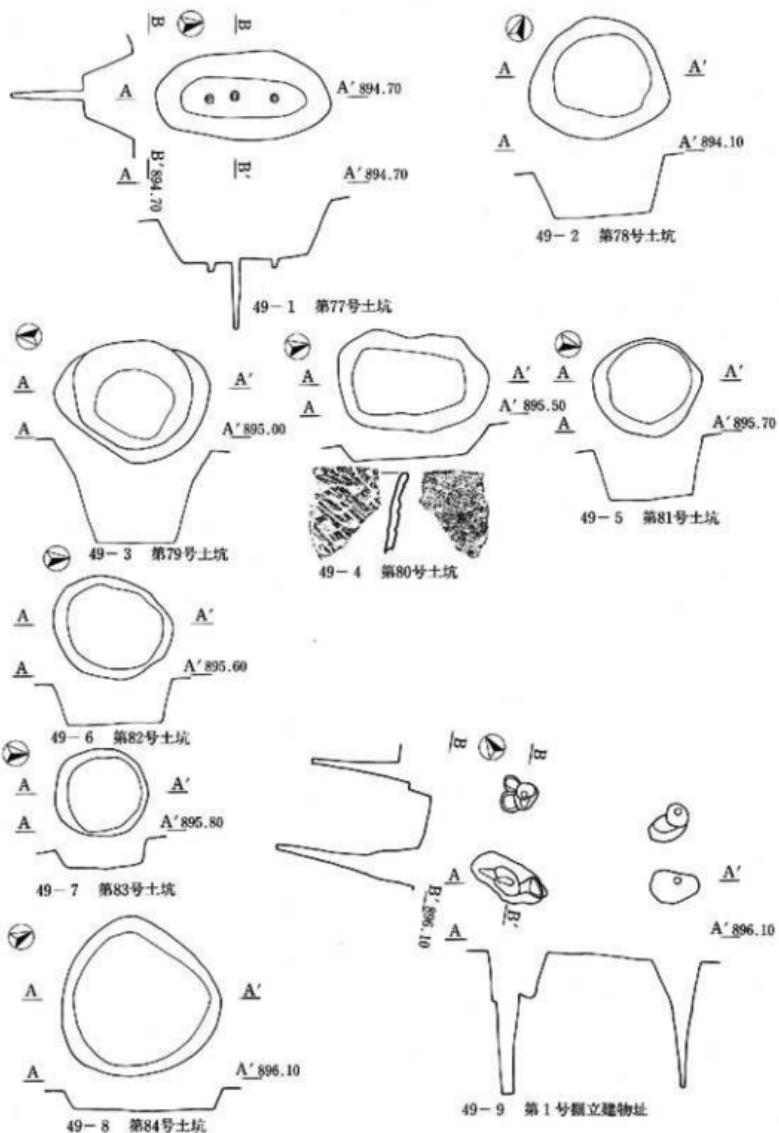
第46図 第53号土坑遺物、第54号土坑



第47圖 第55、56、57、58、59、60、61、62、63、64、65号土坑



第48圖 第66、67、68、69、70、71、72、73、74、75、76號土坑



第49圖 第77、78、79、80、81、82、83、84号土坑

図 版



① 昭和50年代の天狗山（下方の独立丘）周辺、中央上方左寄りが蓼科山



② 平成2年秋の天狗山を南側から望む

図版 2



① 調査前の天狗山山頂から芦沢方面を望む



② 見学に訪れた金沢保育園児



③ 金沢地区区長会による観察



① 金沢小学校生徒による社会勉強の作業

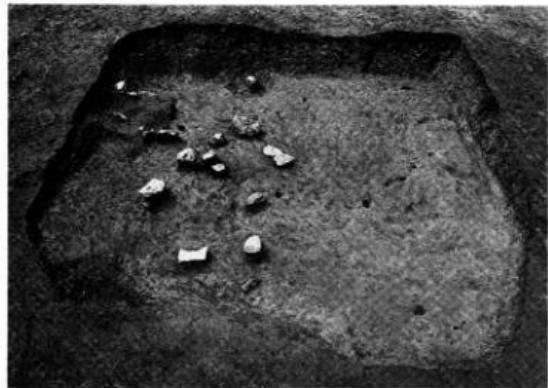


② 茅野市新入職員研修で調査区の
根切りと住居址の発掘



③ 金沢小学校PTAの発掘体験

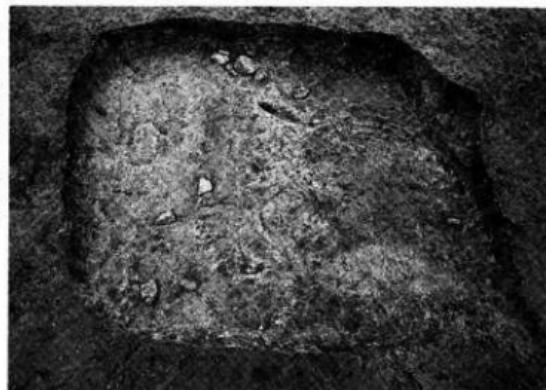
図版 4



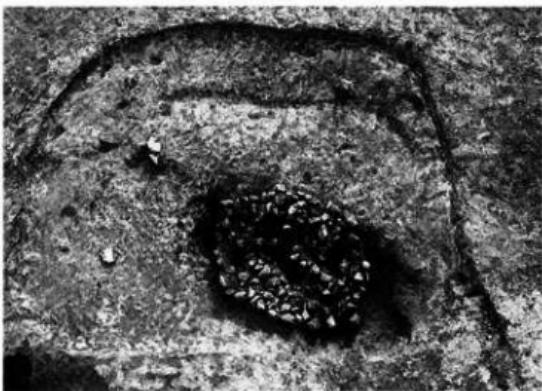
① 第一号住居址遺物検出状態



② 第一号住居址カマド検出状態



③ 第二号住居址遺構検出



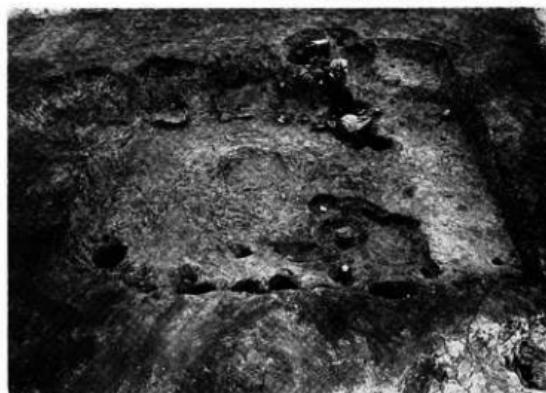
図版 6



① 第七号住居址遺物検出状態

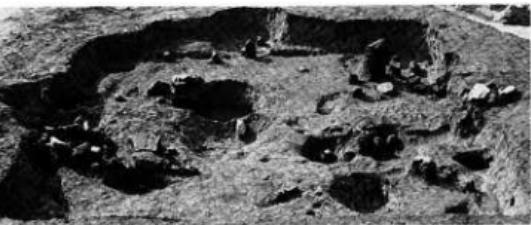


② 第八号住居址遺構検出状態



③ 第九号住居址遺物検出状態

① 第10号住居址遺物検出状態

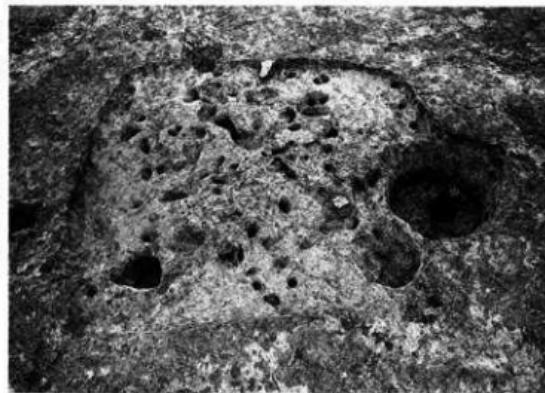
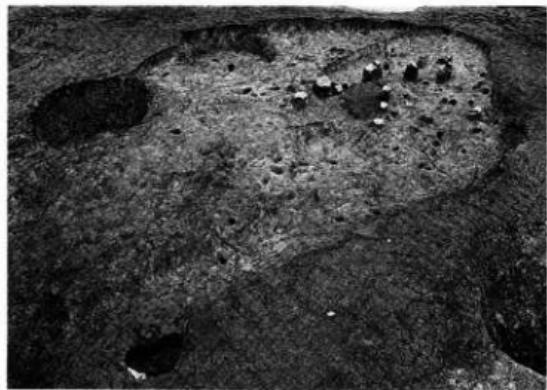


② 第11号住居址遺物検出状態



③ 第11号住居址新カマド(下) ④ 旧カマド(右)





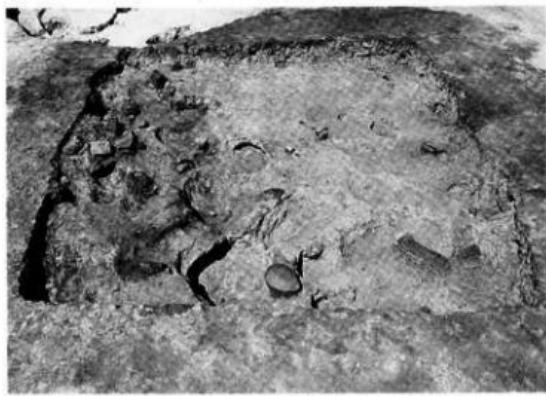
① 第十五号住居址遺物檢出狀態

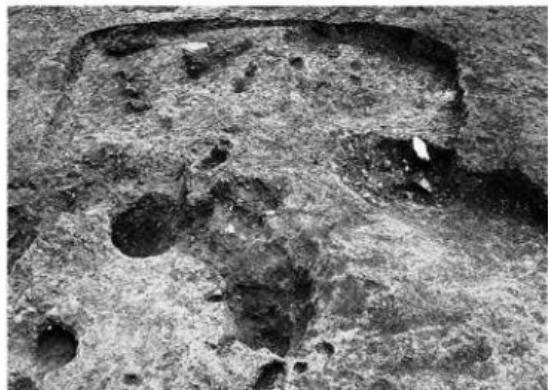


② 第十五号住居址石圈爐

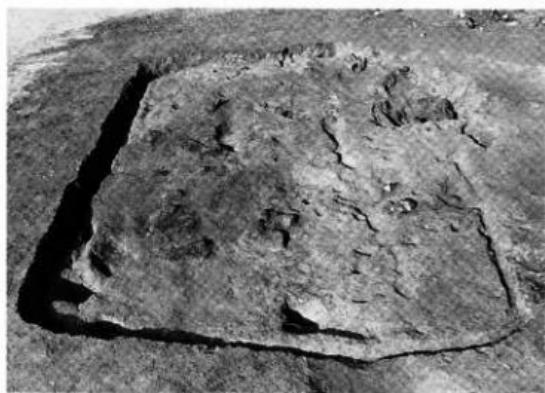


③ 第十六号住居址遺物檢出狀態





① 第十七号住居址遺物検出状態



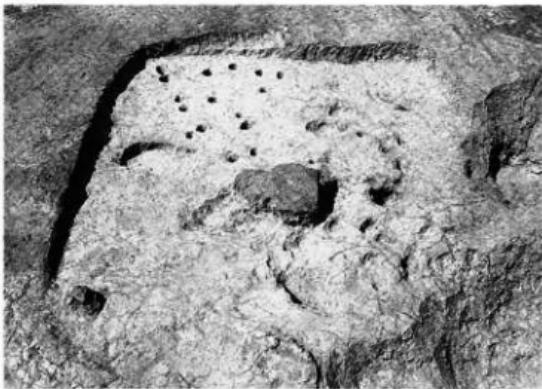
② 第十八号住居址遺物検出状態



③ 第十九号住居址遺物検出状態

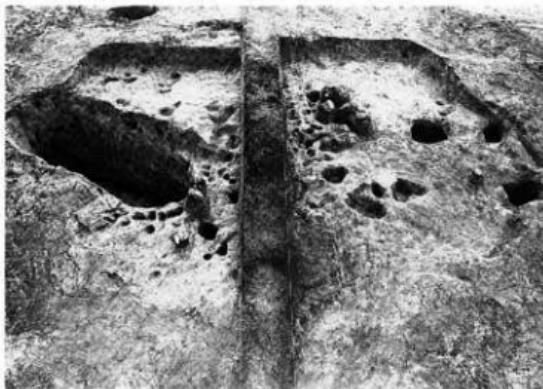
①

第二十号住居址遺構検出状態



②

第二十一号住居址遺物検出状態



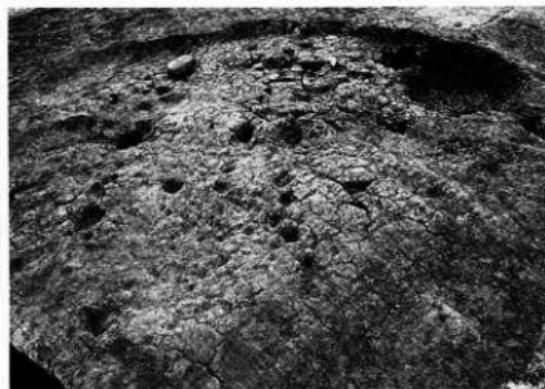
③

第二十二号住居址遺構検出状態





① 第十三号住居址遺構検出状態



② 第二十四号住居址遺構検出状態



③ 第二十五号住居址遺構検出状態

① 第二十七号住居址遺構検出状況



② 第二十八号住居址遺物検出状態



③ 第二十八号住居址カマド検出状態



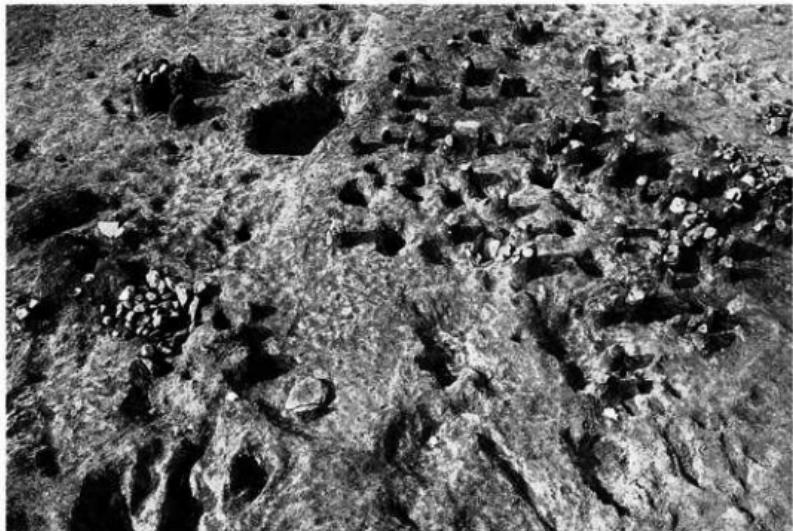
図版 14



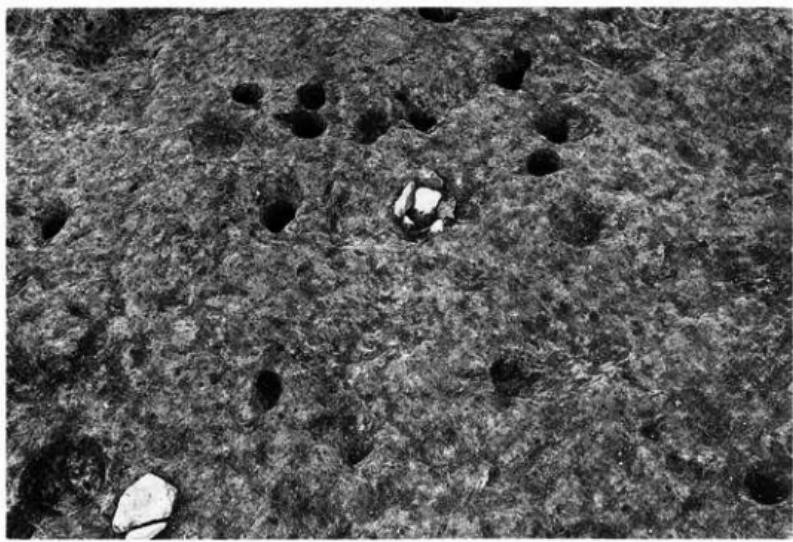
① 第29号住居址遺物検出状態



② 第30・31号住居址遺物検出状態

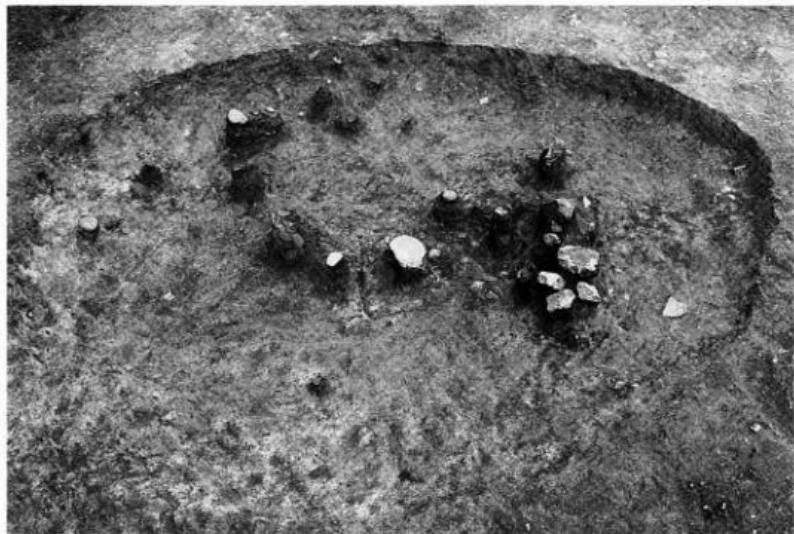


① 第26,32号住居址遺物検出状態

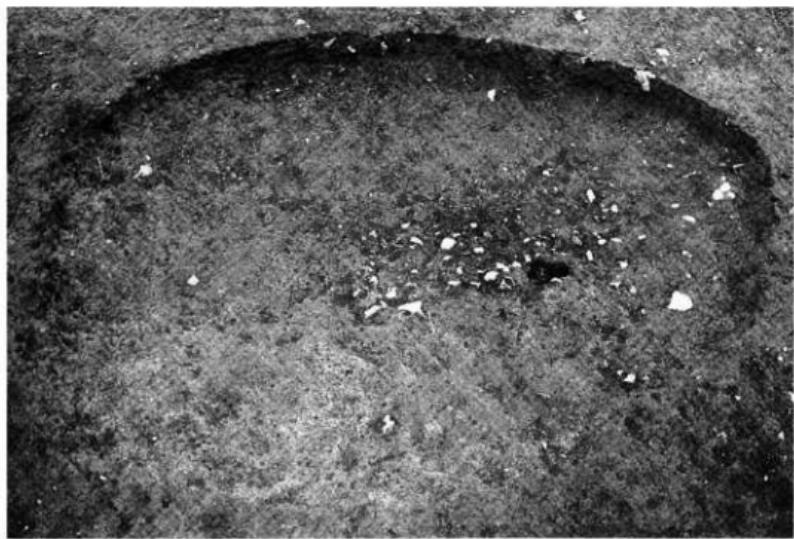


② 第32号住居址遺物検出状態

図版 16



① 第33号住居址遺物検出状態



② 第33号住居址完掘状態

① 第三十四号住居址遺構検出状態



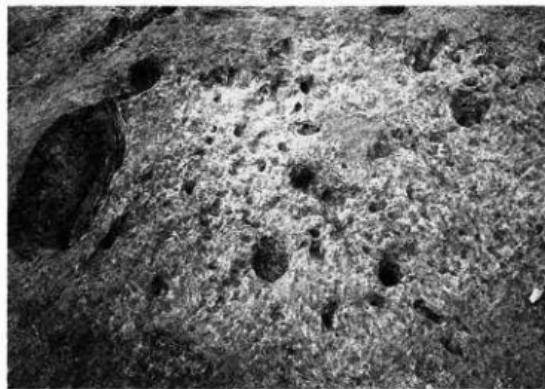
② 第三十五号住居址遺物検出状態



③ 第三十六号住居址遺物検出状態



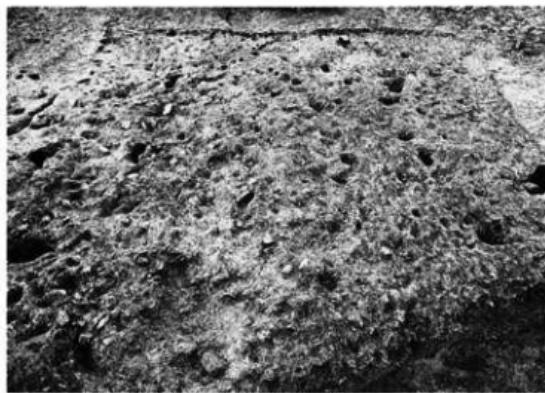
図版 18



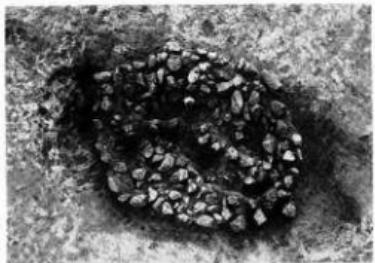
① 第三十七号住居址遺構検出状態



② 第三十八号住居址遺構検出状態



③ 第三十九号住居址遺構検出状態



① 第1号集石上面硬檢出(上)底面硬檢出(下)



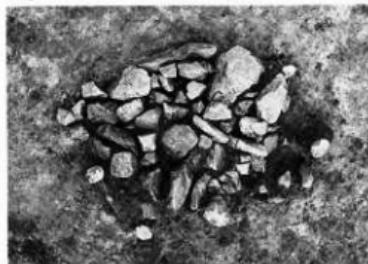
④ 第4号集石



⑤ 第5号集石



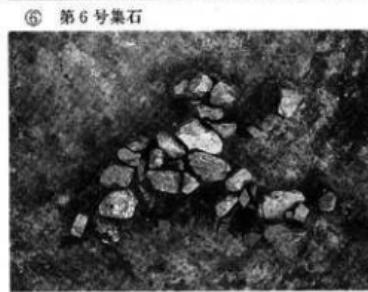
② 第2号集石



⑥ 第6号集石



③ 第3号集石



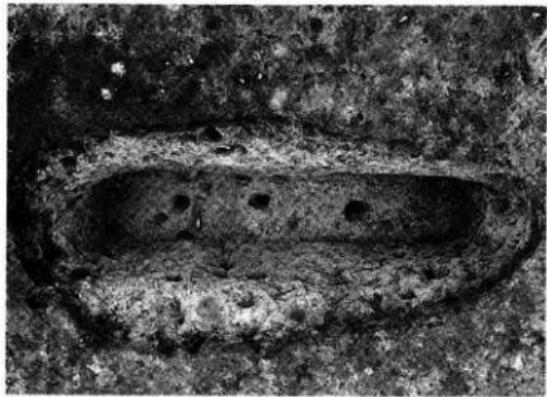
⑦ 第7号集石



① 天狗山中腹から並ぶ陷し穴(人が入っている所)



② 第七号土坑



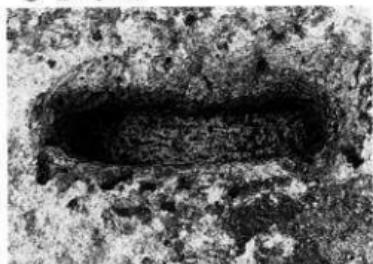
③ 第八号土坑



① 第9号土坑



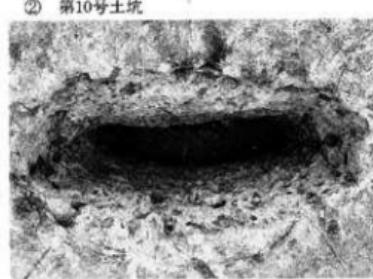
⑤ 第15号土坑



② 第10号土坑



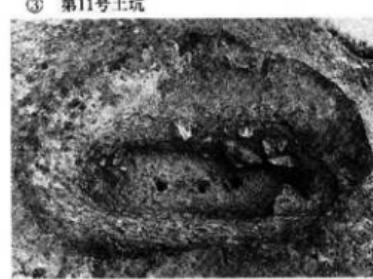
⑥ 第17号土坑



③ 第11号土坑



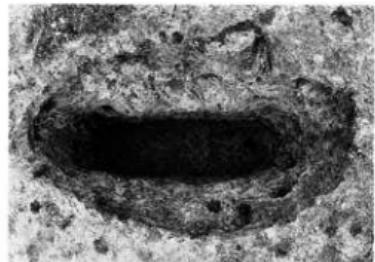
⑦ 第18号土坑



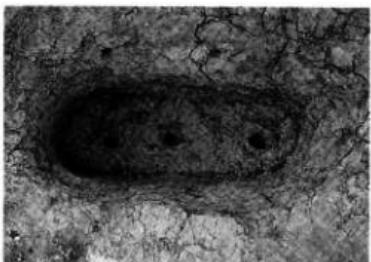
④ 第13号土坑



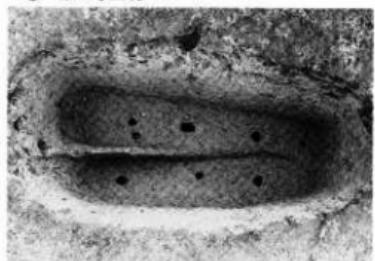
⑧ 第19号土坑



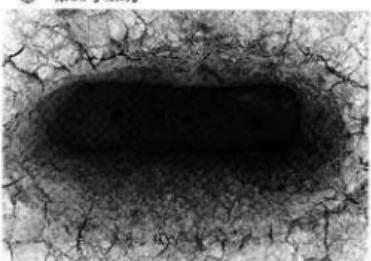
① 第26号土坑



⑤ 第36号土坑



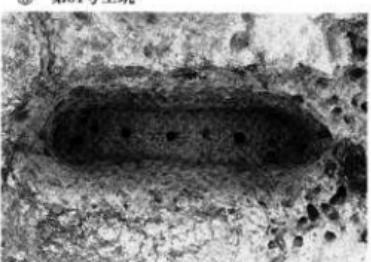
② 第28、28'号土坑



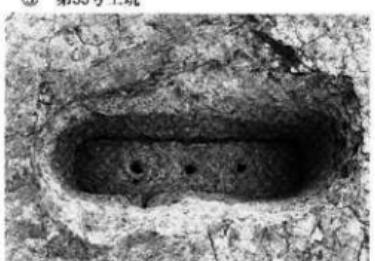
⑥ 第51号土坑



③ 第33号土坑



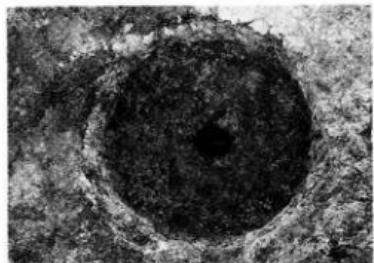
⑦ 第55号土坑



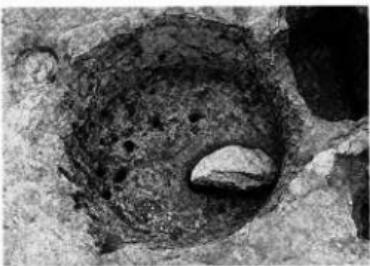
④ 第34号土坑



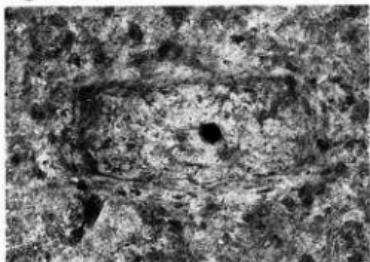
⑧ 第75号土坑



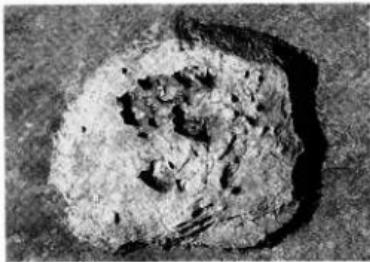
① 第37号土坑



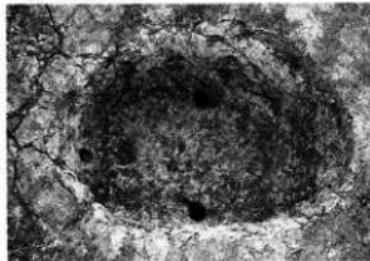
⑤ 第50号土坑



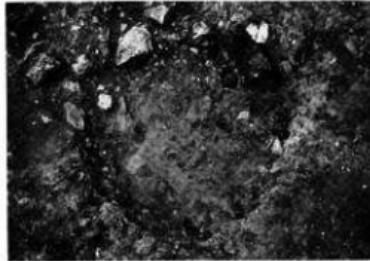
② 第69号土坑



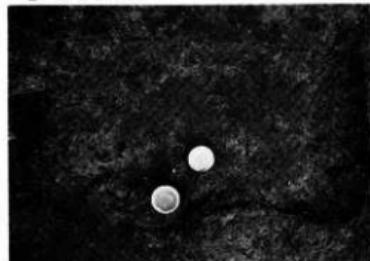
⑥ 第53号土坑遗物出土状态



③ 第61号土坑



⑦ 第66号土坑



④ 第59号土坑遗物出土状态



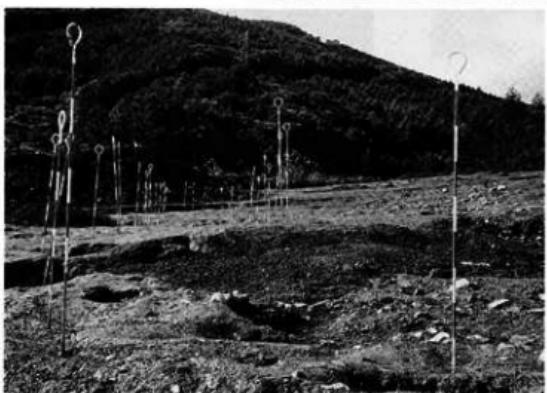
⑧ 第70号土坑遗物出土状态



① 第一号配石土坑検出状態



② 第一号塹立建物址



③ 棚列

天狗山遺跡

「金沢住宅開地」宅地造成に伴う
埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

平成5年3月22日 印刷

平成5年3月27日 発行

編集長：長野県茅野市城原2丁目6番地1号
発行：茅野市教育委員会

印刷：ほおづき書籍株式会社

